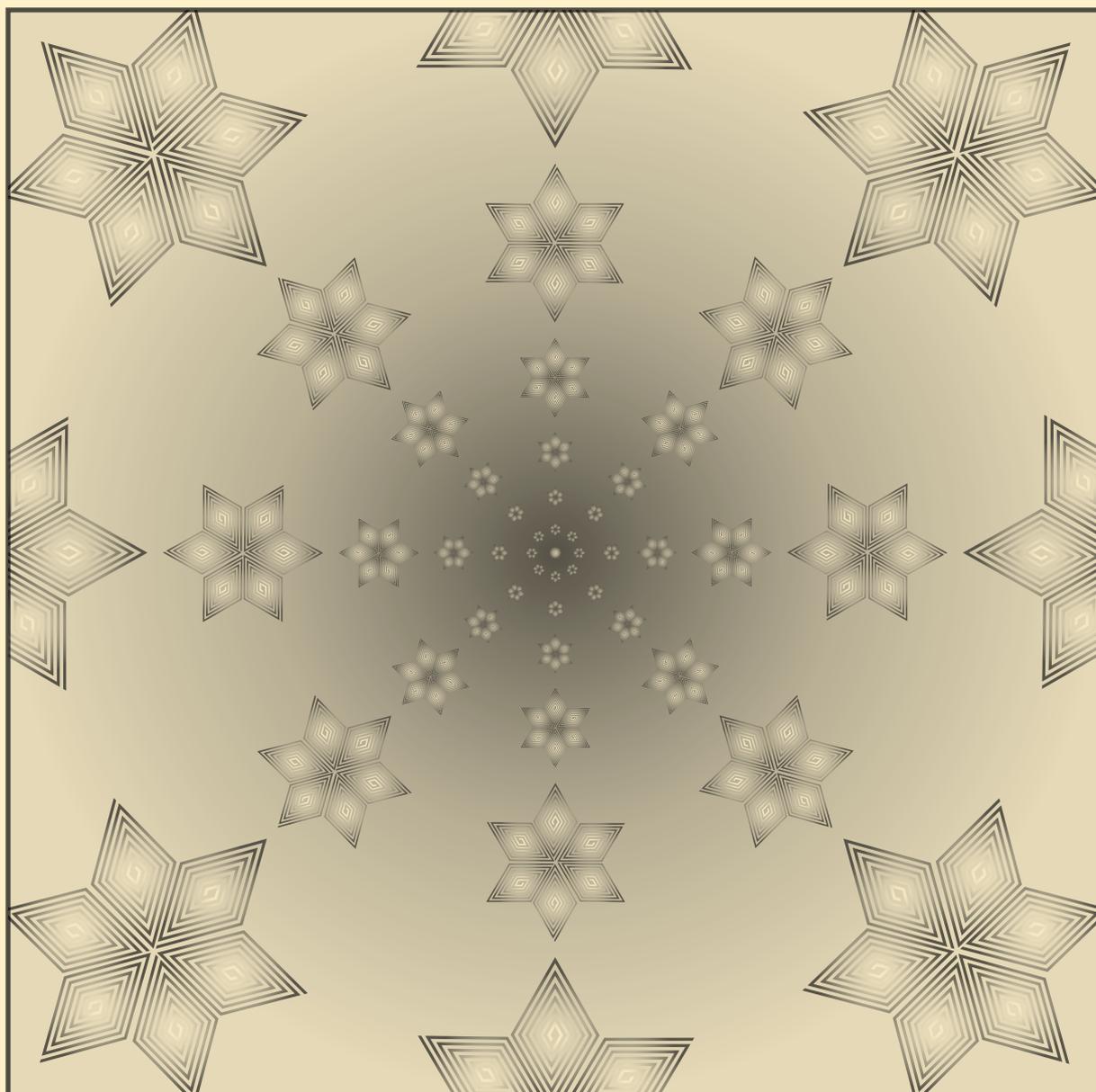


---

2013年度

---

# シラバス 免許課程



秋学期は配布しません。1年間必ず保管すること。

---

---

獨協大学

シラバスは、科目の担当教員が学期ごとの授業計画、講義概要、評価方法などを学生に周知することにより、受講する際の指針とし、授業の理解を深めることを目的に作成されたものです。

シラバスをよく読んで、計画的な履修登録をしてください。

## 【シラバスの見方】

### 1. 目次について

#### ①シラバスページの検索方法

科目の授業内容は、目次で検索してください。

目次の科目は、各課程別の授業科目表(学則別表)と同じ順序で掲載しています。

曜日時限も記載されていますが、変更になる場合があるので、教務課前掲示板で確認してください。

※入学年度によっては授業科目表とシラバスの順序が一致していない場合があります。ご注意ください。

#### ②目次の「備考」の表記

〈略称説明〉

外：外国語学部

養：国際教養学部

経：経済学部

法：法学部

独：ドイツ語学科

済：経済学科

律：法律学科

英：英語学科

営：経営学科

国：国際関係学学科

仏：フランス語学科

環：国際環境経済学科

総：総合政策学科

交：交流文化学科

#### ③履修開始学年

目次の「学年」欄に、「学期」は()内に記載されています。

### 2. シラバスページの見方(右図参照)

#### ①入学年度

03年度以降・・・2003～2013年度入学者

07年度以降・・・2007～2013年度入学者

08年度以降・・・2008～2013年度入学者

09年度以前・・・2003～2009年度入学者

09年度以降・・・2009～2013年度入学者

10年度以降・・・2010～2013年度入学者

11年度以前・・・2003～2011年度入学者

12年度以降・・・2012～2013年度入学者

13年度以降・・・2013年度以降入学者

#### ②入学年度、学部学科・適用年度に対応した科目名

#### ③授業の目的や講義全体の説明、学生への要望

#### ④学期の授業計画

各回ごとの講義のテーマ、内容を記載しています。

授業計画回数と実際の回数は必ずしも一致しません。

#### ⑤授業で使用するテキスト、参考文献

#### ⑥評価方法

①	②	担当者
講義目的、講義概要	授業計画	
③	④	
<b>春学期</b>		
テキスト、参考文献	評価方法	
⑤	⑥	

①	②	担当者
講義目的、講義概要	授業計画	
③	④	
<b>秋学期</b>		
テキスト、参考文献	評価方法	
⑤	⑥	

### 3. 注意事項

#### ①履修科目

入学年度や学部学科により、履修する科目及び科目名が異なります。

免許科目の履修に際しては、「履修の手引(免許課程)」で履修科目を確認してください。

#### ②定員

定員を設けている科目があります。各学部・学科『授業時間割表』の『「免許課程」履修上の注意事項』の「受講制限について」を参照してください。

# 教職課程授業科目(2012年度以前入学者)

## 目次

### 【教職課程】—教職に関する科目—

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
教職論	06900	春	月	4	桑原 憲一	2	1(1)		1
教職論	06901	秋	月	5	桑原 憲一	2	1(1)	養は自学科 科目名で登録	1
教職論	06902	春	火	5	高瀬 幸恵	2	1(1)		2
教職論	06903	春	木	5	川村 肇	2	1(1)	養は履修不可	3
教育原論	06904	春	火	4	高瀬 幸恵	2	1(1)	再履修者用	4
教育原論	06905	秋	火	4	高瀬 幸恵	2	1(1)		4
教育原論	06907	秋	木	3	川村 肇	2	1(1)	養は自学科 科目名で登録	5
教育原論	06906	秋	火	5	高瀬 幸恵	2	1(1)		4
教職心理学／教育心理学※	06908 /19736	春	金	1	田口 雅徳	2	1(1)		6
教職心理学／教育心理学※	06909 /19738	秋	金	1	田口 雅徳	2	1(1)	養は自学科 科目名で登録	6
教職心理学／教育心理学※	06910 /19844	春	火	4	白砂 佐和子	2	1(1)	※交の該当科目	7
教職心理学／教育心理学※	06911 /19737	秋	火	4	白砂 佐和子	2	1(1)		7
教育制度	06914	春	月	5	桑原 憲一	2	2(3)		8
教育制度	06915	春	水	3	小島 優生	2	2(3)	養は自学科 科目名で登録	9
教育制度	06913	秋	水	3	小島 優生	2	2(3)		9
教育課程論	06918	春	水	2	安井 一郎	2	2(3)		10
教育課程論	06919	春	火	4	桑原 憲一	2	2(3)	養は自学科 科目名で登録	11
教育課程論	06917	秋	火	5	桑原 憲一	2	2(3)		11
ドイツ語科教科教育法Ⅰ	06920	春	火	1	金井 満	2	3(5)		12
ドイツ語科教科教育法Ⅱ	06921	秋	火	1	金井 満	2	3(5)		12
英語科教科教育法Ⅰ	20885	秋	土	2	日野 克美	2	2(3)	交のみ履修可	13
英語科教科教育法Ⅰ ／英語科教科教育法Ⅱ※	21668 /21602	春	火	5	E. 本橋	2	3(5)		14
英語科教科教育法Ⅰ ／英語科教科教育法Ⅱ※	21667 /21601	春	水	1	J. J. ダゲン	2	3(5)		15
英語科教科教育法Ⅰ ／英語科教科教育法Ⅱ※	21670 /21604	春	木	1	羽山 恵	2	3(5)	外のみ履修可	16
英語科教科教育法Ⅰ ／英語科教科教育法Ⅱ※	21669 /21603	春	月	5	浅岡 千利世	2	3(5)	受講定員あり	17
英語科教科教育法Ⅱ ／英語科教科教育法Ⅲ※	21672 /21606	秋	火	5	E. 本橋	2	3(5)	※交の該当科目	14
英語科教科教育法Ⅱ ／英語科教科教育法Ⅲ※	21673 /21607	秋	水	1	J. J. ダゲン	2	3(5)		15
英語科教科教育法Ⅱ ／英語科教科教育法Ⅲ※	21671 /21605	秋	木	1	羽山 恵	2	3(5)		16
英語科教科教育法Ⅱ ／英語科教科教育法Ⅲ※	21674 /21608	秋	月	5	浅岡 千利世	2	3(5)		17
英語科教科教育法Ⅰ	14024	秋	火	3	安間 一雄	2	2(3)		18
英語科教科教育法Ⅱ	22259	春	水	2	安間 一雄	2	3(5)		19
英語科教科教育法Ⅱ	14025	春	水	2	臼井 芳子	2	3(5)	養・経・法 のみ履修可	20
英語科教科教育法Ⅲ	22260	秋	水	2	安間 一雄	2	3(5)		19
英語科教科教育法Ⅲ	14026	秋	水	2	臼井 芳子	2	3(5)		20
フランス語科教科教育法Ⅰ	06932	春	木	1	中村 公子	2	3(5)		21
フランス語科教科教育法Ⅱ	06933	秋	木	1	中村 公子	2	3(5)		21
社会科教育法Ⅰ	06934	春	月	1	秋本 弘章	2	2(3)		22
社会科教育法Ⅱ	06935	春	火	2	秋本 弘章	2	3(5)		23
社会科教育法Ⅲ	06936	秋	火	2	秋本 弘章	2	3(5)		23
地理・歴史科教育法Ⅰ	06939	秋	土	1	鈴木 孝	2	2(3)		24
地理・歴史科教育法Ⅱ	06940	秋	木	1	秋本 弘章	2	3(5)		25
地理・歴史科教育法Ⅲ	06941	春	月	5	會田 康範	2	3(5)		26
公民科教育法Ⅰ	06937	春	水	3	海野 省治	2	3(5)		27
公民科教育法Ⅱ	06938	秋	水	3	海野 省治	2	3(5)		27

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
情報科教育法Ⅰ	06942	春	月	2	秋本 弘章	2	3(5)		28
情報科教育法Ⅱ	06943	秋	月	2	秋本 弘章	2	3(5)		28
教科教育法特論Ⅰ	09110	春	月	4	安井 一郎	2	3(5)		29
教科教育法特論Ⅰ	06944	春	木	2	安井 一郎	2	3(5)		29
教科教育法特論Ⅱ	09111	春	木	2	J. J. ダゲン	2	3(5)	養、経・法は履修不可	30
教科教育法特論Ⅱ	06945	秋	木	2	J. J. ダゲン	2	3(5)		30
教科教育法特論Ⅱ	19419	春	水	3	安間 一雄	2	3(5)	外は履修不可	31
道徳教育の研究	06949	春	月	3	安井 一郎	2	2(3)		32
道徳教育の研究	06947	春	木	3	小島 優生	2	2(3)		33
道徳教育の研究	06948	秋	木	3	小島 優生	2	2(3)		33
特別活動／特別活動論※	06952 /19740	春	土	4	及川 良一	2	2(3)		34
特別活動／特別活動論※	06953 /19741	秋	土	4	及川 良一	2	2(3)	※交・総 の該当科目	34
特別活動／特別活動論※	06950 /19739	秋	月	4	桑原 憲一	2	2(3)		35
教育方法学	06955	春	火	1	安井 一郎	2	2(3)		36
教育方法学	06957	秋	水	1	安井 一郎	2	2(3)		36
生徒指導法	06961	春	水	4	海野 省治	2	2(3)		37
生徒指導法	06960	秋	水	4	海野 省治	2	2(3)		37
生徒指導法	06958	春	火	5	桑原 憲一	2	2(3)		38
学校カウンセリング	06963	春	木	2	瀧本 孝雄	2	2(3)	養は自学科 科目名で登録	39
学校カウンセリング	06965	秋	木	2	瀧本 孝雄	2	2(3)		39
学校カウンセリング	06962	秋	木	4	鈴木 乙史	2	2(3)		40
総合演習※	14260	春	-	-	教職課程	2	3(5)	※09年度以前 入学者該当科目	41
教育実習論Ⅰ(事前指導) ／教育実習論(事前・事後指導)※	21838 /06976	秋	月	3	安井 一郎	2	3(5)		42
教育実習論Ⅰ(事前指導) ／教育実習論(事前・事後指導)※	08752 /06977	秋	火	1	安井 一郎	2	3(5)	受講定員あり	42
教育実習論Ⅰ(事前指導) ／教育実習論(事前・事後指導)※	08754 /06979	秋	水	1	岩崎 充益	2	3(5)	※10年度以降 入学者該当科目	43
教育実習論Ⅰ(事前指導) ／教育実習論(事前・事後指導)※	08753 /06978	秋	水	4	岩崎 充益	2	3(5)		43
教育実習論Ⅰ(事前指導) ／教育実習論(事前・事後指導)※	08750 /06975	春	木	4	小島 優生	2	3(5)	春・木4は特別な 事情がある者の み可	44
教育実習論Ⅰ(事前指導) ／教育実習論(事前・事後指導)※	08749 /06974	秋	金	3	小島 優生	2	3(5)		44
教育実習論Ⅰ(事前指導) ／教育実習論(事前・事後指導)※	08751 /21839	秋	木	4	川村 肇	2	3(5)		46
教育実習論Ⅱ(事後指導)	09113	春	木	4	小島 優生	2	4(7)		45
教育実習論Ⅱ(事後指導) ／教職実践演習(中・高)※	06981 /22253	秋	金	3	小島 優生	2	4(7)	受講定員あり	46
教育実習論Ⅱ(事後指導) ／教職実践演習(中・高)※	09112 /22249	秋	水	2	安井 一郎	2	4(7)		46
教育実習論Ⅱ(事後指導) ／教職実践演習(中・高)※	12783 /22248	秋	木	2	安井 一郎	2	4(7)	※10年度以降 入学者該当科目	46
教育実習論Ⅱ(事後指導) ／教職実践演習(中・高)※	19820 /22252	秋	火	4	桑原 憲一	2	4(7)	春・木4は特別な 事情がある者の み可	46
教育実習論Ⅱ(事後指導) ／教職実践演習(中・高)※	06980 /22250	秋	月	1	秋本 弘章	2	4(7)		46
教育実習論Ⅱ(事後指導) ／教職実践演習(中・高)※	12782 /22251	秋	木	4	川村 肇	2	4(7)		46
介護ボランティアの理論と実践	06997	春	月	3	門 美由紀	2	2(3)		47
介護ボランティアの理論と実践	09109	春	月	4	門 美由紀	2	2(3)		47
介護ボランティアの理論と実践	12781	秋	水	2	山岸 倫子	2	2(3)		47
介護ボランティアの理論と実践	12780	秋	水	3	山岸 倫子	2	2(3)		47
教育実習Ⅰ	07608	集中	-	-	各担当教員	2	4(7)		-
教育実習Ⅱ	07609	集中	-	-	各担当教員	2	4(7)		-

## 【教職課程】 —教科に関する科目—

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
日本史概説Ⅰ	06982	春	月	4	會田 康範	2	1(1)		48
日本史概説Ⅱ	06983	秋	月	4	會田 康範	2	1(1)		48
外国史概説Ⅰ	06984	秋	金	5	兼田 信一郎	2	1(1)		49
外国史概説Ⅱ	06985	春	金	3	久慈 栄志	2	1(1)		50
地理学概説Ⅰ	06986	春	火	1	秋本 弘章	2	1(1)		51
地理学概説Ⅱ	06987	秋	火	1	秋本 弘章	2	1(1)		51
地誌学概説Ⅰ	06988	春	水	1	秋本 弘章	2	1(1)		52
地誌学概説Ⅱ	06989	秋	水	1	秋本 弘章	2	1(1)		52
法律学概説Ⅰ	07023	春	火	3	吉川 信將	2	2(3)	経・法は履修不可	53
法律学概説Ⅱ	07024	秋	火	3	木藤 茂	2	2(3)	経・法は履修不可	53
政治学概説Ⅰ	07025	春	木	2	杉田 孝夫	2	2(3)	経・法は履修不可	54
政治学概説Ⅱ	07026	秋	木	2	杉田 孝夫	2	2(3)	経・法は履修不可	54
社会学概説Ⅰ	07027	春	月	4	木本 玲一	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	55
社会学概説Ⅱ	07028	秋	土	1	岡村 圭子	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	55
哲学概説Ⅰ	07029	春	火	5	河口 伸	2	2(3)		56
哲学概説Ⅱ	07030	秋	火	5	河口 伸	2	2(3)		56
倫理学概説Ⅰ	07031	春	月	3	川口 茂雄	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	57
倫理学概説Ⅱ	07032	秋	月	4	川口 茂雄	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	57
宗教学概説Ⅰ	07033	春	木	5	河口 伸	2	2(3)		58
宗教学概説Ⅱ	07034	秋	木	5	河口 伸	2	2(3)		58
心理学概説Ⅰ	07104	春	木	2	田口 雅徳	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	59
心理学概説Ⅱ	07105	秋	木	4	田口 雅徳	2	2(3)	養は自学科科目名で登録	59

# 教職課程授業科目(2013年度以降入学者)

## 目次

### 【教職課程】—教職に関する科目—

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
教職論	06900	春	月	4	桑原 憲一	2	1(1)		1
教職論	06901	秋	月	5	桑原 憲一	2	1(1)	養は自学科 科目名で登録	1
教職論	06902	春	火	5	高瀬 幸恵	2	1(1)		2
教職論	06903	春	木	5	川村 肇	2	1(1)	養は履修不可	3
教育原論	06904	春	火	4	高瀬 幸恵	2	1(1)	再履修者用	4
教育原論	06905	秋	火	4	高瀬 幸恵	2	1(1)		4
教育原論	06907	秋	木	3	川村 肇	2	1(1)	養は自学科 科目名で登録	5
教育原論	06906	秋	火	5	高瀬 幸恵	2	1(1)		4
教育心理学	19736	春	金	1	田口 雅徳	2	1(1)		6
教育心理学	19738	秋	金	1	田口 雅徳	2	1(1)	養は自学科	6
教育心理学	19844	春	火	4	白砂 佐和子	2	1(1)	科目名で登録	7
教育心理学	19737	秋	火	4	白砂 佐和子	2	1(1)		7

# 【教職課程】 —教科に関する科目—

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
日本史概説Ⅰ	06982	春	月	4	會田 康範	2	1(1)		48
日本史概説Ⅱ	06983	秋	月	4	會田 康範	2	1(1)		48
外国史概説Ⅰ	06984	秋	金	5	兼田 信一郎	2	1(1)		49
外国史概説Ⅱ	06985	春	金	3	久慈 栄志	2	1(1)		50
地理学概説Ⅰ	06986	春	火	1	秋本 弘章	2	1(1)		51
地理学概説Ⅱ	06987	秋	火	1	秋本 弘章	2	1(1)		51
地誌学概説Ⅰ	06988	春	水	1	秋本 弘章	2	1(1)		52
地誌学概説Ⅱ	06989	秋	水	1	秋本 弘章	2	1(1)		52
社会学概説Ⅰ	07027	春	月	4	木本 玲一	2	1(1)	環は履修不可・養は自	55
社会学概説Ⅱ	07028	秋	土	1	岡村 圭子	2	1(1)	学科科目名で登録	55
倫理学概説Ⅰ	07031	春	月	3	川口 茂雄	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	57
倫理学概説Ⅱ	07032	秋	月	4	川口 茂雄	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	57
心理学概説Ⅰ	07104	春	木	2	田口 雅徳	2	1(1)	養は自学科科目名で登録	59
西洋史Ⅰ	22808	秋	金	3	佐藤 唯行	2	1(1)	養は履修不可	60
西洋史Ⅱ	22809	春	金	3	佐藤 唯行	2	1(1)	養は履修不可	60
西洋史Ⅰ	22806	春	水	3	増谷 英樹	2	1(1)	養は履修不可	61
西洋史Ⅱ	22807	秋	水	3	増谷 英樹	2	1(1)	養は履修不可	61
東洋史Ⅰ	22810	春	木	3	熊谷 哲也	2	1(1)	養は履修不可	62
東洋史Ⅱ	22811	秋	木	3	熊谷 哲也	2	1(1)	養は履修不可	62
地理学Ⅰ	22814	春	水	2	秋本 弘章	2	1(1)	経は履修不可	63
地理学Ⅱ	22815	秋	水	2	秋本 弘章	2	1(1)	経は履修不可	63
地理学Ⅰ	22816	春	金	4	北崎 幸之助	2	1(1)	養・経は履修不可	64
地理学Ⅱ	22817	秋	金	4	北崎 幸之助	2	1(1)	養・経は履修不可	64
地誌学Ⅰ	22818	春	木	3	飯嶋 曜子	2	1(1)	独・養・経は履修不可	65
地誌学Ⅱ	22819	秋	木	3	飯嶋 曜子	2	1(1)	独・養・経は履修不可	65
国際法Ⅰ	22820	春	月	1	一之瀬 高博	2	1(1)	法は履修不可	66
国際法Ⅱ	22821	秋	月	1	一之瀬 高博	2	1(1)	法は履修不可	66
日本国憲法	22823	春	火	2	加藤 一彦	2	1(1)	法は履修不可	67
日本国憲法	22824	秋	火	2	加藤 一彦	2	1(1)	法は履修不可	67
日本国憲法	22822	春	火	1	古関 彰一	2	1(1)	法は履修不可	68
英語通訳	22825	春	土	2	中島 直美	2	1(1)	外は履修不可	69
英語通訳	22826	秋	土	2	中島 直美	2	1(1)	外は履修不可	69
コンピュータ入門a	06969	春	金	3	黄 海湘	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
コンピュータ入門b	06970	秋	金	3	黄 海湘	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
コンピュータ入門a	06971	春	金	4	黄 海湘	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
コンピュータ入門b	06972	秋	金	4	黄 海湘	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
コンピュータ入門a	06968	春	火	3	久東 義典	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
コンピュータ入門b	06967	秋	火	3	久東 義典	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
コンピュータ入門a	06973	春	金	3	杉村 和枝	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
コンピュータ入門b	06966	秋	金	3	杉村 和枝	2	1(1)	外・経・養は履修不可	70
社会経済史a	22837	春	木	4	新井 孝重	2	1(1)	養・経は履修不可	71
社会経済史b	22838	秋	木	4	新井 孝重	2	1(1)	養・経は履修不可	71
社会思想史a	22839	春	火	4	市川 達人	2	1(1)	養・経は履修不可	72
社会思想史b	22840	秋	火	4	市川 達人	2	1(1)	養・経は履修不可	72

## 司書課程授業科目(2011年度以前入学者)

### 【司書課程】

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
生涯学習概論	06998	秋	火	4	阪本 陽子	2	2(3)		73
図書館概論	06999	春	木	4	井上 靖代	2	2(3)		74
図書館経営論	07036	秋	木	4	井上 靖代	2	2(3)		74
図書館サービス論	07035	春	金	2	井上 靖代	2	2(3)		75
情報サービス論a	08830	春	月	3	福田 求	2	3(5)	受講定員あり	76
情報サービス論a	08747	春	月	4	福田 求	2	3(5)	受講定員あり	76
情報サービス論b	08748	秋	水	3	気谷 陽子	2	3(5)	受講定員あり	76
情報サービス論b	08831	秋	水	4	気谷 陽子	2	3(5)	受講定員あり	76
情報検索演習	07005	春	火	3	福田 求	2	3(5)	受講定員あり	77
情報検索演習	07004	秋	月	4	福田 求	2	3(5)	受講定員あり	77
情報検索演習	07003	秋	月	3	堀江 郁美	2	3(5)	受講定員あり	78
図書館資料論	07006	春	金	1	井上 靖代	2	2(3)		79
専門資料論	07007	秋	水	2	井上 靖代	2	2(3)		79
資料組織概説	07008	春	月	1	小黒 浩司	2	3(5)		80
資料組織演習	07009	秋	月	1	小黒 浩司	2	3(5)	受講定員あり	80
資料組織演習	07010	秋	月	2	小黒 浩司	2	3(5)	受講定員あり	80
児童サービス論	07011	秋	金	1	井上 靖代	2	2(3)		81
図書及び図書館史	07012	春	月	2	小黒 浩司	2	2(3)		82

### 【司書教諭課程】

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
学校経営と学校図書館	07016	春	木	1	井上 靖代	2	2(3)		85
学校図書館メディアの構成	07017	秋	木	2	井上 靖代	2	2(3)		85
学習指導と学校図書館	07019	秋	木	1	井上 靖代	2	2(3)		86
読書と豊かな人間性	07020	春	木	2	井上 靖代	2	2(3)		87
情報メディアの活用	07021	秋	火	3	福田 求	2	2(3)		88
情報メディアの活用	07022	秋	火	4	福田 求	2	2(3)		88

# 司書課程授業科目(2012年度以降入学者)

## 【司書課程】

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
生涯学習概論	22670	秋	火	4	阪本 陽子	2	2(3)		73
図書館概論	22671	春	木	4	井上 靖代	2	2(3)		74
図書館制度・経営論	22672	秋	木	4	井上 靖代	2	2(3)		74
図書館サービス概論	22673	春	金	2	井上 靖代	2	2(3)		75
児童サービス論	22677	秋	金	1	井上 靖代	2	2(3)		81
図書館情報資源概論	22674	春	金	1	井上 靖代	2	2(3)		79
図書館基礎特論	22675	秋	金	3	井上 靖代	2	3(5)		83
図書館サービス特論	22676	秋	金	2	井上 靖代	2	3(5)		84
図書館情報資源特論	22679	秋	水	2	井上 靖代	2	2(4)		79
図書・図書館史	22678	春	月	2	小黒 浩司	2	2(3)		82

## 【司書教諭課程】

科目名	時間割 コード	学期 区分	曜日	時限	主担当教官	単位 数	対象 年次	備考	ページ
学校経営と学校図書館	07016	春	木	1	井上 靖代	2	2(3)		85
学校図書館メディアの構成	07017	秋	木	2	井上 靖代	2	2(3)		85
学習指導と学校図書館	07019	秋	木	1	井上 靖代	2	2(3)		86
読書と豊かな人間性	07020	春	木	2	井上 靖代	2	2(3)		87
情報メディアの活用	07021	秋	火	3	福田 求	2	2(3)		88
情報メディアの活用	07022	秋	火	4	福田 求	2	2(3)		88

## 2013年度 免許課程 年間行事予定 教職課程、司書教諭課程

	行 事	対 象	日 時	教室、備考等
1 学 年	1 教職課程ガイダンス	全学部	4月4日(木) 9:30～10:30	E-102:外国語学部 E-101:国際教養学部、経済学部、法学部
	2 教職課程登録(課程費納付)	全学部	4月5日(金)～12日(金)	申請書提出不要
	3 司書・司書教諭課程ガイダンス	全学部	12月5日(木) 12:25～13:10	A-408

2 学 年	4 教職課程、司書教諭課程ガイダンス	全学部	3月29日(金) 12:30～13:30	E-102
	5 教職課程、司書教諭課程登録(課程費納付)	全学部	3月29日(金)～4月12日(金)	新規登録者、申請書提出不要
	6 介護等体験申込みガイダンス	2014年度体験予定者	10月15日(火) 12:25～13:10	E-101、掲示にて詳細連絡
	7 介護等体験希望登録(実習費納付)	2014年度体験予定者	10月16日(水)～10月31日(木)	教務課免許課程係
	8 司書・司書教諭課程ガイダンス	全学部	12月5日(木) 12:25～13:10	A-408

3 学 年	9 教職課程、司書教諭課程ガイダンス	全学部	3月29日(金) 15:00～16:00	E-102
	10 教職課程、司書教諭課程登録(課程費納付)	全学部	3月29日(金)～4月12日(金)	新規登録者、申請書提出不要
	11 介護等体験開始ガイダンス	2013年度体験予定者	4月23日(火) 12:25～13:10	E-101
	12 介護等体験直前ガイダンス	2013年度体験予定者	▽①5月14日(火) ②7月9日(火) ③10月8日(火) の12:25～13:10	E-101 5・6・7月に体験予定の者は① (8・9・10月に体験予定の者は②)に出席、 11月以降に体験予定の者は③)に出席)
	13 教育実習校開拓	2014年度教育実習予定者	教職課程ガイダンス以降速やかに	各自が自主的に開拓
	14 「教育実習依頼状交付願」提出	2014年度教育実習予定者	5月13日(月)以降、開拓できた者から随時提出 (依頼状の交付は、提出週の翌々週の月曜日)	免許課程係に提出
	15 「教育実習者登録票」提出		免許課程係で受取	
	16 教育実習依頼状交付	2014年度教育実習予定者	5月27日(月)～	免許課程係で受取
	17 教育実習依頼状を実習校に持参	2014年度教育実習予定者	5月27日(月)以降随時	交付後速やかに
	18 教育実習準備セミナー	2014年度教育実習予定者	8月1日(木) 9:30～12:30 (前半90分:教育実習に備えて、 後半90分:教員採用試験に向けて)	4学年教育実習反省会と同時開催 [E-312:社会・地歴・公民・情報実習者、 E-308,311:外国語実習者]※
	19 教育実習校斡旋願提出(未開拓者)	2014年度教育実習予定者	9月24日(火)～10月8日(火)	免許課程係に提出
20 教育実習校斡旋者選考試験	2014年度教育実習予定者	10月17日(木)	教職・司書相談室	
21 司書・司書教諭課程ガイダンス	全学部	12月5日(木) 12:25～13:10	A-408	

4 学 年	22 教職課程、司書教諭課程ガイダンス	全学部	3月29日(金) 15:00～16:00	E-101
	23 教職課程、司書教諭課程登録(課程費納付)	全学部	3月29日(金)～4月12日(金)	新規登録者、申請書提出不要
	24 教育実習オリエンテーション	2013年度実習者	①3月29日(金)16:00～17:30 ②3月30日(土)1・2・3・4時限	①E-101 ②E-311 他
	25 教育実習事前指導面接	2013年度実習者	各自の教育実習開始7日前まで	教職相談時間を実施
	26 教育実習指導教員発表	2013年度実習者	5月13日(月)	掲示にて発表
	27 教育実習校との打合せ	2013年度実習者	実習2～3週間前	各自実習校に確認
	28 教育実習(中学・高校にて実施)	2013年度実習者	日程は実習校により異なる	
	29 教育実習反省会	2013年度実習者	8月1日(木) 9:30～12:30 (前半90分:教育実習反省会、 後半90分:教員採用試験に向けて)	秋実習者を含め全員出席 [E-312:社会・地歴・公民・情報実習者、 E-308,311:外国語実習者]※
	30 教育実習日誌提出	2013年度実習者	期日・提出方法は「教職実践演習(中・高)」の授業内において指示する	
	31 免許状一括申請説明会(書類配付)	全学部	10月3日(木) 12:25～13:10	E-101、掲示にて詳細連絡
	32 免許状一括申請受付(手数料納付)	全学部	10月4日(金)～10月31日(木)	免許課程係に提出
	33 教職課程、司書教諭課程修了者発表	全学部	2014年3月5日(水)	掲示板
	34 教育実習日誌返却	全学部	2014年3月5日(水)以降	免許課程係にて
	35 司書教諭課程修了証申請受付	司書教諭課程修了者	2014年3月5日(水)～20日(木)	免許課程係
	36 免許状授与(一括申請者)	全学部	2014年3月20日(木)	卒業式当日

※E-308:英語学科学籍番号下3ケタ001～200、ドイツ語学科、言語文化学科/E-311:英語学科学籍番号下3ケタ201～、フランス語学科、交流文化学科、大学院生、科目等履修生

### 司書課程

	行 事	学 年	日 時	備 考
1	司書課程ガイダンス	2～4年	3月29日(金) 11:15～12:15	E-101
2	司書課程登録	2年、(3・4年)	3月29日(金)～4月12日(金)	新規登録者、申請書提出不要
3	司書・司書教諭課程ガイダンス	全学部	12月5日(木) 12:25～13:10	A-408
4	司書課程修了者発表	4年	2014年3月5日(水)	掲示板
5	司書課程修了証授与	司書課程修了者	2014年3月20日(木)	卒業式当日

\* 上記日程は変更になる場合もあります。免許課程掲示板(教務課前)を必ず見てください。

教務課 免許課程係

\*\*\* お 知 ら せ \*\*\*

## 教職・司書相談室について

獨協大学では教職、司書、司書教諭課程履修者を強力にサポートするため、中央棟1階に教職・司書相談室を開設しています。

ここには教職、司書、司書教諭課程に関する資料や教科書・参考書が用意されています。これらは開室時間内は自由に閲覧できます。

また、同課程履修者を主たる対象に、専門家である教員が個別面談に応じています。

教員という仕事、気になる教育実習や教員採用試験、図書館で働くにはどうすれば良いか、など気になることを質問できます。

もちろん、教職、司書、司書教諭課程を登録・履修するか迷っている学生も質問可能です。

学科・学年を問わず広く開放されており、事前の予約は必要ありませんので、適宜利用してください。

なお、履修登録の方法や成績通知、教育実習の前提条件などの履修に関する質問は、東棟1階教務課免許課程係にご相談ください。

・場 所：中央棟1階

・開室時間：月～金曜日 9:00～17:00、土曜日 9:00～12:00

〔個別面談時間〕

	曜 日	時 間	担当者
教 職	月 曜	11:30～13:00	浅岡 千利世
	火 曜	—	—
	水 曜	11:30～13:00	岩崎 充益
	木 曜	11:30～13:00	秋本 弘章
	金 曜	11:30～13:00	小島 優生
司書・司書教諭	火 曜	11:30～13:00	福田 求

\*\*\* \*\* \*\*

03年度以降	教職論	担当者	桑原 憲一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、教育職員免許法に規定された教職の意義等に関する科目であり、教職課程履修の基礎的・基本的な科目として位置づけられている。本講義においては、教職の概要を理解するとともに、教職に必要な不可欠な基礎的・基本的な知識や技能を習得することを目的とする。</p> <p>本講義では、グループ討議や研究協議などを通して教職の意義、教員の身分や服務、職務の内容や必要とされる資質などについての主体的な理解を深めていく。教員が直面している諸課題についても取り上げ、教育に対する質の高い関心と教職に対する熱い情熱や崇高な使命感の醸成を図っていく。</p>		<p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：期待される教師像と目指す教師像</p> <p>第3回：教員の資質・能力</p> <p>第4回：教員養成と教員免許</p> <p>第5回：教員の任用と教育委員会</p> <p>第6回：教員の身分と服務</p> <p>第7回：教員の職務(1) 教員の日・学校運営と校務分掌</p> <p>第8回：教員の職務(2) 学習指導と生徒指導</p> <p>第9回：教員の研修</p> <p>第10回：教員の人事評価</p> <p>第11回：教職の現代的課題(1) 少年非行問題</p> <p>第12回：教職の現代的課題(2) いじめ問題</p> <p>第13回：教職の現代的課題(3) 不登校問題</p> <p>第14回：教職の現代的課題(4) 教職員事故</p> <p>第15回：様々な進路選択の問題を考える</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義毎に配布する資料 講義内容に応じて適宜紹介		平常点 (30%)、課題レポート (20%)、試験 (50%) により、出席3分の2以上の受講者を評価対象者として総合的に評価する。	

03年度以降	教職論	担当者	桑原 憲一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	教職論	担当者	高瀬 幸恵
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【目的】</b> 教職課程で学ぶ諸科目の入門として、教職の意義と教職に就く心構えを学び、さまざまな角度から教育に対する見方を鍛えることを目標とします。</p> <p><b>【概要】</b> 1. 「学級崩壊」「いじめ」「体罰」など、現代教育の抱えている諸問題を取り上げて、実態をビデオ等により確認し、参加者で討議します。こうした問題への教師の取り組みを考えることを通して、教職の意義及び教員の役割および教員の職務内容を学びます。 2. 諸問題が教育や社会に投げかけている問題を認識し、教職の役割を明確にすることで、今後の学習につなげていく道筋を理解していきます。特に体罰については、その問題点をきちんと理解することを求めます。</p> <p><b>【要望】</b> ・ビデオを見たり、グループ討議を取り入れるので、遅刻や欠席は避けてください。討論がどうしても嫌だという人はこの講義には向きません。 ・右の講義計画は、討論の進み具合等によって、変更することがあります。</p>		<p>第1回：講義の進め方の説明／本学で教職免許状が取得できる理由／教職の意義と役割 第2回：学級崩壊を考える（実態把握） ／宿題：学級崩壊への対処について 第3回：学級崩壊を考える（グループ討論） 第4回：学級崩壊を考える（グループ討論のプレゼンテーション）／宿題：少年法改正について 第5回：発達障害を考える（実態把握） ／宿題：発達障害から学ぶこと 第6回：体罰を考える（グループ討論） 第7回：体罰を考える（体罰に関する理論的問題） 第8回：体罰を考える（裁判例と実態把握） 第9回：いじめを考える（実態把握） ／宿題：いじめへの対処について 第10～11回：いじめを考える（グループ討論・発表） 第12回：教員の職務内容（研修、服務、身分保障）と職業選択の問題について 第13回：教育委員会と教員 第14回：教師の専門職性を考える 第15回：まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献は、授業中適宜紹介します。授業資料は授業内で配布、もしくは講義支援システムを利用して配布します。		期末レポートと、数回の小レポートを総合評価します。出席は、6割以上を必須とし、毎回授業で学んだことを記述してもらいます。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03 年度以降	教職論	担当者	川村 肇
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【講義目標】</b>          教職課程で学ぶ諸科目の入門として、教職の意義と教職に就く心構えを学ぶとともに、教えるということはどういうことか、子ども（あるいは人間）というものをどう見るのか、学校とは何か、学校という職場にはどのような問題があるのかなど、さまざまな角度から教育に対する見方を鍛えることを目標とします。          特に国連子どもの権利委員会から勧告されている体罰の問題については、その問題を正しく把握することが必要です。          併せて「教えるという仕事」の実態を学ぶことを通じて、働くということの持つ意味を深める機会を提供します。</p> <p><b>【講義概要】</b>          1. 主として埼玉県の教育現場の先生方、全体で 10 人程度を招いて、学校での様々な取り組みについて講義して戴きます。これを通して、教職の意義及び教員の役割および教員の職務内容を学びます。それぞれ、右の授業計画にあるようなテーマ（仮題）でお話しいただく予定です。模擬授業や、ビデオ観賞なども予定しています（ただし、先生方の都合で、順番や内容が変わることがあります。ご了承ください）。          2. 進路選択に資する各種の機会の提供を行いません。          3. 諸問題が教育や社会に投げかけている問題を認識し、教職の役割を明確にすることで、今後の学習につなげていく道筋を理解していきます。特に体罰については、その問題点をきちんと理解することを求めます。また、これを通じて、広く社会の問題にも目を向け、考えていくきっかけを作ってほしいと思っています。</p> <p><b>【受講生への要望】</b>          教職課程に登録している学生を優先しますが、履修登録に空きがあれば、教職課程に登録していない学生の参加も歓迎します。          積極的、意欲的に参加してください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス テレビ東京制作「星空の中学生とともに」</li> <li>2 松崎運之助（元夜間中学教諭） 「学ぶとは何か——夜間中学校を中心に」</li> <li>3 遠藤芳男（元定時制高校教諭） 「定時制高校の国語——詩の授業と教師の守秘義務」</li> <li>4 白鳥勲（さいたま教育文化研究所） 「貧困社会の教育（1）子どもを支える」</li> <li>5 窪岡文男（テレビ・ディレクター） 「貧困社会の教育（2）奨学金を考える」</li> <li>6 岩田彦太郎（中学校教諭） 「教師の仕事——職掌と労働実態」</li> <li>7 宮下与兵衛（元高校教諭） 「生徒の学校参加——三者協議会の取り組み」</li> <li>8 関口武（小学校教諭） 「小学校の生活指導——一年間の実践構想」</li> <li>9 嶋村純子（中学校教諭） 「中学校の教科指導（1）英語を教える」</li> <li>10 小堀俊夫（元中学校教諭） 「中学校の教科指導（2）社会科を教える」</li> <li>11 中村佛一（さいたま教育文化研究所） 「中学校の生活指導（1）子どもの自治」</li> <li>12 中村佛一（さいたま教育文化研究所） 「中学校の生活指導（2）いじめと不登校」</li> <li>13 川村 「体罰を考える」</li> <li>14 川村 「教師という職業選択」</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
高橋陽一編『新しい生活指導と進路指導』（武蔵野美術大学出版部） その他、配布プリント類によります。 参考文献は、授業中適宜紹介します		毎回の授業レポート（学んだこと、20 行程度）の提出をもって出席点とし、最終レポート（A4 判用紙で 3～4 枚）と併せて評価します。出席は 6 割が必須です。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	教育原論	担当者	高瀬 幸恵
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【目的】</b> 教育の本質を理解するために、自らの教育観を相対化しつつ、さまざまな基本的概念を学び、教育に対する考え方の基礎を養います。</p> <p><b>【概要】</b> 1. 教育の思想と歴史の概略を基礎として、子どもの権利条約や教育基本法等を素材にし、人権と子どもの権利、能力の問題、義務教育等の、教育において基本的な概念や考え方を学びます。 2. 教育と学習との関係を、ビデオ、教育の時事問題や教育実践などを教材として、様々な角度から考えていきます。</p>		<p>第1回： 講義の進め方の説明 第2回： これまでの教育体験に基づき教育について考える 第3回： 教育と人間形成（1）社会とのかかわりから 第4回： 教育と人間形成（2）個人の発達から 第5回： 教育の場について考える（社会、家庭、学校） 第6回： 学校教育の歴史（1）学校の誕生 第7回： 学校教育の歴史（2）義務教育の思想 第8回： 学校教育の歴史（3）産業社会と近代的学校 第9回： 前半期の学習のまとめと試験 第10回： 日本における近代学校の歴史 第11回： 戦後教育改革 第12回： 戦後教育理念の変遷と現代の教育 第13回： 現代の教育改革の動向 第14回： 学生による調査報告 第15回： 後半期の学習のまとめと試験</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献は、授業中適宜紹介します。授業資料は授業内で配布、もしくは講義支援システムを利用して配布します。		授業内試験結果に、授業レポートシステムを利用したレポートや感想文を加味します。実施した場合には学生による調査報告の点数等も加味します。出席は6割以上、授業内試験の受験を必須とします。	

03年度以降	教育原論	担当者	高瀬 幸恵
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	教育原論	担当者	川村 肇
講義目的、講義概要		授業計画	
<p><b>【目的】</b> 教育の本質を理解するために、自らの教育観を相対化しつつ、さまざまな基本的概念を学び、教育に対する考え方の基礎を養います。</p> <p><b>【概要】</b> 1. 教育の思想と歴史の概略を基礎として、子どもの権利条約や教育基本法等を素材にし、人権と子どもの権利、能力の問題、義務教育等の、教育において基本的な概念や考え方を学びます。 2. 教育と学習との関係を、ビデオ、教育の時事問題や教育実践などを教材として、様々な角度から考えていきます。</p>		<p>第1回：講義の進め方の説明 第2回：学力問題の国際比較（ドイツの事例） 第3回：習熟度別学級編成の問題 第4回：学力問題の国際比較（フィンランドの事例） 第5回：系統学習と問題解決学習 第6回：発達の最近接領域説 第7～9回：戦後の教育の思想と歴史 第10回：子どもの権利条約の概要と精神 第11回：子どもに固有する権利と人権 第12回：教育基本法の概要と教育の基本的視座 第13回：「能力に応じた」教育を考える 第14回：教育における競争と自由の問題を考える 第15回：まとめ</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
『ポケット版 子どもの権利ノート』（300円） 参考文献は、授業中適宜紹介します。授業資料は講義支援システムを利用して配布します。		授業内試験結果に、授業レポートシステムを利用したレポートや感想文を加味します。実施した場合には小テストの点数等も加味します。出席は6割以上、授業内試験の受験を必須とします。	

03年度以降 13年度以降	教職心理学 教育心理学（12年度以前の交文を含む。）	担当者	田口 雅徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>今日、日本の教育環境は大きな転換点にさしかかっている。このように激変しつつある教育現場に携わるときに必要とされる心理学の基礎的知識について、本講義を通して理解を深めてほしい。</p> <p>教育心理学には大きく（1）測定・評価、（2）人格・適応、（3）発達、（4）学習という4つの領域がある。本講義ではまず教育心理学が成立した歴史的背景を述べた上で、これらの4領域の内容を詳しくみていくことにする。すなわち、1. 教育心理学とはなにか、2. 教育評価と学力問題、3. 学習の過程と学習への動機付け、4. 発達および発達障害などについて講義していく予定である。</p>		<p>授業計画</p> <p>第1回：教育心理学の領域とその歴史 第2回：教育測定と教育評価 第3回：教育評価の方法 第4回：教育評価と学力問題 第5回：学習の原理 第6回：学習における動機付け 第7回：学習意欲と原因帰属 第8回：学習意欲と目標理論 第9回：学習意欲と教師の役割 第10回：発達と学習 第11回：心理アセスメントと発達障害 第12回：学習障害の理解 第13回：AD/HDの理解 第14回：自閉性障害の理解 第15回：まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
特定のテキストは使用しない。毎回レジュメを配布して授業をおこなう。また、必要な資料は授業において配布する。		授業後の小レポートおよび学期末の試験により総合的に評価をおこなう。	

03年度以降 13年度以降	教職心理学 教育心理学（12年度以前の交文を含む。）	担当者	田口 雅徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>（半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ）</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降 13年度以降	教職心理学 教育心理学（12年度以前の交文を含む。）	担当者	白砂 佐和子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、教育分野にまつわる心理学の知見に幅広く触れつつ、教育現場で重要と思われる「人を理解すること」について心理学的に深めることを目的とする。具体的には、学習心理学、人格の理解、人格の発達、子どもの発達課題、子どものころを心理学的に理解すること等について、現場と理論のつながりを考慮しながら講義していきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教育心理学について</li> <li>2. 動機づけ理論</li> <li>3. 人格の理解（1）</li> <li>4. 人格の理解（2）</li> <li>5. 記憶・認知の心理学</li> <li>6. 学習心理学</li> <li>7. ライフサイクルと発達心理学</li> <li>8. 臨床心理学・深層心理について</li> <li>9. 乳幼児期の重要性（1）</li> <li>10. 乳幼児期の重要性（2）</li> <li>11. 発達上の課題 学童期前半</li> <li>12. 発達上の課題 学童期後半</li> <li>13. 発達上の課題 思春期</li> <li>14. 発達上の課題 青年期以降</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
授業にて提示する		出席状況とテスト結果を合わせて評価します。	

03年度以降 13年度以降	教職心理学 教育心理学（12年度以前の交文を含む。）	担当者	白砂 佐和子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>（半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ）</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	教育制度	担当者	桑原 憲一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、教育職員免許法に規定された教育の基礎理論に関する科目であり、教職課程履修の基礎的・基本的な科目として位置づけられている。本講義においては、日本の教育制度の意義や構造の概要を理解するとともに、生涯学習社会における学校教育、家庭教育、社会教育の関係性にも触れながら教育制度全般に対する基礎的・基本的な識見をはぐくむことを目的とする。</p> <p>本講義では、グループ討議や全体討議などを通して、日本の教育制度の意義や構造、教育改革の現状と課題などについて主体的な理解を深めていく。教育行政、学校・家庭・社会教育との関連や諸外国の教育制度にも触れながら教育に対する質の高い関心と熱い情熱や崇高な使命感の醸成を図っていく。</p>		<p>第1回：オリエンテーション  第2回：教育の制度化  第3回：学校教育制度の概要  第4回：学校教育制度の変遷  第5回：公教育と私教育  第6回：教育行財政  第7回：教育委員会制度  第8回：教育課程と学習指導要領  第9回：諸外国の教育制度  第10回：家庭教育の現状と課題  第11回：社会教育の現状と課題  第12回：教育改革の現状と課題(1)  学校評価・人事評価制度  第13回：教育改革の現状と課題(2)  学校選択制・小中高一貫教育  第14回：教育改革の現状と課題(3)  学校評議員・学校運営協議会  第15回：教育改革の現状と課題(4)  初任者研修・教員免許更新制度</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義毎に配布する資料  参考書・参考資料等は講義内容に応じて適宜紹介</p>		<p>平常点 (30%)、課題レポート (20%)、試験 (50%) により、出席3分の2以上の受講者を評価対象者として総合的に評価する。</p>	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03 年度以降	教育制度	担当者	小島 優生
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>●講義目的 教育に関わる法制度の理論と仕組みを理解した上で、新しい動向を検討することを目的としている。</p> <p>●講義概要 2, 3は他の行政分野とは異なる仕組み、教育委員会を中心にその仕組みと、準公選制度を実施した中野区の事例を検討する。 4, 5は学校運営の仕組みを概観した後、世界的動向ともいえる「自律的学校経営」について、日本の学校評議員や韓国の学校運営委員会制度などとも比較しながら検討する。 7, 8では教育行政の主な役割とされる教育条件整備について学級定員、および例外事項としての教員給与を扱う。 9, 10, 11では教員養成の仕組みについて、戦後の教員養成制度の特徴および最近の動向、そして日本が範としたフィンランドの教員養成を検討する。 12, 13では教科書編成を中心とした仕組みを検討し、独自の副読本づくりを行った犬山市の事例を検討する。 また、随時用語説明を中心とした小テストを実施し、理解と定着を図りたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス（講義の目的、進め方についての説明など）</li> <li>2. 教育行政を動かす組織—教育委員会制度</li> <li>3. 教育委員会制度（中野区・韓国など）</li> <li>4. 学校運営の仕組み</li> <li>5. 学校運営の新しい動向（韓国の学校運営委員会）</li> <li>6. まとめと討論</li> <li>7. 条件整備行政の仕組み</li> <li>8. 条件整備行政の新しい動向（少人数学級）</li> <li>9. 教員の養成・採用・研修・身分の仕組み</li> <li>10. 教員政策の新しい動向（社会人の登用）</li> <li>11. 教員政策の新しい動向（教員評価）</li> <li>12. 教育課程行政と教科書の仕組み</li> <li>13. 教育課程行政と教科書の新しい動向（犬山市）</li> <li>14. まとめと討論</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：勝野正章・藤本典裕編（2008）『教育行政学（改訂版）』学文社 参考文献・六法などは授業中に適宜指示する</p>		<p>①出席、発言など、②授業レポートシステム、③小テスト、④最終テストなどで評価する。 評価方法などは第一回目に指示するので必ず出席のこと。</p>	

03 年度以降	教育制度	担当者	小島 優生
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>（半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ）</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	教育課程論	担当者	安井 一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 本講は、学力、評価、総合的学習など、今日の学校教育の内容をめぐる問題状況をふまえながら、教育課程の研究、実践に関する今日的課題について考察することを目的とする。</p> <p><b>講義概要</b> 学校において展開されている毎日の授業や諸活動は、一定の教育目的を達成するために編成される教育内容に関する計画である教育課程に基づいて行われている。いわば、教育課程は、学校教育における中核としての役割を果たしている。本講では、以上のような観点から、教育課程の編成と評価という問題を中心に、わが国の戦後教育の歩みと教育課程の変遷、新教育課程の分析と課題の検討、今日の学力問題等の問題を取り上げ、各種資料、VTR教材などを用いながら、多面的に検討を加え、教育課程研究に関する理解を深めていく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 教育課程と学力問題</li> <li>2 教育課程とは何か</li> <li>3 日本の教育課程(1)</li> <li>4 日本の教育課程(2)</li> <li>5 教育課程編成の理論と方法(1)</li> <li>6 教育課程編成の理論と方法(2)</li> <li>7 教育課程編成の理論と方法(3)</li> <li>8 学習指導要領と教育課程(1)</li> <li>9 学習指導要領と教育課程(2)</li> <li>10 学習指導要領と教育課程(3)</li> <li>11 学習指導要領と教育課程(4)</li> <li>12 新学習指導要領の検討(1)</li> <li>13 新学習指導要領の検討(2)</li> <li>14 教育課程と評価</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 総則編』『高等学校学習指導要領』『同解説 総則編』その他は、講義の中で紹介する。</p>		<p>出席(7割以上、厳守のこと)、レポート、試験による総合評価</p>	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	教育課程論	担当者	桑原 憲一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講は、学力、評価、総合的学習など、今日の学校教育の内容をめぐる問題状況をふまえながら、教育課程の研究、実践に関する今日的課題について考察することを目的とする。</p> <p>学校において展開されている毎日の授業や諸活動は、一定の教育目的を達成するために編成される教育内容に関する計画である教育課程に基づいて行われている。いわば、教育課程は、学校教育における中核としての役割を果たしている。本講では、以上のような観点から、教育課程の編成と評価という問題を中心に、わが国の戦後教育の歩みと教育課程の変遷、新教育課程の分析と課題の検討、今日の学力問題等の問題を取り上げ、各種資料、VTR教材などを用いながら、多面的に検討を加え、教育課程研究に関する理解を深めていく。</p>		<p>第1回：教育課程と学力問題  第2回：教育課程とは何か  第3回：日本の教育課程(1)教育課程編成のプロセス  第4回：日本の教育課程(2)学習指導要領と教育課程  第5回：教育課程編成の理論と方法(1)経験カリキュラム  第6回：教育課程編成の理論と方法(2)教科カリキュラム  第7回：教育課程編成の理論と方法(3)教育課程構成法  第8回：学習指導要領と教育課程(1)昭和20年代  第9回：学習指導要領と教育課程(2)昭和30-40年代  第10回：学習指導要領と教育課程(3)昭和50-60年代  第11回：学習指導要領と教育課程(4)平成1-10年代  第12回：新学習指導要領の検討(1)改訂の経緯と概要  第13回：新学習指導要領の検討(2)実践課題  第14回：教育課程と評価  第15回：まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『中・高等学校学習指導要領解説・総則編』と講義毎に配布する資料 参考文献は講義内容に応じて適宜紹介する。		平常点(30%)、課題レポート(20%)、試験(50%)により、出席3分の2以上の受講者を評価対象者として総合的に評価する。	

03年度以降	教育課程論	担当者	桑原 憲一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅰ	担当者	金井 満
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>ドイツ語科教科教育法Ⅰにおいては、ドイツ語の基礎知識の確認と補強、および外国語教授法の知識と教案の作成などの実務的な技能の獲得を目標とする。</p> <p>基礎知識に関しては、学科基礎科目において習得してきた文法に関する知識のみならず、ドイツ語の授業を行うのに必要だと思われるドイツ語に関わる一般的知識をも含めて確認・補強をする。外国語教授法に関しては、代表的な教授法に関して受講者に調査・報告をしてもらい、その長所・短所を議論する。また教案や試験問題なども実際に作成してみたい。</p> <p>なお英語の免許取得を目指している場合でも、免許科目という特性上、特に配慮はしないので、ドイツ語の免許を取得するというしっかりした自覚を持って受講してほしい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. ドイツ語基礎知識の確認</li> <li>3. ドイツ語基礎知識の確認</li> <li>4. ドイツ語基礎知識の確認</li> <li>5. ドイツ語基礎知識の確認</li> <li>6. ドイツ語基礎知識の確認</li> <li>7. 外国語教授法について</li> <li>8. 外国語教授法について</li> <li>9. 外国語教授法について</li> <li>10. 外国語教授法について</li> <li>11. 外国語教授法について</li> <li>12. 外国語教授法について</li> <li>13. 外国語教授法について</li> <li>14. 外国語教授法について</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
吉島茂・境一三著『ドイツ語教授法』三修社2003年		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ドイツ語文法と教授法の基礎知識に関しては、授業内の筆記試験。</li> <li>2. 教授法に関する発表。</li> <li>3. 授業への参加度。</li> </ol>	

03年度以降	ドイツ語科教科教育法Ⅱ	担当者	金井 満
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>ドイツ語科教科教育法Ⅱにおいては、複数回の模擬授業を通じて、ドイツ語を教えるという経験の獲得を目指したい。模擬授業の際には担当者の授業をビデオ撮影し、担当者自らが自分の授業を振り返り、さらに参加者全員で講評し合うことができるようにする。</p> <p>なお英語の免許取得を目指している場合でも、免許科目という特性上、特に配慮はしないので、ドイツ語の免許を取得するというしっかりした自覚を持って受講してほしい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 模擬授業</li> <li>3. 同上</li> <li>4. 同上</li> <li>5. 同上</li> <li>6. 同上</li> <li>7. 同上</li> <li>8. 同上</li> <li>9. 同上</li> <li>10. 同上</li> <li>11. 同上</li> <li>12. 同上</li> <li>13. 同上</li> <li>14. 同上</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 筆記試験。</li> <li>2. 模擬授業。</li> <li>3. 授業への参加度。</li> </ol>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

09年度以降	英語科教科教育法Ⅰ（交流文化学科生）	担当者	日野 克美
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的 現場に立って自分で授業を組み立てられる基礎力を養成する</p> <p>講義概要 日本の英語教育の流れを歴史的に把握し、先達が築いてきた業績を参考にしつつ現代世界に合致した教育方法を模索する。現場で実際に指導している教員を招き討論を行うなど、理論から遊離しない講義方法を用いる</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1、 オリエンテーション</li> <li>2、 日本の英語教育の流れ</li> <li>3、 世界の英語教育の潮流</li> <li>4、 各学生参加者の英語教育の経験</li> <li>5、 理想の英語教育とは</li> <li>6、 記憶に残る英語の先生</li> <li>7、 中学の英語教育</li> <li>8、 高校の英語教育</li> <li>9、 大学の英語教育</li> <li>10、 小中高一貫の英語教育</li> <li>11、 教員養成の在り方</li> <li>12、 教員養成の在り方</li> <li>13、 教育実習の研究</li> <li>14、 教育実習の研究</li> <li>15、 まとめ</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
適宜紹介する		出席30% 課題20% 試験30% 授業貢献度20%	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法 I 英語科教科教育法 II (交流文化学科生)	担当者	E. 本橋
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>This course will introduce you to both the principles and techniques (methods) of language teaching. During the spring term we will explore common theories of learning and consider how these apply to various approaches of language teaching. We will then explore the specific methods of language teaching considering the merits and limitations of each. Students will evaluate language teaching materials, syllabi, and curriculum in relation to the principles and methods studied in the class.</p> <p>This course will be conducted in English and all coursework will be submitted in English. I と II は原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Introduction to course/Personal Learner Experience &amp; Perspective on Learning</li> <li>2. Foundational Theories of Learning Pt. I</li> <li>3. Foundational Theories of Learning Pt. II</li> <li>4. Approaches to Language Learning Pt. I</li> <li>5. Classroom management &amp; Activities - Pt. I</li> <li>6. Student Lessons (Grps. 1, 2 &amp; 3)</li> <li>7. Approaches to Language Learning Pt. II</li> <li>8. Classroom management &amp; Activities - Pt. II</li> <li>9. Student Lessons (Grps. 4, 5 &amp; 6)</li> <li>10. Approaches to Language Learning – Pt. II</li> <li>11. Approaches to Language Learning – Pt. III</li> <li>12. Classroom management &amp; Activities - Pt. III</li> <li>13-14. Student Lessons (Grps. 7, 8,9 &amp; Grps. 10, 11, 12)</li> <li>15. Reflection &amp; Wrap-up</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
Larsen-Freeman, D. (2002). Techniques and principles in language teaching. Oxford: Oxford University Press		Grades are based on your portfolio-60% (reading sheets, method evaluation sheets, Lesson plan, quizzes) and in-class work (attendance, participation, short presentations: 40%).	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法 II 英語科教科教育法 III (交流文化学科生)	担当者	E. 本橋
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>During the fall term the course will continue to focus on the daily practice of language teaching with particular attention being given to the mechanics of preparing lessons, creating materials and evaluating both student and teacher performance. Students will evaluate language teaching materials, syllabi, and curriculum in relation to the principles and methods studied in the spring term class. Students will also be required to do 1 outside observation of an English lesson. Details will be given early on in the fall term.</p> <p>I と II は原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Introduction</li> <li>2. Classroom language &amp; Dynamics</li> <li>3. Lesson planning</li> <li>4. Textbook Analysis/Lesson Analysis</li> <li>5. Materials Development &amp; Lesson Outline</li> <li>6. Micro teaching I (Grps. 1,2, &amp; 3)</li> <li>7. Textbook/Lesson Analysis</li> <li>8. Materials Development &amp; Lesson Outline</li> <li>9. Micro teaching II (Grps. 4, 5, &amp; 6)</li> <li>10. Textbook/Lesson Analysis</li> <li>11. Micro teaching III (Grps. 7, 8 &amp; 9)</li> <li>12. Textbook/Lesson Analysis</li> <li>13. Materials Development &amp; Lesson Outline</li> <li>14. Micro teaching IV (Grps. 10, 11 &amp; 12)</li> <li>15. Reflection and wrap-up</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
Larsen-Freeman, D. (2002). Techniques and principles in language teaching. Oxford: Oxford University Press		Grades are based on your teaching Portfolio-30% (materials, lesson plans & reflections), Readings & Homework (20%), School Observation (20%) & in-class work (attendance, participation, short presentations: 40%).	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法 I 英語科教科教育法 II (交流文化学科生)	担当者	J. J. ダゲン
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>The purpose of this course is to not just introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach), but also to establish a basis of understanding of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based, and upon which the student will be able to build and develop a coherent plan of instruction.</p> <p>We shall spend most of this term in reading, lecture, and discussion of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based.</p> <p>As class time is limited and valuable, students will be expected to keep up on the reading on their own time. Class time will be reserved for lecture and discussion.</p> <p>As attendance is essential for participating in this course, if you miss or are very late for more than 1/3 of the lessons, you will automatically fail.</p> <p>I と II は原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<p>Week 1: Course description. Assignment.</p> <p>Week 2: Theme: The teaching situation. Lecture, discussion, assignment.</p> <p>Week 3: Theme: The role of the teacher. Lecture, discussion, assignment.</p> <p>Week 4: Theme: The role of the school. Lecture, discussion.</p> <p>Week 5: Theme: The role of the student. Lecture, discussion, project assignment.</p> <p>Week 6: Theme: Testing. Lecture, discussion, reading.</p> <p>Week 7: Theme: Testing. Lecture, discussion, assn.</p> <p>Week 8: Theme: How is language learned? Lecture, discussion, reading.</p> <p>Week 9: Theme: The history of language teaching. Lecture, discussion.</p> <p>Week 10: Theme: Approach and method--traditional. Lecture, discussion, handouts.</p> <p>Week 11: Theme: Approach and method--modern. Lecture, discussion.</p> <p>Week 12: Theme: Planning a lesson. Lecture, discussion.</p> <p>Week 13: Theme: Selected topics.</p> <p>Week 14: Theme: Selected topics.</p> <p>Week 15: Consolidation &amp; Review.</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Hubbard, P. et al., <i>A Training Course for TEFL</i> . (Oxford Univ. Press.) Handouts.		Grades are based on in-class participation, a number of assignments, and a final assessment based on the handouts and lecture.	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法 II 英語科教科教育法 III (交流文化学科生)	担当者	J. J. ダゲン
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>The purpose of this course is to introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach) involved in teaching a successful language class, built on an understanding of the approaches, concepts, and reasoning on which foreign language education is based as presented in the first semester.</p> <p>This course will be devoted to student in-class practice teaching based on the material covered in the first semester, and incorporating practical teaching techniques that will be covered in reading and lecture.</p> <p>We will first look at materials and techniques used in teaching the various language skills, and then develop a lesson plan making use of said techniques.</p> <p>As attendance is essential for participating in this course, if you miss or are very late for more than 1/3 of the lessons, you will automatically fail.</p> <p>I と II は原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<p>Week 1: Course Introduction, Decide presentation schedule</p> <p>Week 2: Teaching Grammar--Lecture, Activities</p> <p>Week 3: Teaching Grammar--Video</p> <p>Week 4: Teaching Grammar--Student presentations, assignment.</p> <p>Week 5: Teaching Reading--Lecture, Activities</p> <p>Week 6: Teaching Reading--Student presentations, assignment.</p> <p>Week 7: Teaching Writing--Lecture, Activities</p> <p>Week 8: Teaching Writing--Student presentations, assignment.</p> <p>Week 9: Teaching Listening--Lecture, Activities</p> <p>Week 10: Teaching Listening--Student presentations, assignment.</p> <p>Week 11: Teaching Oral Communication--Lecture, Activities</p> <p>Week 12: Teaching Oral Communication--Student presentations, assignment.</p> <p>Week 13: Selected activities.</p> <p>Week 14: Make-up presentations.</p> <p>Week 15: Consolidation &amp; Review.</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Hubbard, P. et al., <i>A Training Course for TEFL</i> . (Oxford Univ. Press.) Handouts.		Grades are based on in-class participation, a number of assignments, a presentation, and a final paper.	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法Ⅰ 英語科教科教育法Ⅱ（交流文化学科生）	担当者	羽山 恵
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】 日本における英語教育の最新事情やさまざまな課題を知るとともに、それらを解決する方法を文献講読や受講者間のディスカッションを通じて探っていきます。</p> <p>また、中学・高校の英語授業において効果的であると考えられる指導法や評価方法を、文献や授業映像から学ぶとともに、受講生の皆さんにはそれらをより良くする改善案を考えてもらいます。具体的な指導法のテクニック等を知ること、本授業の目的の一つです。</p> <p>【概要】 授業においては、「知る」→「考える」→「共有する」という一連の流れを重視します。</p> <p>配布するプリントや紹介する書籍・授業映像を通じて、どのような英語教授法があるのかを知り、その長短所や改善点について受講生自らが積極的に考えることを期待します。そして、新しく知った教授法・評価法を実践できるようになることが望ましいと考えますが、よりスキルを重視した「練習」は秋学期に集中的に行います。</p> <p>※ⅠとⅡは原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 【ガイダンス】</li> <li>2. 日本における英語教育の歴史と現状課題</li> <li>3. 国際化と英語の役割</li> <li>4. 学習指導要領</li> <li>5. 早期英語教育</li> <li>6. 学習者要因</li> <li>7. 英語教員</li> <li>8. 英語教授法（1）</li> <li>9. 英語教授法（2）</li> <li>10. 第二言語習得研究</li> <li>11. テスト（測定と評価）</li> <li>12. 教科書と教材研究</li> <li>13. カリキュラムとシラバスデザイン</li> <li>14. 授業の組み立て方</li> <li>15. 【まとめ】</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
望月昭彦編著. (2010). 『改訂版 新学習指導要領にもとづく英語科教育法』. 大修館書店.		出席＋授業活動への参加度＋期末レポート 欠席の場合は次回授業で特別課題の提出・発表を求める	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法Ⅱ 英語科教科教育法Ⅲ（交流文化学科生）	担当者	羽山 恵
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】 中学・高校における一時間の英語の授業を実践できる知識と技能を身につけることを目指します。</p> <p>【概要】 受講生によるグループディスカッションと模擬授業（micro-teaching）を中心に進めていきます。</p> <p>与えられる「テーマ」にしたがい授業計画を立て、その一部を授業内で披露してもらいます。たとえば、「中学3年生に『関係代名詞を導入する』方法を考え、実施しなさい。ただし、その導入部分は全て英語で行うこと。導入に効果的なキーセンテンスを考えること、効果的な教具を用いることも合わせて行いなさい」などが課題になります。毎回の授業の初めにウォーミングアップとしてミニプレゼンテーションをすること、模擬授業は学期内に全員が実施すること、所定の形式に従った指導案を書くことが課せられます。</p> <p>プレゼンテーションや模擬授業に対しては、担当教員と受講生が感想やアドバイスを与えます。</p> <p>※ⅠとⅡは原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 【ガイダンス】</li> <li>2. 新出文法事項の導入方法（1）</li> <li>3. 新出文法事項の導入方法（2）</li> <li>4. 新出文法事項の導入方法（3）</li> <li>5. 語彙の導入と練習（1）</li> <li>6. 語彙の導入と練習（2）</li> <li>7. 語彙の導入と練習（3）</li> <li>8. 英語のみで進めるリーディング活動（1）</li> <li>9. 英語のみで進めるリーディング活動（2）</li> <li>10. 英語のみで進めるリーディング活動（3）</li> <li>11. 思いを伝える表現活動（1）</li> <li>12. 思いを伝える表現活動（2）</li> <li>13. 思いを伝える表現活動（3）</li> <li>14. 模擬授業（1）</li> <li>15. 模擬授業（2）</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
使用しません		出席＋授業活動への参加度＋期末レポート 欠席の場合は次回授業で特別課題の提出・発表を求める	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法Ⅰ 英語科教科教育法Ⅱ（交流文化学科生）	担当者	浅岡 千利世
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では中学・高校の英語教員を目指すも学生が知っておくべき外国語学習・教育に関する理論を幅広く取り上げる。また、学期を通して自分の英語教員としての専門性と成長について考え、振り返る場とする。授業はディスカッションやグループワークおよび英語を多用するので、積極的な参加が必要となります。</p> <p>授業の内容や情報は講義支援システムに随時アップしますので各自で必ず確認してください。</p> <p>IとIIは原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Introduction to course</li> <li>2. Reflection on language learning and teaching</li> <li>3. Theoretical approaches and methods</li> <li>4. Syllabus and teaching guidelines</li> <li>5. Textbooks</li> <li>6. Classroom management</li> <li>7-8. Lesson planning</li> <li>9-10. Materials development</li> <li>11. Testing and evaluation</li> <li>12. Team teaching</li> <li>13. Teaching younger learners</li> <li>14. Teaching global issues</li> <li>15. Reflection and wrap-up</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義支援システムとハンドアウト使用		出席&授業への貢献度（30%）、ジャーナル（30%） 教案（20%）ポートフォリオ（10%）自己評価（10%）	

03年度以降 09年度以降	英語科教科教育法Ⅱ 英語科教科教育法Ⅲ（交流文化学科生）	担当者	浅岡 千利世
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では春学期に学習した理論をもとに模擬授業などの実践を中心に行う。全員複数回の模擬授業、教案作成と再作成、ビデオ録画と自己評価、チュートリアル、グループワーク、ポートフォリオ作成などを通して、自分の英語教員としての専門性と成長を振り返る。</p> <p>授業の内容や情報は講義支援システムに随時アップしますので各自で必ず確認してください。</p> <p>IとIIは原則として同じ担当者の授業を受講すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Introduction</li> <li>2. Classroom language</li> <li>3. Lesson planning</li> <li>4. Individual presentations, Lesson planning</li> <li>5. Individual presentations, Lesson planning</li> <li>6. Micro teaching 1 (pair, one task)</li> <li>7. Micro teaching 1</li> <li>8. Micro teaching 1</li> <li>9. Reflection</li> <li>10. Micro teaching 2 (group, one lesson)</li> <li>11. Micro teaching 2</li> <li>12. Micro teaching 2</li> <li>13. Micro teaching 2</li> <li>14. Micro teaching 2</li> <li>15. Reflection and wrap-up</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義支援システムとハンドアウト使用		出席&授業への貢献度（30%）、reflective essays（20%） 模擬授業&教案（30%）、ポートフォリオ（10%）、自己評価（10%）	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

07年度以降	英語科教科教育法 I	担当者	安間 一雄
講義目的、講義概要		授業計画	
<b>授業の目的</b> 英語科指導に関わる教授法・学習理論・学習環境についてそれらの背景理論を習得することを目標とする。		1. 第1言語習得過程：経験学習説，生得説 2. 第2言語習得過程：学習環境 (ESL/EFL)，年齢による習得差 3. 学習者の個別要因 (1)：知能，適性 4. 学習者の個別要因 (2)：学習スタイル，性格 5. 学習者の個別要因 (3)：動機付け・態度 6. 学習者の個別要因 (4)：アイデンティティ，学習観 7. 学習者の個別要因 (5)：年齢条件 8. 第2言語学習の様態 (1)：教授法による教師と学習者の関わりの相違 9. 第2言語学習の様態 (2)：誤りの訂正 10. 第2言語学習の様態 (3)：質問方法，民族誌的研究 11. 教授法の効果検証 (1)：オーディオリンガル法 12. 教授法の効果検証 (2)：ナチュラル・アプローチ，人間的アプローチ 13. 教授法の効果検証 (3)：コミュニカティブ・アプローチ 14. 教授法の効果検証 (4)：イメージングプログラム 15. 教授法の効果検証 (5)：Focus on form	
<b>授業概要</b> この授業では，まず学習者要因として第2言語発達の諸相を明らかにし，外国語学習への応用を検討する．次に教授法の歴史的変遷をたどりそれぞれの利点と欠点を明らかにする．特に最新の教授理論の背景とその効果に関わる研究について議論する．授業ではこれらの話題を概説したテキストを読み，そこで取り上げられている論文の内容を報告してもらう．教授法についての内容を知ることと共にアカデミックな論文・報告書を読めるようにすることが目標である。			
<b>参考文献</b> H. D. Brown, Principles of Language Learning and Teaching, 4th ed. (Pearson, 2000; ISBN 0130178160) D. Larsen-Freeman, Techniques and Principles in Language Teaching, 2nd ed. (Oxford University Press, 2000; ISBN 978-0194355742)			
テキスト、参考文献		評価方法	
P. Lightbown & N. Spada, How Languages Are Learned, 3rd ed. (Oxford University Press, 2006; ISBN 978-0194422246)		定期試験および授業時の課題	

07年度以降	英語科教科教育法Ⅱ	担当者	安間 一雄
講義目的、講義概要		授業計画	
<b>授業の目的</b> 今日、英語科教育で広く求められるコミュニケーションな学習活動および評価方法を自ら創造し指導できる技術を獲得することを目標とする。		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学習者参加型の授業</li> <li>2. 発音の指導</li> <li>3. 語彙・辞書の指導</li> <li>4. 文法の指導</li> <li>5. リスニングの指導</li> <li>6. スピーキングの指導</li> <li>7. リーディングの指導</li> <li>8. ライティングの指導</li> <li>9. 科目横断型学習の指導</li> <li>10. eラーニングによる学習指導および継続的学習指導</li> <li>11. 授業展開とシラバス・指導案</li> <li>12. テスト作成と評価 (1): テストの作成法</li> <li>13. テスト作成と評価 (2): テスト結果の集計と成績評価</li> <li>14. テスト作成と評価 (3): フィードバック</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>授業概要</b> 英語授業の各技能および領域にコミュニケーションな学習活動を取り入れるための様々な方法論を実践的に学ぶ。コミュニケーションな教材・テストの作成法を学ぶほか、グループワーク・ペアワークなどの教室内での課題学習活動の設計を行う。			
<b>参考文献</b> フランシス・ジョンソン／平田為代子訳『コミュニケーションな英語授業のデザイン』(大修館書店, 2000; ISBN: 4-469-24450-3) J. Harmer, <i>The Practice of English Language Teaching</i> , 3rd ed. (Pearson, 2001; ISBN: 0582403855) A. Hughes, <i>Testing for Language Teachers</i> , 2nd ed. (Cambridge University Press, 2002; ISBN: 0521484952)			
テキスト、参考文献		評価方法	
高梨庸雄・高橋正夫『新・英語教育学概論』(金星堂, 2007; ISBN-13: 978-4764738423) 笠島準一他 <i>New Horizon English Course 2</i> (東京書籍, 2008) 市川泰男他 <i>Unicorn English Course II</i> (文英堂, 2008)		定期試験および授業時の課題	

07年度以降	英語科教科教育法Ⅲ	担当者	安間 一雄
講義目的、講義概要		授業計画	
<b>授業の目的</b> 英語科指導における実践的対処能力向上を目標とする。		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 技能課題: Classroom English 実技課題: 授業計画立案, 指導要領の読み方</li> <li>2. 技能課題: Code switching 実技課題: プレゼンテーション指導</li> <li>3. 実技課題: 模擬授業 (1): 導入および授業手続</li> <li>4. 実技課題: 模擬授業 (2): 導入および授業手続</li> <li>5. 技能課題: Teacher talk 実技課題: 単元の導入</li> <li>6. 実技課題: 模擬授業 (2): オーディオリンガル授業</li> <li>7. 実技課題: 模擬授業 (3): オーディオリンガル授業</li> <li>8. 技能課題: Recast and scaffolding 実技課題: 課題のドリル</li> <li>9. 実技課題: 模擬授業 (4): コミュニカティブな授業</li> <li>10. 実技課題: 模擬授業 (5): コミュニカティブな授業</li> <li>11. 技能課題: Planning and Improvising 実技課題: ペアワーク・グループワーク</li> <li>12. 実技課題: 模擬授業 (2): 内容重視型授業</li> <li>13. 実技課題: 模擬授業 (3): 内容重視型授業</li> <li>14. 技能課題: 自立学習のための課題設定 実技課題: 総括および家庭学習</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>授業概要</b> 受講者に対して指導項目の教授体験を提供する。模擬授業(ロールプレイを含む)を通してミクロ的およびマクロ的教授ストラテジーの習得訓練を行う。実技課題においては授業風景をビデオ録画し、ディスカッションの材料とする。また、実技のおよそ半分は英語を使つての指導に充てるものとする。受講者は常にジャーナルにより学習記録をつけることが求められる。			
<b>参考文献</b> G. S. Hughes, <i>A Handbook of Classroom English</i> (Oxford University Press, 1981; ISBN: 0194316335) P. Hubbard, H. Jones, B. Thornton, & R. Wheeler, <i>A Training Course for TEFL</i> , 2nd ed. (Oxford University Press, 1983; ISBN 0194327108) M. H. Long & J. Richards, <i>Methodology in TESOL: a Book of Readings</i> , 2nd ed. (Thomson, 1987; ISBN: 0838426956) 高梨庸雄他編, 『教室英語活用事典』(研究社, 2004; ISBN: 4-327461490)			
テキスト、参考文献		評価方法	
D. Larsen-Freeman, <i>Techniques and Principles in Language Teaching</i> , 2nd ed. (Oxford University Press, 2000; ISBN 978-0194355742) 笠島準一他 <i>New Horizon English Course 2</i> (東京書籍, 2008) 市川泰男他 <i>Unicorn English Course II</i> (文英堂, 2008)		授業時の課題	

07年度以降	英語科教科教育法Ⅱ	担当者	白井 芳子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的： 今日の英語科教育で広く求められるコミュニケーションな学習活動および評価方法を自ら創造し、英語で指導できる技術を獲得することを目標とする。</p> <p>授業概要： 英語授業の各技能および領域にコミュニケーションな学習活動を取り入れるための様々な方法論を実践的に学ぶ。コミュニケーションな教材・テストの作成法を学ぶほか、教室内での課題学習活動を設計し、実践する。また、教室英語指導技能の訓練も同時に行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 英語教育の目的および指導目標</li> <li>2. 第2言語習得理論と外国語教授法</li> <li>3. 英語指導方法（文法）</li> <li>4. 英語指導方法（オーラルイントロダクション）</li> <li>5. 英語指導方法（パタンプラクティス・コミュニケーションドリル）</li> <li>6. 英語指導方法（語彙）</li> <li>7. 英語指導方法（音読）</li> <li>8. 英語指導方法（発音）</li> <li>9. 英語指導方法（コミュニケーションタスク）</li> <li>10. 学習指導案 1</li> <li>11. 学習指導案 2</li> <li>12. 英語評価と言語テスト 1</li> <li>13. 英語評価と言語テスト 2</li> <li>14. 英語学習と心理要因</li> <li>15. 統括</li> </ol> <p>*受講生の人数等により、授業計画は変更することもあります。 *第3週～第9週：各回ミニ模擬授業あり *クラスルーム英語：各回小テストあり</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
村野井他著、「統合的英語科教育法」（2011）成美堂（ISBN978-4-7919-5094-2）		授業時の課題 60%（ミニ模擬授業、学習指導案、クラスルーム英語小テスト含む） 定期試験 40%	

07年度以降	英語科教科教育法Ⅲ	担当者	白井 芳子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的： 英語科教科教育法Ⅱに引き続き、英語授業の各技能および領域にコミュニケーションな学習活動を取り入れるための様々な方法論を実践的に学ぶ。</p> <p>授業概要： Ⅱで学んだものを応用し、特に技能統合型、内容重視型などの指導方法を実践的に学ぶ。指導案（評価含む）を作成し、それに基づいた模擬授業を実施する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 英語教師論</li> <li>2. 自律学習論</li> <li>3. 英語教育と異文化間教育</li> <li>4. ～12. 模擬授業</li> <li>13. 小学校外国語教育 1</li> <li>14. 小学校外国語教育 2</li> <li>15. 統括</li> </ol> <p>*受講生の人数等により、授業計画は変更することもあります。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
村野井他著、「統合的英語科教育法」（2011）成美堂（ISBN978-4-7919-5094-2）		授業時の課題（学習指導案、他） 模擬授業（振り返りジャーナル、ポートフォリオ、他）	

03年度以降	フランス語科教科教育法Ⅰ	担当者	中村 公子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>&lt;講義目的&gt; 言語教育に携わっていく上で必要な基礎知識と教育実習に必要な事柄の習得。また日本におけるフランス語教育および言語教育の現状と「これから」について考える。</p> <p>&lt;講義概要&gt; フランス語教育の歴史的変遷や教材、教室活動、教案の書き方、評価の仕方などを紹介する。主に講義形式となるが、教材分析や教案の作成などグループ作業や個人作業も取り入れる。 講義内容をまとめたノートを各自作成すること。</p> <p>&lt;注意！&gt; 必ず、教育実習を行う前年の3年次に履修すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに（教育実習予定、授業について、等）</li> <li>2. コースデザイン、シラバスデザイン、カリキュラムデザイン</li> <li>3. 教案の書き方</li> <li>4. 言語教育における教授法の歴史的変遷 1</li> <li>5. 言語教育における教授法の歴史的変遷 2</li> <li>6. 教材分析 1</li> <li>7. 教材分析 2</li> <li>8. 教室活動と指導法 1</li> <li>9. 教室活動と指導法 2</li> <li>10. 教師の役割と教室空間の利用法</li> <li>11. 教案と教室活動 1</li> <li>12. 教案と教室活動 2</li> <li>13. 授業実践のための準備とまとめ</li> <li>14. 評価について</li> <li>15. まとめ</li> </ol> <p style="text-align: right;">（順不同）</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各テーマに応じて授業中に指示する。		出席（無遅刻無欠席が原則）と授業参加態度。授業中の講義内容ノート、授業での発表、課題、レポート等での総合評価。	

03年度以降	フランス語科教科教育法Ⅱ	担当者	中村 公子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>&lt;講義目的&gt; 教壇に立つための訓練を通して、教師の役割、授業準備や教室活動、授業の展開など、授業を行う時の注意点や問題点などについて考える。</p> <p>&lt;講義概要&gt; 毎回、学生による模擬授業を行う。 「教案作成→授業準備→授業実施→評価と反省 →次回克服する課題を決める→個別指導」 上記のような流れになる。 10～25分程度の模擬授業を各自数回行う予定。回数と持ち時間は受講者数によるので、秋学期の最初の授業時にすべての模擬授業予定を決定する。</p> <p>&lt;注意！&gt; 必ず、教育実習を行う前年の3年次に履修すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 模擬授業のための準備と注意点</li> <li>2. 模擬授業 1</li> <li>3. 模擬授業 2</li> <li>4. 模擬授業 3</li> <li>5. 模擬授業 4</li> <li>6. 模擬授業 5</li> <li>7. 模擬授業 6</li> <li>8. 模擬授業 7</li> <li>9. 模擬授業 8</li> <li>10. 模擬授業 9</li> <li>11. 模擬授業 10</li> <li>12. 模擬授業 11</li> <li>13. 模擬授業 12</li> <li>14. 模擬授業 13</li> <li>15. まとめ：教育実習に向けて</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
必要に応じて授業中に指示する。		出席（無遅刻無欠席が原則）と授業参加態度。模擬授業の教案と準備、模擬授業、反省・感想文、事後指導態度、注意点のまとめ、レポート等での総合評価。	

03年度以降	社会科教育法 I	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。</p> <p>社会科教育法 I では、社会科の基本的性格を明らかにするとともに、学習指導要領に基づいて、教科の内容について基本的知識を身につける。また、今日社会科教育に課されている課題について考える。</p> <p>なお、科目の性質上、単なる講義ではなく受講者の発表等を取り入れながら授業を進めていく。</p> <p>*中学校「社会科」の教育内容について、教科書等を購入し、自習しておくこと。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 社会科教員の 1 日</li> <li>2 社会科成立の背景と意義</li> <li>3 社会科の教育課程とその変化 (1) 初期の社会科</li> <li>4 社会科の教育課程とその変化 (2) 分野制の展開</li> <li>5 社会科の教育課程とその変化 (3) 知識から方法へ</li> <li>6 社会科の教育内容 (1) 地理的分野 (世界)</li> <li>7 社会科の教育内容 (2) 地理的分野 (日本)</li> <li>8 社会科の教育内容 (3) 歴史的分野 (古代から近世)</li> <li>9 社会科の教育内容 (4) 歴史的分野 (近現代)</li> <li>10 社会科の教育内容 (5) 公民的分野 (社会・政治)</li> <li>11 社会科の教育内容 (6) 公民的分野 (経済・国際)</li> <li>12 社会科の教育内容 (7) 分野間の融合</li> <li>13 社会科の今日的課題 (1) 環境</li> <li>14 社会科の今日的課題 (2) 国際化</li> <li>15 社会科の今日的課題 (3) 情報化</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部省『中学校学習指導要領解説 (平成 20 年 9 月) 社会編』日本文教出版ほか		授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	社会科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。社会科教育法Ⅱでは、社会科の授業実践のための様々な技能を身につけることを目的とする。</p> <p>社会科で身につけるべき広い意味での学力（知識・技能・態度等）を踏まえて、授業形態別に実践のための知識と技能を具体的に学んでいく。また、情報通信機器等に活用や地域との連携についても考えていく。科目の性質上、授業時に課題等が多く課せられる。また、臨地学習については見学先等との都合により、日時をかえて行なう場合がある。</p> <p>*中学校「社会科」の教育内容について、教科書等を購入し、自習しておくこと。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 社会科の目標と身につけるべき力</li> <li>2 学習と評価</li> <li>3 講義式授業の特質</li> <li>4 教材の収集と利用（1）新聞・雑誌・書籍</li> <li>5 教材の収集と利用（2）視聴覚教材</li> <li>6 教材の収集と利用（3）インターネット等</li> <li>7 教材の収集と活用（4）ワークシートの作成</li> <li>8 生徒主体の学習指導法（1）調べ学習の指導</li> <li>9 生徒主体の学習指導法（2）ディベートと発表</li> <li>10 シミュレーション教材の利用</li> <li>11 臨地学習の意義と計画</li> <li>12.13 臨地学習の実践</li> <li>14 学習指導計画と学習指導案(年間計画・単元計画)</li> <li>15 学習指導計画と学習指導案(細案)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部科学省『中学校学習指導要領解説（平成20年9月）社会編』日本文教出版ほか		授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。	

03年度以降	社会科教育法Ⅲ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>中学校において、社会科を担当するための基礎となる事柄を習得する。</p> <p>社会科教育法Ⅲでは、社会科の年間学習指導計画および学習指導案の書き方を学習した後、模擬授業を行い、社会科の教員としての望ましい知識と態度を身につける。</p> <p>*中学校「社会科」の教育内容について、教科書等を購入し、自習しておくこと。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学校カリキュラムの中の社会科</li> <li>2. 社会科各分野の特性、内容と年間学習指導計画</li> <li>3. 学習指導案の作成と模擬授業の準備-資料の収集</li> <li>4. 学習指導案の作成と模擬授業の準備-授業の構成</li> <li>5. 学習指導案の作成と模擬授業の準備-教材の作成</li> <li>6. 模擬授業（1）地理的分野</li> <li>7. 模擬授業（2）地理的分野</li> <li>8. 模擬授業（3）歴史的分野</li> <li>9. 模擬授業（4）歴史的分野</li> <li>10. 模擬授業（5）公民的分野</li> <li>11. 模擬授業（6）公民的分野</li> <li>12. 模擬授業（7）分野融合単元</li> <li>13. 評価問題の作成と実施</li> <li>14. 評価問題の検討と学習評価</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部科学省『中学校学習指導要領解説（平成20年9月）社会編』日本文教出版ほか		授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	地理・歴史科教育法 I	担当者	鈴木 孝
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この授業は世界史教育のあり方を具体的に提示する。平成 21 年 3 月に高等学校学習指導要領が告示され、その解説が同年 12 月に出されたこともあり、その視点を盛り込みながら、高等学校世界史を題材にした教科教育法としての講義となる。歴史学からのアプローチとして歴史認識の変遷を扱い、世界史教育に関わる教師としてのスキルアップを図る。授業実践論としては、授業を実際につくっていく際の教材研究のあり方を検討し、世界史 A および世界史 B の授業の留意点や新しい手法を提示する。また、世界史を理解する場合に不可欠な地理的な知識、授業観察力、資料の読み解き力などを演習する。</p> <p>評価（単位認定）の基本は出席率とする。免許課程の科目なので、専門的知識の獲得よりは、出席し、授業に前向きにとりくむことが優先される。最後にレポートを課す。また、授業中の演習（3回）の結果も成績に反映させる。</p>		<p>01 歴史認識…その所在と変遷…</p> <p>02 歴史教育における世界史必修化の意義</p> <p>03 <u>新学習指導要領による世界史教育…※</u></p> <p>04 教材研究…その精神と方法…</p> <p>05 世界史 A の授業研究</p> <p>06 世界史 A の授業①…諸地域世界の特質…</p> <p>07 世界史 A の授業②…ネットワーク論による交流…</p> <p>08 世界史 A の授業③…近現代の世界と主題学習…</p> <p>09 <u>授業実践例と問題点の検討①…※</u></p> <p>10 世界史 B の授業研究</p> <p>11 世界史 B の授業①…時間軸と空間軸…</p> <p>12 <u>世界史 B の授業②…歴史資料の読み解き…※</u></p> <p>13 授業実践例と問題点の検討②</p> <p>14 授業を工夫する①</p> <p>15 授業を工夫する②</p> <p>(注) 下線を施した※印の授業で演習あり</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>パワーポイントを用いて講義を行い、必要な資料は毎時間配布する。</p>		<p>免許課程の科目なので出席数を基本とする。また授業中のワークシートおよび最終レポートの内容から総合的に評価する。</p>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	地理・歴史科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>高等学校における地理教育の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、授業実践上基礎的な知識・技能の育成を目指す。</p> <p>本講義では、日本の地理教育史、各国の地理教育の現状を踏まえ、地理で身につけさせるべき見方・考え方・技能について実践的に考察する。</p> <p>*高等学校「地理歴史科」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、次の文部科学省検定済教科書を購入し、自習しておくこと。</p> <p>『詳解地理 B』 二宮書店 『コンパクト地図帳』 二宮書店</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地理教育の意義と目標</li> <li>2. 日本の地理教育の歩み</li> <li>3. 諸外国の地理教育</li> <li>4. 現行および次期学習指導要領の特色</li> <li>5. 地理的見方・考え方について</li> <li>6. 地図・地球儀の扱い方（1）</li> <li>7. 地図・地球儀の扱い方（2）</li> <li>8. 野外観察・調査の意義と計画</li> <li>9. 野外観察の実践</li> <li>10. 系統地理の学習指導（1）</li> <li>11. 系統地理の学習指導（2）</li> <li>12. 地誌の学習指導（1）</li> <li>13. 地誌の学習指導（2）</li> <li>14. 主題的学習の学習指導（1）</li> <li>15. 主題的学習の学習指導（2）</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』参考文献は授業中に示される。</p>		<p>授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。</p>	

03年度以降	地理・歴史科教育法Ⅲ	担当者	會田 康範
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>歴史教育の「場」がどのように構成されてきたか、振り返ってみてほしい。その内容・教材構成・授業者と学習者、さまざまな要素とそれらの相互関係から成り立つ歴史教育（とりわけ日本史）のあり方を考察し討論することを通じて、教職を志す学生に授業を創造する力を養ってもらいたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. (プロローグ的に) 歴史を学ぶこと・教えること</li> <li>2. 歴史研究と歴史教育</li> <li>3. 学習指導要領と教科書叙述</li> <li>4. 授業実践事例研究①</li> <li>5. 授業実践事例研究②</li> <li>6. 高校日本史の授業計画（グループワーク）①</li> <li>7. 高校日本史の授業計画（グループワーク）②</li> <li>8. 高校日本史の従業計画（グループワーク）③</li> <li>9. 高校日本史の授業計画（グループワーク）④</li> <li>10. 高校日本史の授業計画（グループワーク）⑤</li> <li>11. 授業計画のプレゼンテーション①</li> <li>12. 授業計画のプレゼンテーション②</li> <li>13. 授業計画のプレゼンテーション③</li> <li>14. 授業計画のプレゼンテーション④</li> <li>15. (エピローグ的に) 歴史教員に求められる資質とは</li> </ol> <p>なお、上記の計画は受講者の人数や授業展開により変更されることもある。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>特定のテキストは使用せず、プリントを配布する。参考文献は講義の中で紹介する。 高等学校の学習指導要領と地理・歴史科の指導書は各自が用意すること。</p>		<p>授業への参加状況とレポートなどを総合的に評価する。状況に応じて簡単な小レポートを課すこともある。なお、グループワークの進行上、出席は重視し、欠席の多い学生は評価の査定外となる。</p>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	公民科教育法Ⅰ	担当者	海野 省治
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b>          中学校社会科公民分野および、高等学校公民科についての指導内容の理解、教員として指導に当たるための基本的で実践的な方法、指導上の工夫などの習得を目指す。スキルのように走らないようにする。</p> <p><b>授業概要</b>          Ⅰは講義中心となるが、模擬授業も実施予定。講義の中では、意見交換の場も設定したい。</p> <p>公民科の指導に当たっての基本姿勢(マインド)を理解し、指導に当たって中心となる教材研究方法を理解できるように。指導方法や指導のヒント等を、身につけることが出来るように。随時、時事問題にも触れる予定。</p> <p>尚、公民科教育法Ⅱも受講することを想定してシラバスを作成している。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス・心構え等</li> <li>2 公民科・社会科について</li> <li>3 社会科・公民科教育の戦後の流れ</li> <li>4 学習指導要領に見る中学校公民科の目標と内容概観</li> <li>5 学習指導要領に見る高等学校公民科の目標と内容</li> <li>6 社会科・公民科の指導 教材の発掘方法</li> <li>7 教材研究の方法(その1)</li> <li>8 教材研究の方法(その2)</li> <li>9 指導方法の工夫 指導計画・指導案の作成</li> <li>10 教科書を用いて 中学「公民」学習指導例検討</li> <li>11 教科書を用いて 高校「政治・経済」学習指導例検討</li> <li>12 教科書を用いて 高校「倫理」学習指導例検討</li> <li>13～14 模擬授業</li> <li>15 総括、公民科を指導する教員としての心構え、姿勢の点検</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中学校及び、高等学校学習指導要領 公民分野 プリントなど		レポートなどの提出物 試験 平常点などで評価	

03年度以降	公民科教育法Ⅱ	担当者	海野 省治
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b>          中学・高等学校の公民科の指導内容と方法を、模擬授業を中心にして理解をする。模擬授業実施者は、一部の受講者となるが、ノウハウが共有できるように模擬授業に沿って意見交換も実施の予定。</p> <p>教壇に立つ時は、公民科の教育の持つ意味を理解し、中学校公民分野と高等学校の「現代社会」「倫理」「政治・経済」3科目のいずれも生徒に対し指導できることが望ましい。いずれの科目について模擬授業を実施する。</p> <p><b>講義概要</b>          前半は、講義中心。その後は、班毎に公民科各科目についての教材研究および模擬授業を展開する。</p> <p>各科目内容に沿って、指導方法・指導内容等を検討の上、模擬授業を行い、終了後皆で講評。そして、改善策を整理。模擬授業を通して、指導の実際を自分のものとして出来るように。随時、時事問題にも触れる予定。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス</li> <li>2 公民科教員としての教養</li> <li>3 学習指導要領の確認</li> <li>4 年間学習指導計画の作成</li> <li>5 どう教えるか：教材研究の仕方、指導方法の工夫</li> <li>6 どう教えるか：指導案作成など授業実施までの手順</li> <li>7～13            班毎の教材研究など合同研究、そして模擬授業            模擬授業および、合同研究を交互に実施の予定            (※8～13の展開は、詳細を検討中)</li> <li>14 模擬授業を振り返って            授業研究及び定期考査と評価方法も触れる</li> <li>15 総括 社会科教員としての心構えは出来たかを点検する。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
プリントなど		レポートなどの提出物 試験 平常点などで評価	

03年度以降	情報科教育法Ⅰ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>高等学校教科としての情報科の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、情報科教員として必要な知識・技能の育成をめざす。</p> <p>情報科教育法Ⅰでは、情報科成立の背景から始めて、学習指導要領にもとづき情報科の内容を検討し、効果的な教育方法を考える。情報機器の利用方法を身につけると同時に学校におけるコンピュータ室の情報教室、学校全体の情報環境の整備・ネットワーク管理の基礎的な技能の育成も図る。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 情報科成立の背景と意義</li> <li>3 普通教科「情報」の目的</li> <li>4 普通教科「情報」の科目構成と各科目の特色</li> <li>5 専門教科「情報」の目的</li> <li>6 専門教科「情報」の科目構成と内容の概略</li> <li>7 学校における情報教育の環境</li> <li>8 情報科教材研究（1）普通教科「情報」</li> <li>9 情報科教材研究（2）普通教科「情報」</li> <li>10 情報科教材研究（3）普通教科「情報」</li> <li>11 情報科教材研究（4）普通教科「情報」</li> <li>12 情報科教材研究（5）普通教科「情報」</li> <li>13 情報科教材研究（5）専門教科「情報」</li> <li>14 情報科教材研究（6）専門教科「情報」</li> <li>15 情報科教材研究（7）専門教科「情報」</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部科学省『高等学校学習指導要領解説情報編』ほか		授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。	

03年度以降	情報科教育法Ⅱ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>高等学校教科としての情報科の目的、内容、方法、課題等について考察するとともに、情報科教員として必要な知識・技能の育成をめざす。</p> <p>情報科教育法Ⅱでは、年間学習指導計画・学習指導案の作成、先進校授業参観、模擬授業を予定している。</p> <p>なお、先進校授業参観については、参観先の都合等により日時をかえて行なう場合がある。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 普通教科「情報」の特性と年間学習指導計画</li> <li>2 専門教科「情報」の各科目の配置と年間学習指導計画</li> <li>3 「情報」学習指導の実際（授業見学）</li> <li>4 「情報」学習指導の実際（授業見学）</li> <li>5 「情報」学習指導の実際（授業見学）</li> <li>6 学習指導案の作成</li> <li>7 学習指導案の作成</li> <li>8 学習指導案の作成</li> <li>9 模擬授業（1）</li> <li>10 模擬授業（2）</li> <li>11 模擬授業（3）</li> <li>12 模擬授業（4）</li> <li>13 模擬授業（5）</li> <li>14 模擬授業（6）</li> <li>15 情報教育のこれから</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部科学省『高等学校学習指導要領解説情報編』ほか		授業参加度を重視する。授業時に出される小課題(レポート)等も重要な評価材料である。	

03年度以降	教科教育法特論 I	担当者	安井 一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 本講は、中学校における各教科の指導法に関する学習をさらに発展させるために、教科教育法の授業との関連を図りながら、中学校の教科教育に関する理解を広げ、教育課程及び各教科の指導法に関する学習を深めることを目的とする。</p> <p><b>講義概要</b> 本講では、中学校教育の目的・目標、中学校の教育課程における教科教育の意義と役割、教科教育と教科外教育との関係、学力と評価、教科教育の今日的課題等を明らかにすることによって、教科教育に関する理解を深める。そのうえで、今日の教科教育の重要な課題である、各教科の関連づけを図った教科横断的な学習指導についての理解を深めるために、いくつかのグループに分かれ、総合的学習との関連を図った教科学習の学習指導案を作成する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 確かな学力とは何か</li> <li>2 中学校教育の教育課程</li> <li>3 教科と総合的な学習</li> <li>4 クロス・カリキュラムの作成(1)</li> <li>5 クロス・カリキュラムの作成(2)</li> <li>6 クロス・カリキュラムの作成(3)</li> <li>7 クロス・カリキュラムの作成(4)</li> <li>8 クロス・カリキュラムの作成(5)</li> <li>9 クロス・カリキュラムの作成(6)</li> <li>10 クロス・カリキュラムの作成(7)</li> <li>11 クロス・カリキュラムの作成(8)</li> <li>12 クロス・カリキュラムの作成(9)</li> <li>13 クロス・カリキュラムの作成(10)</li> <li>14 作成した学習指導案の発表・検討(1)</li> <li>15 作成した学習指導案の発表・検討(2)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 総則編』 『高等学校学習指導要領』『同解説 総則編』その他は、講義の中で紹介する。		出席（7割以上、厳守のこと）、グループ学習の活動内容、レポートによる総合評価	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	教科教育法特論Ⅱ	担当者	J. J. ダゲン
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>In this course, we will be taking a different approach to teaching. Rather than simply study in dry textbooks about classroom teaching methods and techniques, we will be reading a book written by a teacher for teachers, a book detailing the teacher's teaching beliefs and experiences on teaching, teachers, and students.</p> <p>In addition, we will observe, through the use of video, three inspirational films detailing the teaching experiences of three teachers, their attitudes towards students and teaching, and the techniques they employed in the classroom to improve the learning of their students.</p> <p>By linking these two learning resources, it is hoped that the students in this class will gain a clearer and better understanding of what it means to be a teacher, of teaching, and of students.</p> <p>As attendance is essential for participating in this course, if you miss or are very late for more than 1/3 of the lessons, you will automatically fail.</p>		<p>Week 1: Course introduction, pre-reading activities.  Week 2: Reading activities, pre-viewing activities.  Week 3: Video Ia, assignment.  Week 4: Video 1b, assignment.  Week 5: Post-viewing activities, pre-reading activities.  Week 6: Reading activities, pre-viewing activities.  Week 7: Video IIa, assignment.  Week 8: Video 1Ib, assignment.  Week 9: Post-viewing activities, pre-reading activities.  Week 10: Reading activities, pre-viewing activities.  Week 11: Video IIIa, assignment.  Week 12: Video 1IIb, assignment.  Week 13: Post-viewing activities.  Week 14: Consolidation.  Week 15: Review.</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Handouts		Grades are based on in-class participation, assignments, quizzes, and a final assessment.	

03年度以降	教科教育法特論Ⅱ	担当者	J. J. ダゲン
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>In this course, we will be taking a different approach to teaching. Rather than simply study in dry textbooks about classroom teaching methods and techniques, we will be reading a book written by a teacher for teachers, a book detailing the teacher's teaching beliefs and experiences on teaching, teachers, and students.</p> <p>In addition, we will observe, through the use of video, three inspirational films detailing the teaching experiences of three teachers, their attitudes towards students and teaching, and the techniques they employed in the classroom to improve the learning of their students.</p> <p>By linking these two learning resources, it is hoped that the students in this class will gain a clearer and better understanding of what it means to be a teacher, of teaching, and of students.</p> <p>As attendance is essential for participating in this course, if you miss or are very late for more than 1/3 of the lessons, you will automatically fail.</p>		<p>Week 1: Course introduction, pre-reading activities.  Week 2: Reading activities, pre-viewing activities.  Week 3: Video Ia, assignment.  Week 4: Video 1b, assignment.  Week 5: Post-viewing activities, pre-reading activities.  Week 6: Reading activities, pre-viewing activities.  Week 7: Video IIa, assignment.  Week 8: Video 1Ib, assignment.  Week 9: Post-viewing activities, pre-reading activities.  Week 10: Reading activities, pre-viewing activities.  Week 11: Video IIIa, assignment.  Week 12: Video 1IIb, assignment.  Week 13: Post-viewing activities.  Week 14: Consolidation.  Week 15: Review.</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Handouts		Grades are based on in-class participation, assignments, quizzes, and a final assessment.	

07年度以降	教科教育法特論Ⅱ	担当者	安間 一雄
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>授業の目的</b> 英語科指導に関わる教材開発と教材評価の実践的な運用力向上を目標とする。  <b>授業概要</b> 教育現場での教材使用能力を高めるための方法論を学習し、かつ独自の教材作成・開発のための技能訓練を行う。授業では実際の指導場面を想定し、ペアもしくはグループによる共同学習活動を行う。		1. 外国語教育のシラバスと教材：概要 2. 外国語教育のシラバスと教材：文法訳読法及び構造主義的教授法 3. 外国語教育のシラバスと教材：コミュニカティブ教授法 4. 外国語教育のシラバスと教材：内容重視型教授法 5. 素材の加工・編集：テキスト（1） 6. 素材の加工・編集：テキスト（2） 7. 素材の加工・編集：音声・動画（1） 8. 素材の加工・編集：音声・動画（2） 9. 素材の加工・編集：音声・動画（3） 10. 課題の構成（1） 11. 課題の構成（2） 12. 課題の構成（3） 13. 自主学習課題 14. ポートフォリオ設計 15. まとめ	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
F. ジョンソン／平田為代子訳、『コミュニカティブな英語授業のデザイン』（大修館書店，2000；ISBN 4469244503） 参考文献 授業時に指示する。		小テストおよび授業時の課題	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	道徳教育の研究	担当者	安井 一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 本講は、児童生徒の社会性やモラルの低下など、今日の学校教育をめぐる問題状況をふまえながら、児童・生徒の人間形成においてきわめて重要な役割を果たす道徳教育の目的、内容、方法及びその今日的課題について考察することを目的とする。</p> <p><b>講義概要</b> 道徳教育は、人間形成の基礎にかかわるものであり、人間が社会の中で人間として生きていくために不可欠の内容を有している。本講では、道徳教育の意義と目的、学校教育における位置と役割についての基本的理解を得たうえで、道徳について考えるうえでの基本的な問いを「教育において『いのち』のもつ意味は何か」と捉え、その観点から、今日の道徳教育の現状を分析し、その特徴と問題点を明らかにし、一人ひとりの子どもの「生きる力」の育成に資する道徳教育とは何かについての検討を加える。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 自分の道徳教育体験を振り返る</li> <li>2 道徳とは何か(1)</li> <li>3 道徳とは何か(2)</li> <li>4 学校教育における道徳教育の位置と役割(1)</li> <li>5 学校教育における道徳教育の位置と役割(2)</li> <li>6 新教育課程における道徳教育の課題</li> <li>7 「いのち」の教育とは何か</li> <li>8 「いのち」を考える授業(1)</li> <li>9 「いのち」を考える授業(2)</li> <li>10 「いのち」を考える授業(3)</li> <li>11 学習指導案の作成(1)</li> <li>12 学習指導案の作成(2)</li> <li>13 模擬授業(1)</li> <li>14 模擬授業(2)</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 道徳編』『心のノート 中学校』その他は、講義の中で紹介する。		出席(7割以上、厳守のこと)、レポート、試験による総合評価	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	道徳教育の研究	担当者	小島 優生
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>●講義目的 本講義は、①道徳に関する歴史、②昨今の教育改革における道徳の位置づけと大きくわけて2つの「理論編」の講義と、指導案を作成し、模擬授業を行う、という「実践編」の2つの柱で構成される。これらを通じて、道徳教育に関する実践力を身につけることを目的としている。</p> <p>●講義概要 上記のように前半における理論編では講義中心で行う。後半の指導案作成・模擬授業においてはグループをつくり、実際に自身で教材を探し、「道徳の時間」を構成する。受講人数によるが、いくつかのグループは実際に模擬授業を行う予定である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義に関するガイダンス</li> <li>2. 高校における道徳教育必修化をどう考えるか</li> <li>3. 道徳教育の歴史①</li> <li>4. 道徳教育の歴史②</li> <li>5. 道徳教育の歴史③</li> <li>6. 小テスト&amp;指導案をつくる</li> <li>7. 指導案の検討①</li> <li>8. 指導案の検討②</li> <li>9. ～15まで、模擬授業と振り返り</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義内で指示する。		小テスト、レポート、指導案作成などを総合的に評価。	

03年度以降	道徳教育の研究	担当者	小島 優生
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降 13年度以降	特別活動 特別活動論（12年度以前の交文及び総政を含む。）	担当者	及川 良一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>25年度本格実施の学習指導要領に関する基本的な理解を踏まえ、学校教育における「特別活動」の意義や基本的性格、歴史の変遷等について考察するとともに、「高等学校学習指導要領解説特別活動編」を中心に、「特別活動」の目標や内容、指導計画の作成と内容の取り扱い等について具体的に検討する。また、「特別活動」の内容に関する具体的な進め方や今日的な課題への対応等について検討し、「特別活動」に関する実践的な指導力を養うことを目的とする。さらに、現在の中等教育の課題を明らかにした上で、特別活動のもつ今日的意義について考察を行う。</p> <p>テキスト、配布プリント等を用いて講義中心の授業を行うが、演習では指導計画の作成を通して実践的な指導力を養う。</p>		<p>1 特別活動の意義 ①学校教育と特別活動 ②特別活動の歴史の変遷</p> <p>2 『高等学校学習指導要領解説特別活動編』の研究 ③総説1（学習指導要領改訂の意義） ④総説2（特別活動改訂の要点） ⑤特別活動の目標 ⑥特別活動の基本的な性格 ⑦特別活動の教育的意義 ⑧ホームルーム活動の目標と内容 ⑨生徒会活動の目標と内容 ⑩学校行事の目標と内容 ⑪部活動の意義と取扱い ⑫指導計画の作成・内容の取扱い</p> <p>3 ⑬特別活動演習 4 ⑭担当する教師と評価 5 ⑮講義のまとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>文科省『高等学校学習指導要領解説特別活動編』ぎょうせい 参考文献 山口満編『新版特別活動と人間形成』学文社</p>		<p>指導案、レポートまたは定期試験、出席状況等で総合的に評価する。ただし、7割以上の出席者の評価を対象とする。</p>	

03年度以降 13年度以降	特別活動 特別活動論（12年度以前の交文及び総政を含む。）	担当者	及川 良一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降 13年度以降	特別活動 特別活動論（12年度以前の交文及び総政を含む。）	担当者	桑原 憲一
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義は、特別活動に関する基本的・基礎的な知識と特別活動の在り方や動向に関する知識を修得し、特別活動の特質や本質を踏まえた実践的指導力を育成することを目的とする。</p> <p>特別活動の教育的意義や教育課程上の位置付け、目標と内容、指導計画の作成、指導方法などについて、講義と演習、模擬授業などを通して、現場実践に基づいて学ぶ。</p>		<p>第1回：オリエンテーション 第2回：特別活動と教育課程 第3回：特別活動の内容と変遷 第4回：特別活動の意義と目標 第5回：特別活動と諸教育指導 第6回：生徒会活動の目標と内容 第7回：生徒会活動の指導計画 第8回：学級活動の目標と内容 第9回：学級活動の指導計画1 （指導計画作成の基礎・基本） 第10回：学級活動の指導計画2（指導計画の作成） 第11回：学級活動の模擬授業 第12回：学校行事の目標と内容 第13回：学校行事の指導計画1 （指導計画作成の基礎・基本） 第14回：学校行事の指導計画2（指導計画の作成） 第15回：学校行事の指導計画3（指導計画の評価）</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
『実践的指導力をはぐくむ』『特別活動指導法』 桑原憲一他編 日本文教出版 中学校学習指導要領解説特別活動編		平常点（20%）、指導案（30%）、試験（50%）により、出席3分の2以上の受講者を評価対象者として総合的に評価する。	

03年度以降	教育方法学	担当者	安井 一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 本講は、今日の学校教育、とりわけ授業の構成と展開をめぐる問題状況を踏まえながら、教育方法の研究、実践に関する今日的な課題について考察することを目的とする。</p> <p><b>講義概要</b> 毎日の授業をどのように工夫したらよいのか、子どもたちの個性を最大限に生かせるような指導とは何か等の問いに代表されるように、授業の内容とその方法に関する諸問題は、学校教育における最も重要な課題の一つである。本講では、教育方法学のうち、特に授業研究の問題に焦点をあて、授業研究を行ううえでの基本的な考え方はどのようなものであるのか、授業を成り立たせている構成要素は何か、授業を展開する具体的な方法とは何か等の問題について、各種資料やVTRによる授業記録などを用いながら多面的に検討を加え、授業研究に関する理解を深めていく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 自分の授業体験を振り返る</li> <li>2 授業とは何か</li> <li>3 教育実習生の授業</li> <li>4 ベテラン教師の授業</li> <li>5 教材研究とは何か(1)</li> <li>6 教材研究とは何か(2)</li> <li>7 教材研究の事例の検討(1)</li> <li>8 教材研究の事例の検討(2)</li> <li>9 教材研究の事例の検討(3)</li> <li>10 教材研究とメディア</li> <li>11 新教育課程と授業</li> <li>12 林竹二の授業論から見た今日の授業研究の課題(1)</li> <li>13 林竹二の授業論から見た今日の授業研究の課題(2)</li> <li>14 林竹二の授業論から見た今日の授業研究の課題(3)</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 総則編』 『高等学校学習指導要領』『同解説 総則編』その他は、講義の中で紹介する。</p>		出席(7割以上、厳守のこと)、レポート、試験による総合評価	

03年度以降	教育方法学	担当者	安井 一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	生徒指導法	担当者	海野 省治
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b>          教員は、校種の如何を問わず、児童・生徒に対する何らかの生徒指導を行う。ここでは、授業や行事等日常の学校生活において、教員として、又は学校として行うべき生徒指導についての基本的な考え方、指導の方法、などについて実践的に学ぶ。教育相談や更には、中・高校生の心理についても触れ、指導の為の理解を深める。</p> <p><b>講義概要</b>          授業計画の前半は講義中心で意見交換も含む。後半は事例研究。対応の仕方をグループ毎の意見交換等で進める。          具体的には、受講者を班分け。5～7名程度。生徒指導上の課題についての検討会、意見交換会を持つ。4、5回は行いたい。積極的な意見交換が出来ると思う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 生徒指導の意義と実際</li> <li>3 学校における生徒指導組織・指導体制</li> <li>4 生徒理解・青年期の心</li> <li>5 生徒指導の進め方と教育相談</li> <li>6 生徒指導と外部機関との連携</li> <li>7 道德教育との関連を考える</li> <li>8 進路指導・キャリア教育のあり方</li> <li>9～14 指導事例に基づく対応の仕方研究 ・進路指導事例、教科指導上の事例、学校行事の事例、問題行動の事例など</li> <li>15 あらためて生徒指導とは何か</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
「生徒指導提要」文部科学省 発行 教育図書¥290		課題やレポートなどの提出物 試験 平常点などで評価	

03年度以降	生徒指導法	担当者	海野 省治
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	生徒指導法	担当者	桑原 憲一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>生徒理解の教育的意義と具体的な方法について理解を深め、さらに教育活動における生徒指導の基本的なあり方について理解を深め実践的な指導力を身につける。</p> <p>前半は講義中心、後半は事例研究を中心に行う。事例研究を出来るだけ多く行い、具体的な生徒指導のあり方について意見交換を含めて検討していく。</p>		<p>第1回：オリエンテーション  第2回：生徒指導の意義と実際  第3回：学校における生徒指導組織と指導体制  第4回：青年期学習を通じた生徒理解  第5回：生徒指導の進め方と教育相談  第6回：生徒指導と外部機関との連携  第7回：生徒指導と道德教育  第8回：進路指導・キャリア教育と生徒指導  第9回：事例研究（進学指導）  第10回：事例研究（職業指導）  第11回：事例研究（校則問題）  第12回：事例研究（不登校・中途退学問題）  第13回：事例研究（飲酒・喫煙・盗み）  第14回：事例研究（いじめ・校内暴力）  第15回：総括</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義毎に配布する資料。参考文献は講義内容に応じて適宜紹介する。		平常点（30%）、課題レポート（20%）、試験（50%）により、出席3分の2以上の受講者を評価対象者として総合的に評価する。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	学校カウンセリング	担当者	瀧本 孝雄
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>まず初めに教育相談とは何かについて考察し、その具体的内容について検討する。次に、カウンセリングについての理論、技法等について全般的に学習する。</p> <p>さらに学校カウンセリングの目標と方法に関して具体的に学習する。特にいじめ、校内暴力、非行、情緒障害等について、教育相談との関連において考察していく。さらに心理テストの役割について概説し、カウンセリングにおける心理テストの役割を考察したうえで、実際に心理テストを実施する。</p> <p>また、養護教諭、学校医、スクールカウンセラー等の職務の実際や連携について考察する。</p>		<p>第1回：ガイダンス 第2回：グループ・ワーク 第3回：教育相談とは何か 第4回：教育相談の内容 第5回：養護教諭、学校医の役割 第6回：スクールカウンセラーの役割 第7回：カウンセリングの目的とその意義 第8回：カウンセリングの理論と技法 第9回：学校カウンセリングの目的と特徴 第10回：学校カウンセリングの方法 第11回：中学生・高校生と学校カウンセリング 第12回：生徒の問題行動 第13回：生徒の精神衛生 第14回：心理テストの理論と実際 第15回：全体のまとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『カウンセリングへの招待』瀧本孝雄著 サイエンス社 2006		評価方法は講義、グループ・ワークに関する小テスト、レポートおよび出席状況による。	

03年度以降	学校カウンセリング	担当者	瀧本 孝雄
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	学校カウンセリング	担当者	鈴木 乙史
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>学校場面で必要とされるガイダンスとカウンセリングの知識・技術を講義する。また学校という場の特徴を知り、そこでの教育相談全般および教職員相互の連携について、特に多く見られる諸問題、例えば、不登校・いじめ・集団不適応的行動などについて、個々の事例を分析・検討しながら、その効果的対処法を考える。カウンセリングの技術に関しては、適宜実習を行う。</p>		<p>第1回： オリエンテーション  第2回： 学校カウンセリングとは  第3回： 学校という場の特徴  第4回： 学校における教育相談  第5回： 教職員相互の連携について  第6回： カウンセリングとガイダンスの方法  第7回： カウンセリングの基礎と応用（1）  日常会話とカウンセリングでの会話  第8回： カウンセリングの基礎と応用（2）  応答の技法  第9回： カウンセリングの基礎と応用（3）  質問の技法  第10回： 不登校の事例検討（1）小学生の事例  第11回： 不登校の事例検討（2）中学生の事例  第12回： いじめの事例検討（1）孤立したケース  第13回： いじめの事例検討（2）グループ内で起きたケース  第14回： その他の学校不適応問題  第15回： まとめ</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>テキストは使わない。その都度、必要なプリントを配布する。</p>		<p>期末レポートおよび授業中に与える小課題や出席などから評価する。</p>	

09年度以前	総合演習	担当者	教職課程
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 本講は、教師を志望する学生が、今日の小・中・高等学校の教育において求められている「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」を身に付けるために、現代社会に存在する諸問題に関する課題解決的な学習についての実践演習を行うことを目的とする。</p> <p><b>講義概要</b> 本講では、中学校・高等学校における課題解決的な学習を想定し、生徒が日々の生活や学習で直面する現代的な課題（たとえば、環境、食と健康、国際理解、多文化共生、情報とコミュニケーション等）に関するグループ研究、グループ発表、相互評価を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 総合演習の意義とねらい、グループ分け</li> <li>2 各グループにおける学習テーマの設定(1)</li> <li>3 各グループにおける学習テーマの設定(2)</li> <li>4 グループ研究(1)</li> <li>5 グループ研究(2)</li> <li>6 グループ研究(3)</li> <li>7 グループ研究(4)</li> <li>8 グループ研究(5)</li> <li>9 グループ研究(6)</li> <li>10 グループ研究(7)</li> <li>11 グループ研究(8)</li> <li>12 グループ研究(9)</li> <li>13 グループ研究(10)</li> <li>14 グループ研究(11)</li> <li>15 グループ研究の評価と反省</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 総合的な学習の時間編』『高等学校学習指導要領』『同解説 総合的な学習の時間編』その他は、講義の中で紹介する。		出席(7割以上、厳守のこと)、レポートによる総合評価。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

09年度以前 10年度以降	教育実習論 I (事前指導) 教育実習論(事前・事後指導)	担当者	安井 一郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的</p> <p>本講は、教育実習の意義や目的、その概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を行うことにより、教育実習に向けての準備を進めることを目的とする。</p> <p>講義概要</p> <p>教育実習は、これまで大学の教職課程で学んできたことの成果を、実習校での学校運営に教育実習生として直接参加することによって、具体的に実証する機会である。本講では、教育実習の事前指導として、教育実習に参加することの意義や目的、実習期間中の学校生活の概要を理解するとともに、学習指導案の作成、基礎的な指導技術の習得、模擬授業等を体験することにより、実習における学習のポイントを明確にする。また、実習生としての心構え、実習期間中の留意点等についてもふれ、教育実習に関する理解を深めていく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 教育実習とは何か</li> <li>2 教育実習の概要</li> <li>3 授業を見る(1)</li> <li>4 授業を見る(2)</li> <li>5 授業を見る(3)</li> <li>6 授業を見る(4)</li> <li>7 授業のスキル</li> <li>8 授業の評価</li> <li>9 学習指導案の作成(1)</li> <li>10 学習指導案の作成(2)</li> <li>11 模擬授業(1)</li> <li>12 模擬授業(2)</li> <li>13 模擬授業(3)</li> <li>14 模擬授業(4)</li> <li>15 教育実習期間中の諸注意</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>獨協大学『教育実習の指針』文部科学省『中学校学習指導要領』『同解説 総則編』『高等学校学習指導要領』『同解説 総則編』その他は、講義の中で紹介する。</p>		出席(8割以上、厳守のこと)、レポート、試験による総合評価	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

09年度以前 10年度以降	教育実習論Ⅰ(事前指導) 教育実習論(事前・事後指導)	担当者	岩崎 充益
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>教師にとってその日、その日の授業は真剣勝負である。毎日の授業に全力投入しなければならない。教育実習は幾週間かの授業を学校から提供してもらい、実際に授業をする機会が与えられるシステムである。教育実習生の受け入れにあたり、大切な授業を提供するわけだから学校側は実習生に大きな期待を抱いている。より多くの優れた人材が教育界で活躍し、未来の使者である児童・生徒の教育に献身的にあたることを期待している。この講義を通じて教育実習の重みを知るとともに、将来有能な教師となり、教育界に尽力する人材を育成する。</p> <p>授業の概要</p> <p>どんな人も最初に会う大人が教師である。教師と出会い、影響をうけ成長していく。そういう意味で教師という職業は大変責任のともなう職務である。</p> <p>教師という職業の重要性、現代教育事情、生徒との付き合い方、実際の授業運営の方法などを実践演習を通じて学習する。</p>		<p>第1回：教師という職業・教育実習の意義</p> <p>第2回：現代教育事情Ⅰ</p> <p>第3回：現代教育事情Ⅱ</p> <p>第4回：授業参観のポイントと研究授業</p> <p>第5回：生活（生徒）指導と生徒理解</p> <p>第6回：学校運営組織と校務分掌</p> <p>第7回：教育課程の編成</p> <p>第8回：教科外活動・道徳活動・奉仕活動他</p> <p>第9回：学校における危機管理・事例研究</p> <p>第10回：授業の進め方と単元指導計画書の作成</p> <p>第11回：授業の進め方と単元指導計画書の作成</p> <p>第12回：授業実践演習Ⅰ</p> <p>第13回：授業実践演習Ⅱ</p> <p>第14回：授業実践演習Ⅲ</p> <p>第15回：講評・評価</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
『教育実習の指針』獨協大学 各授業の中で自作の参考資料を配布する。		授業の中の presentation、課題図書を読んで reaction paper（単なる感想文ではありません）、単元指導計画書で総合的に判断する。（8割以上の出席者を評価対象）	

09年度以前 10年度以降	教育実習論Ⅰ(事前指導) 教育実習論(事前・事後指導)	担当者	小島 優生
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>●講義目的 教育実習にいく前の最後の授業であるので、主にこれまで教科指導法等で学んだ授業方法や、生徒指導を踏まえ、実習前の実践的な総まとめをすることが目的である。</p> <p>●講義概要 1.～3.まででは、4年生の発表をもとに実習の概要をつかみ、今から必要な準備について考える。それを互いに発表することで様々な学校の概要や、その特徴にあった指導等を共有する。 4.ではそれらをもとにして、これから実習までに準備すべきことを考える。  5.～14.では、4年生の指導も受けながら指導案を作成し、模擬授業を行う。これによって、教案の書き方、授業準備の仕方、授業の進め方や注意点などを、再度きめ細かく学ぶ。また、他の人の授業に参加し、コメントを共有することで自身の模擬授業に反映させる。</p> <p>●留意点 教育実習論Ⅱ（事後指導）との合併科目である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス・自己紹介等</li> <li>2. 教育実習の概要（1）生活指導編</li> <li>3. 教育実習の概要（2）学習指導編</li> <li>4. 実習までに準備すべきことは何か</li> <li>5. 学習指導案を作成する①</li> <li>6. 学習指導案を作成する②</li> <li>7. 学習指導案を検討する</li> <li>8. ～14. 模擬授業</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
獨協大学指定教材		①出席、発言などの授業への貢献、②指導案やレポートの提出などを評価する。	

09年度以前 10年度以降	教育実習論Ⅰ(事前指導) 教育実習論(事前・事後指導)	担当者	小島 優生
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

09年度以前	教育実習論Ⅱ(事後指導)	担当者	小島 優生
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>●講義目的 この講義は、すでに教育実習を終えた学生を対象に、教育実習の振り返りをするを目的としている。 自身の実習を総括し、これから教師として成長するために必要なことを検討し、そのための方法を考える。</p> <p>●講義内容 おもに1～4ではグループになり、①授業編、②生活指導編、③指導案その他で教育実習を振り返る。他校に行った学生の指導案や日誌を見ることで自身との共通点や差異を見つけ、ディスカッションする。 5～6ではそれらのディスカッションを踏まえ、指導案を作成し、互いの授業の工夫などについても再度ディスカッションを行う。 7～14にかけては、そこで作成した指導案について、模擬授業を実施し、検討する。</p>		<p>1. ガイダンス (自己紹介等)</p> <p>2. 実習の振り返り (生活指導)</p> <p>3. 実習の振り返り (指導案)</p> <p>4. 実習の振り返り (授業)</p> <p>5. 指導案を作成する</p> <p>6. 指導案を検討する</p> <p>7～14. 模擬授業</p> <p>15. まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>持参するもの：教育実習日誌、教科書、指導案 参考文献：あれば授業中に指示する</p>		<p>①授業への参加、発言などの貢献、②指導案、③他の受講生へのコメント、④模擬授業などを総合的に評価する。</p>	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

09年度以前 10年度以降	教育実習論Ⅱ(事後指導) 教職実践演習(中・高)	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p><b>【到達目標及びテーマ】</b> 教職課程の総仕上げとして、個々の授業において習得してきた知識技能を元に、教員としての使命感や教育的愛情、授業力等の資質が身についているかどうか確認し、今後の教員としての成長発達につなげる契機とする。また、方法としてディスカッションを多用することで対人能力の確認も含んでいる。</p> <p>また、これから教員として成長していくために必要な課題を自身で設定し、解決の糸口を探る小論文を作成することで今後の自身の教員としての成長を考える。</p> <p><b>【授業の概要】</b> 主に①これまでの教職課程で習得してきた内容と教育実習を振り返り、【教員としての使命感・教育的愛情】、②現在学校が抱えている課題とそれへの対応を、現職教員からの講義やロールプレイ、討論を通してより具体的に考察し、【生徒理解】、③模擬授業を通してよりよい授業力を身につけると同時に授業力向上への方途を探究する。また、授業の多くがグループでのディスカッションや作業の形態をとり、それを通して教員として必須な「他の人と話し合い、協力しあう」という対人関係能力の確認、向上も同時に目指していく。</p>		<p>第1回 教育実習の振り返り①生徒指導・生徒理解編 (グループでのディスカッション小論文)【使命感】</p> <p>第2回 教育実習の振り返り②授業編 (グループでのディスカッション・学習指導案を再検討)【授業力】</p> <p>第3回 履修カルテの記入・確認&amp;私に必要なスキルとは? (各自で課題を設定)</p> <p>第4回 実習校でのフィールドワーク</p> <p>第5回 生徒理解①(現職中・高教員による講義・小論文) 【生徒理解】</p> <p>第6回 生徒理解②(グループディスカッション・小論文) 【生徒理解】</p> <p>第7回 実習中経験した課題への対応 (グループディスカッション・小論文)【生徒理解】</p> <p>第8回 すぐれた授業とは何か (グループディスカッション・小論文)【授業力】</p> <p>第9回 学習指導案を作成する (各自→教科担当教員の指導)【授業力】</p> <p>第10回 学習指導案を検討する (グループディスカッション)【授業力】</p> <p>第11回 模擬授業①</p> <p>第12回 模擬授業②</p> <p>第13回 模擬授業③</p> <p>第14回 模擬授業④</p> <p>第15回 まとめ——設定した課題は達成できたか(小論文) 【使命感】</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
『教育実習の指針』(獨協大学) 文部科学省『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』		ディスカッションや作業などへの積極的な参加、発言など授業への貢献、学習指導案、レポートなどの提出物、模擬授業等を総合的に判断する。	

03年度以降	介護ボランティアの理論と実践	担当者	門 美由紀
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は教職課程の「介護等体験」履修時など、「介護」を必要とする方と接する際に求められる知識や援助について、基本的な理解を深めることを目的としています。そこで、介護について高齢者福祉分野を中心に概観したのち、ボランティア全般について、さらには介護現場でのボランティア実践について学びを進めていきます。</p> <p>講義ではVTRなどを通して、具体的な理解を深めていきます。まず、介護の概念と歴史、高齢者福祉にかかわる制度政策、介護の現場と介護技術について学びます。次に、ボランティアの概念、日本でのボランティア活動の展開、介護分野におけるボランティアな実践について学びます。そして、地域で生活を支えるために私たちのできること、また介護現場における多文化の問題について考えます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 介護の歴史と定義</li> <li>3. 介護の現場—高齢者</li> <li>4. 介護の現場—障害者</li> <li>5. 社会福祉関係法令に見る介護</li> <li>6. 介護保険制度とは何か</li> <li>7. 生活を支えるための介護技術</li> <li>8. 認知症の理解と対応</li> <li>9. ボランティアな活動の展開とその定義</li> <li>10. 多様なボランティア活動の実際</li> <li>11. 介護現場でのボランティア</li> <li>12. ボランティア活動における留意点</li> <li>13. 地域で生活を支える</li> <li>14. 介護にかかわる現代的課題</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは指定しません。</p> <p>講義中に適宜、コピーの配布・参考文献の紹介を行います。</p>		<p>出席状況（30%、授業中に課す小レポートの提出を含む）及び、期末試験（70%、またはレポート）により評価します。</p>	

03年度以降	介護ボランティアの理論と実践	担当者	山岸 倫子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、障害者や高齢者を中心とする介護の領域におけるボランティア活動の意義と目的、実践活動について学びます。</p> <p>介護の歴史や概念、特質を踏まえたうえで、実際に介護にかかわる際の基本的姿勢及び実践的知識を学び、制度とボランティアの関係性についてとらえることを目的とし、具体的な例を提示しながら、ボランティアがどのように介護ニーズを満たしていくのかということについて学習していきます。</p> <p>また、介護がボランティアでなされる場合の課題、批判点などにも目を向け、総合的な視点から介護とボランティアについて考えてゆく講義を予定しています。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 介護の歴史</li> <li>2. 介護とは何か</li> <li>3. 介護の種類</li> <li>4. 介護保険法</li> <li>5. 障害者自立支援法（障害者総合福祉法）</li> <li>6. 介護と「制度の狭間」</li> <li>7. 介護実践のための基本的知識</li> <li>8. 介護の基本姿勢・基本技術</li> <li>9. グループワーク</li> <li>10. ボランティアとは何か</li> <li>11. ボランティアの歴史</li> <li>12. 介護ボランティアの実践領域</li> <li>13. 介護ボランティアと教育</li> <li>14. 介護ボランティアの課題</li> <li>15. まとめと展望</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは特に指定しません。</p> <p>講義中に随時紹介いたします。</p>		<p>授業態度：40%</p> <p>出席：30%</p> <p>期末試験：30%</p>	

03年度以降	日本史概説Ⅰ	担当者	會田 康範
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近年の日本史研究では、日本列島に展開した歴史像がより多角的、多面的な捉えなおされており、今日では一定の成果を確認することができる。こうした研究状況をふまえ、前近代を素材に文字史料の読み直しとともに非文字史料にも着目し、それぞれの時代像や歴史認識を豊かにするために重要と思われるテーマを講義していきたい。</p> <p>極めて限られた時間数の中での講義のため、歴史経過にそって通史的に講義することは必要最低限にとどめるとともに、取り上げるテーマには時代的に多少の多寡があることも予め了承しておいていただきたい。</p> <p>高校までの歴史学習で習得した歴史の流れをふまえて授業にのぞむことが授業を退屈にさせないカギとなるだろう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. プロローグ的に一日本とは？歴史とは？—</li> <li>2. 日本における歴史研究の歴史—史学史①—</li> <li>3. 日本における歴史研究の歴史—史学史②—</li> <li>4. 古代の社会—弥生のムラとクニ①—</li> <li>5. 古代の社会—弥生のムラとクニ②—</li> <li>6. 古代の社会—ワカタケル大王の時代—</li> <li>7. 古代の社会—律令制の形成と展開—</li> <li>8. 中世の社会—絵図にみる百姓と武士の世界①—</li> <li>9. 中世の社会—絵図にみる百姓と武士の世界②—</li> <li>10. 中世の社会—洛中洛外図を読み解く①—</li> <li>11. 中世の社会—洛中洛外図を読み解く②—</li> <li>12. 中世の社会—洛中洛外図を読み解く③—</li> <li>13. 中世から近世へ①</li> <li>14. 中世から近世へ②</li> <li>15. まとめ</li> </ol> <p>なお、上記の計画は授業展開により変更されることもある。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>特定のテキストは使用せず、参考文献は講義の中で随時、紹介・配布する。高等学校の日本史の教科書や概説書が手元があれば参考になる。</p>		<p>試験とともに授業内容に応じて課す小レポートなどとともに、出席状況も含め総合的に評価する。(許可なき途中退出などは厳禁)</p>	

03年度以降	日本史概説Ⅱ	担当者	會田 康範
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>日本史概説Ⅰに続くこの講義では、近現代を素材としていく。その際、対外関係を基軸に考察していくが、その前提となる前近代の対外関係についても扱うことになる。この講義を通じて、現代の国際化社会における日本のあり方、さらには歴史教育のあり方などをめぐって受講生とともに考えていきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 古代・中世の自国認識と他国認識①</li> <li>2. 古代・中世の自国認識と他国認識②</li> <li>3. 海禁と華夷秩序の形成・展開</li> <li>4. 日本型華夷秩序構築の可能性と展開</li> <li>5. 「鎖国」論をめぐって①</li> <li>6. 「鎖国」論をめぐって②</li> <li>7. 近世の本草学と博物学①</li> <li>8. 近世の本草学と博物学②</li> <li>9. 近代の対外認識① —「近代」と「他者」へのまなざし—</li> <li>10. 近代の対外認識② —「近代」と「他者」へのまなざし—</li> <li>11. 国民国家論とは</li> <li>12. 博覧会・博物館と国民国家①</li> <li>13. 博覧会・博物館と国民国家②</li> <li>14. 戦争の世紀と万博</li> <li>15. まとめ (エピローグ的に) —こんにちの歴史学・歴史教育の課題—</li> </ol> <p>なお、上記の計画は授業展開により変更されることもある。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>特定のテキストは使用せず、参考文献は講義の中で随時、紹介・配布する。高等学校の日本史の教科書や概説書が手元があれば参考になる。</p>		<p>試験とともに授業内容に応じて課す小レポートなどとともに、出席状況も含め総合的に評価する。(許可無き途中退出などは厳禁)</p>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	外国史概説 I	担当者	兼田 信一郎
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この講義では、はじめに現代中国の地理的・風土的特徴と、最近の中国事情や社会問題を概観した後、新石器時代から唐帝国滅亡までの歴史を、政治的展開、周辺諸民族との関係、農村社会の展開、の3つを軸に概観していきます。</p> <p>中国社会の特質を考える際、特に農村社会に注目するのは、農村社会こそ、前近代中国において、多くの人々の生きる場であり、そこで形成される諸関係が、中国社会の特質の一端であることと、現在の中国において、最も深刻な問題を抱えているのが、農村社会でもあるからです。</p> <p>そこで、単に新石器時代から唐帝国滅亡までの政治的展開を概観するだけでなく、同時に、農村社会の成立と展開を見ることで、中国社会の特質にふれてもらうと同時に、われわれ日本社会との対比を通して「異文化理解」を体験してもらいたいと思います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 現代中国概況（地誌・現代中国社会の諸問題）</li> <li>3. 中華文明の形成（新石器時代～殷周時代）</li> <li>4. 最初の社会変動と小家族農民の登場（春秋戦国時代）</li> <li>5. 皇帝支配の成立・展開と郷里社会①（秦・前漢時代）</li> <li>6. 皇帝支配の成立・郷里社会②</li> <li>7. 豪族の成長と郷里社会の変質（後漢時代）</li> <li>8. 新集落の登場と貴族制の成立（三国・西晋時代）</li> <li>9. 少数民族の侵入と長期の分裂（東晋・南北朝時代）</li> <li>10. 中国社会の再統一（隋・唐時代）</li> <li>11. 唐帝国の盛衰①（唐律令体制と郷里社会）</li> <li>12. 唐帝国の盛衰②（唐帝国と周辺諸民族との関係）</li> <li>13. 唐帝国の盛衰③（藩鎮体制、唐の滅亡）</li> <li>14. 南宋「清明集」の世界</li> <li>15. まとめ（中国社会の特質）</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
堀敏一『中国通史』（講談社学術文庫）、講談社、00年6月。講義中に配布するプリント・資料を基本テキストとする。また、参考文献も講義中に紹介する。		出席状況（3割）と筆記試験（7割）（語句記述、史料問題その他、持ち込み不可）の成績で評価を出す。	

03年度以降	外国史概説Ⅱ	担当者	久慈 栄志
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>ヨーロッパ諸国の「近代化」課程を社会・文化・経済・宗教等の側面から考察する。「近代化」の特質とその功罪を検証し、明治以降のわが国に及ぼした影響を与えたか、という点もあわせて論じたい。</p> <p>16世紀頃から19世紀までの歴史的事象の中から、ヨーロッパ圏内はもとより、周辺世界に対してもインパクトが大であった事項を取り上げる。前半は宗教的側面から、後半は経済的側面を中心にアプローチしたい。</p> <p>また「近代化」の帰結として現れた「帝国主義」の諸類型についても言及したい。</p> <p>テキストは特に指定しないが、下に掲げた参考文献中、2冊程度は目を通してほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小川 哲／上垣 豊／山田史郎／杉本淑彦編『大学で学ぶ西洋史（近現代）』（ミネルヴァ書房）</li> <li>中井義明／佐藤専次／渋谷 聡／加藤克夫／小澤卓也編『教養のための西洋史入門』（ミネルヴァ書房）</li> <li>服部良久／南川高志他編『人文学への接近法（西洋史を学ぶ）』（京都大学学術出版会）</li> <li>堺憲一『あなたが歴史と出会うとき』【新版】（名古屋大学出版会）</li> </ul>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 歴史叙述・歴史理論の変遷（古代～中世）</li> <li>3. 同上</li> <li>4. 歴史叙述・歴史理論の変遷（近代以降）</li> <li>5. 同上</li> <li>6. 「近代」の概念について論ずる</li> <li>7. 宗教改革～宗教改革に見る近代性と、インパクトについて</li> <li>8. 同上</li> <li>9. 市民革命～英仏両革命の共通性と異質性とは何か</li> <li>10. 同上</li> <li>11. 産業革命～「繁栄」の裏で進行する社会の諸矛盾、社会主義の必然性について考察する</li> <li>12. 同上</li> <li>13. 「近代化」とは何だったのか～その変質を考える</li> <li>14. 帝国主義と世界再分割～経済的矛盾の「武力による打開」と「差別意識」について</li> <li>15. 同上</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>上記の参考文献を参照のこと。</p> <p>また、高校世界史教科書及び、図録なども座右に置くことが望ましい。</p>		<p>試験を実施する。（記述形式、ノート持込不可）</p> <p>出席状況も加味する。</p>	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降	地理学概説Ⅰ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>自然環境と人間のかかわりについて、地理学的観点から具体的な事例をもとに考察する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な自然環境の見方を身につける。</p> <p>本講義では、身近な地域の環境を自然地理学の観点から分析する基礎として、まず地形図の利用法を扱う。その後、関東地方の自然地理的な特色とその基盤の上に立った人々の生活について説明する。</p> <p>*講義科目ではあるが、実習等を行う予定である。色鉛筆、定規等指示された用具を準備すること。</p> <p>*中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、次の文部科学省検定済教科書を購入し、自習しておくこと。(授業時には必要に応じて持参する。)</p> <p>『詳解地理 B』 二宮書店 『コンパクト地図帳』 二宮書店</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション (講義の概要)</li> <li>2. 地形図利用の基礎(1) 地形図の基礎知識</li> <li>3. 地形図利用の基礎(2) 距離と面積、等高線と地形</li> <li>4. 地形図利用の基礎(3) 土地利用を読む</li> <li>5. 東京・関東の地形的特色(1)山の手と下町</li> <li>6. 東京・関東の地形的特色(2)台地</li> <li>7. 東京・関東の地形的特色(3)荒川と利根川の低地</li> <li>8. 東京・関東の地形的特色(4)東京湾</li> <li>9. 東京・関東の地形的特色(5)関東山地</li> <li>10. 東京・関東の地形的特色(6)地形のスケールと営力</li> <li>11. 東京・関東の気候的特色(1)気候システムと気候のスケール、気候と景観、観測とデータ</li> <li>12. 東京・関東の気候的特色(2)山地の気候・平野の気候</li> <li>13. 東京・関東の気候的特色(3)海岸の気候・内陸の気候</li> <li>14. 東京・関東の気候的特色(4)都市気候と気候の変化</li> <li>15. 東京・関東の自然災害と防災</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。参考文献等は講義中に示される。		試験とレポート (小課題)、出席状況	

03年度以降	地理学概説Ⅱ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地理学の基本的概念を理解し、これらの概念を用いて、どのような研究が行われているかを展望する。あわせて、中等教育諸学校で、地理の授業を行う際に必要とされる基本的な人文地理学の見方・考え方を身につける。</p> <p>本講義では、地理的知識の拡大と地理学の歴史を述べた後、地理学の主要概念のうち「環境」「景観」「場所と立地」「地域と空間」「伝播」について解説する。さらに、人文地理学のいくつかのテーマを取り上げ理解の深化を図る。</p> <p>*中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、次の文部科学省検定済教科書を購入し、自習しておくこと。(授業時には必要に応じて持参する。)</p> <p>『詳解地理 B』 二宮書店 『コンパクト地図帳』 二宮書店</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地理学の歴史 (1)</li> <li>2. 地理学の歴史 (2)</li> <li>3. 地理学の歴史 (3)</li> <li>4. 地理学の主要概念 (1) 環境</li> <li>5. 地理学の主要概念 (2) 景観</li> <li>6. 地理学の主要概念 (3) 場所と立地 (位置の表記)</li> <li>7. 地理学の主要概念 (4) 場所と立地 (農業・工業立地論)</li> <li>8. 地理学の主要概念 (5) 場所と立地 (都市の立地)</li> <li>9. 地理学の主要概念 (6) 地域と空間</li> <li>10. 地理学の主要概念 (7) 伝播</li> <li>11. 地理学のトピックス (1) 時間地理学</li> <li>12. 地理学のトピックス (2) メンタルマップ</li> <li>13. 地理学のトピックス (3) 地理情報システム (1)</li> <li>14. 地理学のトピックス (4) 地理情報システム (2)</li> <li>15. 地理学のトピックス (5) 教育と地理</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。参考文献等は講義中に示される。		試験とレポート (小課題)、出席状況	

03年度以降	地誌学概説Ⅰ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>特定の地域を対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。地誌学における主要概念である「地域」と地域分析法を理解した上で、日本を事例地域として地誌学的見方を身につけることを目的とする。</p> <p>本講義では、地誌学の方法、「地域」概念について講義した後、地域を扱う上で必要な文献や統計の収集法や利用法、統計分析など地域分析の手法を習得する。その上で、日本地誌を扱う。</p> <p>*講義科目であるが、実習を含むので、色鉛筆、電卓等授業中に指示された用具は各自用意すること。</p> <p>*地図帳を持参すること。</p> <p>*中学校「社会」、高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、次の文部科学省検定済教科書を購入し、自習しておくこと。(授業時には必要に応じて持参する)</p> <p>『詳解地理 B』 二宮書店 『コンパクト地図帳』 二宮書店</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーションー地誌学とは</li> <li>2. 「地域」の概念</li> <li>3. 地域分析の基礎 (1) 文献・資料・統計の所在と検索</li> <li>4. 地域分析の基礎 (2) 統計の利用</li> <li>5. 地域分析の基礎 (3) 統計の地図表現</li> <li>6. 地域分析の基礎 (4) 空間分析</li> <li>7. 地域分析の基礎 (5) 地域構造</li> <li>8. 日本地誌 (1) 自然環境と風土</li> <li>9. 日本地誌 (2) 歴史的背景と地域文化</li> <li>10. 日本地誌 (3) 人口分布と人口構造</li> <li>11. 日本地誌 (4) 産業と地域変容 (第1次産業)</li> <li>12. 日本地誌 (5) 産業と地域変容 (第2次産業)</li> <li>13. 日本地誌 (6) 交通・通信と地域</li> <li>14. 日本地誌 (7) 都市の変容</li> <li>15. 日本地誌 (8) 地域構造と地域区分</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。参考文献等は講義中に示される。		試験とレポート(小課題)、出席状況	

03年度以降	地誌学概説Ⅱ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>特定の地域を対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。本講義では、世界の地域構造を概観したのち、アメリカを事例地域としてとりあげ、地誌学的見方を身につけることを目的とする。</p> <p>*地図帳を持参すること。</p> <p>*中学校「社会」高等学校「地理歴史」教員免許取得のための講義である。高等学校等において「地理」を履修していないものは、次の文部科学省検定済教科書を購入し、自習しておくこと。(授業時には必要に応じて持参する)</p> <p>『詳解地理 B』 二宮書店 『コンパクト地図帳』 二宮書店</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 世界認識の基礎</li> <li>2. 世界の地域構造とその変容 (1) 自然的基盤</li> <li>3. 世界の地域構造とその変容 (2) 文化圏</li> <li>4. 世界の地域構造とその変容 (3) 国家と経済</li> <li>5. アメリカ地誌 (1) アメリカとは</li> <li>6. アメリカ地誌 (2) 自然景観 (1) 地形環境</li> <li>7. アメリカ地誌 (3) 自然景観 (2) 気候環境</li> <li>8. アメリカ地誌 (3) 歴史的背景</li> <li>9. アメリカ地誌 (4) 人口と社会 (1) 移民社会の形成</li> <li>10. アメリカ地誌 (5) 人口と社会 (2) 国内移動と地域</li> <li>11. アメリカ地誌 (6) 産業と経済 (1) 第1次産業</li> <li>12. アメリカ地誌 (7) 産業と経済 (2) 第2次産業</li> <li>13. アメリカ地誌 (8) 産業と経済 (3) 第3次産業</li> <li>14. アメリカ地誌 (9) 都市と生活</li> <li>15. アメリカ地誌 (10) アメリカと世界</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。参考文献等は講義中に示される。		試験とレポート(小課題)、出席状況	

03年度以降	法律学概説Ⅰ	担当者	吉川 信将
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期の「法律学概説Ⅰ」では、法律を大きく二つに分類した場合の公法と私法のうち、後者に焦点を当てます。私法とは、自由・対等な私人間（個人間だけでなく、企業間、あるいは企業と個人間も含まれる）の法律関係を規律する法の総称です。本講はこれらの背後に存する基本的な考え方を理解することを目的とします。</p> <p>買い物ですれば、取り立てて意識しなくとも、そこでは売買契約が成立するといったように、我々が日常生活を送る上では様々な形で法律が関わってきます。本講では、身の回りの法律関係から、現代の経済社会で主要な役割を果たす企業を取り巻く法律関係などについて具体的事例を織り交ぜながら解説します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 日常生活と契約（1）</li> <li>3. 日常生活と契約（2）</li> <li>4. 日常生活とアクシデント（1）</li> <li>5. 日常生活とアクシデント（2）</li> <li>6. 雇用社会のルール（1）</li> <li>7. 雇用社会のルール（2）</li> <li>8. 家族関係（1）</li> <li>9. 家族関係（2）</li> <li>10. 企業と法（1）</li> <li>11. 企業と法（2）</li> <li>12. 企業と法（3）</li> <li>13. 消費者の保護（1）</li> <li>14. 消費者の保護（2）</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：池田真朗ほか『法の世界へ 第4版補訂』（有斐閣・2010年）。適宜参照しますので、小型の『六法』を各自持参してください。</p>		<p>期末試験の結果をベースに受講姿勢等を斟酌して判断します。</p>	

03年度以降	法律学概説Ⅱ	担当者	木藤 茂
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期の「法律学概説Ⅱ」では、春学期の「法律学概説Ⅰ」の理解を前提として、以下のような大きく2つの目的を意識しつつ、日本における法と法学について、いくつかの角度から様々な素材をもとに概観を行います。</p> <p>第1に、法学ないし法学を学ぶ意味、あるいはしばしば用いられる「論理的思考力」「法的思考力」「リーガルマインド」といった言葉の意味を実感してもらい、ということが挙げられます。このことは、法学部の学生ではないみなさんにも是非とも意識しておいてほしい事柄だからです。</p> <p>第2に、春学期では「私法」の分野の内容が主に取り上げられてきたことを前提に、秋学期では「公法」の分野におけるいくつかの重要な法制度や法的論点について基礎的な知識・理解を得ることを、内容面での課題とします。</p> <p>教職課程の方が目指す小・中学校の教員の多くは地方公務員であるという事実だけを見ても、公法の分野の様々な法律が近い将来いろいろな場面でみなさんに関係してくるということが、容易に想像できるでしょう。</p> <p>この講義を通じて、法学という学問あるいは法学部生の日々の勉強の一端を垣間見ていただければと思います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 日本における法と法学（1）</li> <li>3. 日本における法と法学（2）</li> <li>4. 日本における法と法学（3）</li> <li>5. 日本における法と法学（4）</li> <li>6. 日本における法と法学（5）</li> <li>7. 憲法（1）</li> <li>8. 憲法（2）</li> <li>9. 憲法（3）</li> <li>10. 憲法（4）</li> <li>11. 行政活動と法（1）</li> <li>12. 行政活動と法（2）</li> <li>13. 行政活動と法（3）</li> <li>14. 教育と法</li> <li>15. まとめ</li> </ol> <p>※ 講義は、基本的には、教員が作成するレジュメの流れに沿って行います。 レジュメは、「獨協大学ポータルサイト」から各自で予めダウンロード・印刷して教室に持参してもらいますが、詳細はガイダンスで説明します。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>教科書は特に指定しませんが、小型の『六法』は、適宜参照しますので、各自毎回持参してください。</p>		<p>学期末の筆記試験（100%）により評価します。</p>	

03年度以降	政治学概説Ⅰ	担当者	杉田 孝夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>政治学は古来より支配の学であった。治者と被治者が身分的に異なっていた時代にあつては、支配身分のための「よき統治」のための学問であった。しかし治者と被治者が原理的に同一であるとされるデモクラシーの時代である現代においては、市民は、共通の法に従うという意味で被治者でありつつ、共通の法をつくり遂行していくためのわれわれの代理人たる治者を選ぶ選挙人であり、政治過程を監視し、評価する政治主体である。政治に対する深い洞察力が求められるのは、政治家や行政官などの専門家だけではない、それ以上に市民こそ政治についての教養を身につける必要があると言える。そのような意味で、政治学は私たち市民の教養の学である。</p> <p>以上の観点に立って、講義を行う。</p> <p>講義を通じて日本の政治の構造と制度、国際関係と国際政治のスキーム、政策過程の基本枠組み、現代デモクラシーの構成要素を理解する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 政治とはなにか</li> <li>2. 政策の対立軸 政治と経済</li> <li>3. 自由と自由主義(1)</li> <li>4. 自由と自由主義(2)</li> <li>5. 福祉国家</li> <li>6. 国家と権力</li> <li>7. 市民社会と国家(1)</li> <li>8. 市民社会と国家(2)</li> <li>9. 国内社会と国際関係</li> <li>10. 国際関係における安全保証</li> <li>11. 国際関係における富の配分</li> <li>12. 議会</li> <li>13. 執政部</li> <li>14. 官僚制</li> <li>15. 総括</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
久米・川出・古城・田中・真淵『政治学 補訂版』有斐閣,2011.ISBN 978-4-641-05377-9 (3,570円)		出席と学期末試験による。	

03年度以降	政治学概説Ⅱ	担当者	杉田 孝夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>政治学は古来より支配の学であった。治者と被治者が身分的に異なっていた時代にあつては、支配身分のための「よき統治」のための学問であった。しかし治者と被治者が原理的に同一であるとされるデモクラシーの時代である現代においては、市民は、共通の法に従うという意味で被治者でありつつ、共通の法をつくり遂行していくためのわれわれの代理人たる治者を選ぶ選挙人であり、政治過程を監視し、評価する政治主体である。政治に対する深い洞察力が求められるのは、政治家や行政官などの専門家だけではない、それ以上に市民こそ政治についての教養を身につける必要があると言える。そのような意味で、政治学は私たち市民の教養の学である。</p> <p>以上の観点に立って、講義を行う。</p> <p>講義を通じて日本の政治の構造と制度、国際関係と国際政治のスキーム、政策過程の基本枠組み、現代デモクラシーの構成要素を理解する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中央地方関係</li> <li>2. 国際制度</li> <li>3. 政策過程</li> <li>4. 対外政策の形成</li> <li>5. 制度と政策</li> <li>6. デモクラシー (1)</li> <li>7. デモクラシー (2)</li> <li>8. 投票行動</li> <li>9. 政治の心理</li> <li>10. 世論とメディア</li> <li>11. 選挙と政治参加</li> <li>12. 利益団体と政治(1)</li> <li>13. 利益団体と政治(2)</li> <li>14. 政党</li> <li>15. 総括</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
久米・川出・古城・田中・真淵『政治学 補訂版』有斐閣,2011.ISBN 978-4-641-05377-9 (3,570円)		出席と学期末試験による。	

03年度以降	社会学概説Ⅰ	担当者	木本 玲一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、社会学という学問に対する基礎的な知識の習得と包括的な理解を深めることを目的とする。学説史もまじえながら、これまでの社会学における諸議論を紹介し、社会学という学問の発想法に対する理解を深める。そのうえで、労働、グローバリゼーション、文化、コミュニケーション、メディア等のトピックを取り上げ、それらに対する社会的な議論の方法を学ぶ。</p> <p>なお社会学には曖昧なイメージがある。しかしそれはひとつの「物の見方」だと理解すれば良い。この講義では、社会学という学問の考え方を伝えると共に、身の回りにある具体的な事象について検討していく。</p>		<p>第1回 インTRODクシヨン</p> <p>第2回 逸脱</p> <p>第3回 犯罪とリスク</p> <p>第4回 労働</p> <p>第5回 消費</p> <p>第6回 遊び</p> <p>第7回 文化</p> <p>第8回 メディア(1)</p> <p>第9回 メディア(2)</p> <p>第10回 社会調査</p> <p>第11回 ナシヨナリズム</p> <p>第12回 グローバリゼーション(1)</p> <p>第13回 グローバリゼーション(2)</p> <p>第14回 複合メディア環境</p> <p>第15回 まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
随時、指示する。		期末試験によって評価する。	

03年度以降	社会学概説Ⅱ	担当者	岡村 圭子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>社会学が成立した背景について、その概略を学び、現代社会が抱えるさまざまな問題を社会的なアプローチから考える。とくに、グローバル社会のなかで異文化・異民族が共存するとき、そこにどういった問題が生じるのか、社会学はどのようにその問題を分析するのか、といった論点をベースにしつつ、映像資料も適宜取り入れながら講義を進める。</p> <p>講義のなかでとりあげるトピックは、都市、地域社会、移民、大量消費社会、異文化、メディアである。幾人かの社会学者の研究業績を紹介しながら、これらについて受講者とともに考えてゆきたい。受講者は、本講義で学んだことを自分なりに展開し、現代のグローバル化・国際化のもとで今後の日本社会が直面する課題はなにか、自分はどういった立場でそこに関わっていくのかについて考えてほしい。</p>		<p>1. INTRODUCTION</p> <p>2. 社会学の歴史—ウェーバーとデュルケム</p> <p>3. 社会の類型</p> <p>4. 社会的性格と「自由からの逃走」—E.フロム</p> <p>5. 同調様式の3類型—D.リースマン</p> <p>6. 都市化と移民—W.I.トマスとF.W.ズナニエツキ</p> <p>7. 同心円地帯説—E.バージェス</p> <p>8. シカゴ学派と都市問題—R.パーク</p> <p>9. 予言の自己成就—R.K.マートン</p> <p>10. 誇示的消費—T.ヴェブレン</p> <p>11. 認知的不協和の理論—L.フェスティンガー</p> <p>12. 文化的再生産—P.ブルデュー</p> <p>13. コンフルエント・ラブ—A.ギデンズ</p> <p>14. 「社会問題化する」ということ</p> <p>15. まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>E.フロム『自由からの逃走』東京創元社</p> <p>D.リースマン『孤独な群集』みすず書房</p> <p>A.ギデンズ『親密性の変容』而立書房</p> <p>岡村圭子『グローバル社会の異文化論』世界思想社 ほか</p>		出席とレポート（履修者多数の場合、期末試験を行う）	

03年度以降	哲学概説Ⅰ	担当者	河口 伸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>昨今、哲学の復権が唱えられ自分探しの一環として哲学が一種の流行となっているが、それらをも包摂し相対化する視点こそが、今求められている。一般教養としての哲学的知識も教職に必要であるが、教師として以前に、一人の人間として真摯に生きるために「哲学」が持つ意義を考えてもらいたい。</p> <p>西欧思想を歴史的にもしくは主題別に辿ることが、本講義の概要であるがそこには二つの偏りが存在していることを意識しつつ論じて行きたい。</p> <p>西欧哲学としての偏りと明治以降の輸入哲学としての偏りである。哲学をギリシア起源の「学」としてのみ捉えるのではなく、幅広く「思想」として捉え、政治・社会・宗教・歴史・科学等への影響をも視野に入れて論じたい。</p> <p>個々の思想家の経歴や思想の細部の紹介は、テキストに譲り、彼らがその思想を形成した動機や課題、歴史的立場付けなどを重視して論じる。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することが望ましい。</p>		1 哲学とは何か(1) 2 ソクラテス以前 3 〃 4 ソクラテス 5 プラトン 6 〃 7 アリストテレス 8 〃 9 スコラ哲学 10 〃 11 科学革命 12 〃 13 合理論 14 〃 15 〃	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
プリント資料配布(実費300円) 文献は随時紹介する。		レポート、出席点を試験の点に加算 (出席は2/3以上必要)	

03年度以降	哲学概説Ⅱ	担当者	河口 伸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期のみを受講することは、出来るだけ避けてください。</p>		1 経験論 2 〃 3 社会契約説 4 カント 5 〃 6 ドイツ観念論 7 〃 8 キルケゴール・マルクス・ニーチェ 9 〃 10 フッサール・ハイデッガー・ヤスパース 11 〃 12 ウィトゲンシュタイン 13 構造主義 14 言語哲学 15 哲学とは何か(2)	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
プリント資料配布(実費300円) 文献は随時紹介する。		レポート、出席点を試験の点に加算 (出席は2/3以上必要)	

03年度以降	倫理学概説Ⅰ	担当者	川口 茂雄
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>西洋現代哲学においてどのような倫理学的問題がどのように取扱われ、思索されてきたかを、概説する。</p> <p>教職科目でもあるため、哲学知識の網羅的取得と同時に、社会や人生におけるベーシックでファンダメンタルな事柄の考え方を、高校生などにも理解可能なしかたで言語表現できる実践力の習得が、目標として設定される。</p> <p>この学期では現代の哲学的諸問題について扱っていく。もちろん古代～近代の哲学者たちの考察は参考にされる。現代は画像・映像といったイメージがさまざまなメディアで飛びかい、そうしたイメージによる記録／記憶が人々の心を苦しめる時代でもある。これを〈記憶〉と〈歴史〉の問題として受けとめ、考察していきたい。</p> <p>授業は教科書を中心にして進められる。教科書にまとめられている内容を要約ないし発展的にふくらませる補足説明を、毎回担当者にプレゼンしてもらう予定。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導入 (プレゼン担当者の募集・日程調整を含む)</li> <li>2. プラトンの記憶論「記憶は足跡か、絵画か？」</li> <li>3. アリストテレスの記憶論</li> <li>4. ベルクソンの記憶論「イマージュ - 思い出」</li> <li>5. サルトルの記憶論「幻覚」</li> <li>6. フッサールの記憶論「想像と記憶を区別する？」</li> <li>7. 個人的記憶と集合的記憶</li> <li>8. 〈心性史〉の歴史記述 〈長期持続〉の文化史</li> <li>9. 〈表象史〉の歴史記述 「交渉」の歴史学</li> <li>10. 王の肖像 —— イマージュの魅惑</li> <li>11. 裁判官と歴史家 —— 公正な第三者とは？</li> <li>12. ナチスのユダヤ人虐殺をめぐって (1)</li> <li>13. ナチスのユダヤ人虐殺をめぐって (2)</li> <li>14. 「困難な赦し」</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト</b>		<b>評価方法</b>	
<b>各自入手しておくこと</b> 川口茂雄『表象とアルシーヴの解釈学 —— リクルールと「記憶、歴史、忘却』』(京都大学学術出版会)		学期末試験による。 ただし各授業回で教科書内容の要約・補足プレゼンを担当してくれた学生には、 <u>試験点数に約20点を加点する</u> 予定。	

03年度以降	倫理学概説Ⅱ	担当者	川口 茂雄
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>西洋哲学においてどのような倫理学的問題がどのように取扱われ、思索されてきたかを、概説する。</p> <p>教職科目でもあるため、哲学知識の網羅的取得と同時に、社会や人生におけるベーシックでファンダメンタルな事柄の考え方を、高校生などにも理解可能なしかたで言語表現できる実践力の習得が、目標として設定される。</p> <p>哲学の学習は「言葉を選ぶ」ことのできる社会人になるための訓練の場なのだ、というようにとらえてもいい。</p> <p>哲学史の入門書をもとに授業を進行していく。</p> <p>古代ギリシアから、近世のデカルト・パスカルなどを経て、近代のニーチェまでをこの学期で広く見ていく。</p> <p>教科書はかなりコンパクトに各哲学者の思想をまとめたものだが、その圧縮された内容を発展的にふくらませる補足説明を毎回担当者にプレゼンしてもらう予定。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導入 (プレゼン担当者の募集・日程調整を含む)</li> <li>2. プラトン (1)「ソクラテスの死から」</li> <li>3. プラトン (2)「イデアという理想」</li> <li>4. アリストテレス「人間は知ることを欲する」</li> <li>5. エピクロス派、ストア派</li> <li>6. デカルト (1)「私は思考する、ゆえに私は在る」</li> <li>7. デカルト (2) 永遠真理創造説</li> <li>8. デカルト (3) 四つの暫定的道徳</li> <li>9. パスカル「きみはどちらに賭ける？」</li> <li>10. ルソー (1)「人づきあいが人間を不幸にする」</li> <li>11. ルソー (2)「理想的な教育とは」</li> <li>12. ニーチェ (1)「きみは永遠回帰に耐えられるか」</li> <li>13. ニーチェ (2)「音楽と悲劇」</li> <li>14. ニーチェ (3)「ニヒリズムに面して」</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト</b>		<b>評価方法</b>	
<b>各自入手しておくこと</b> ドミニク・フォルシェー 『西洋哲学史 パルメニデスからレヴィナスまで』 (白水社・文庫クセジュ)		学期末試験による。 ただし、各授業回で教科書内容への補足プレゼンを担当してくれた学生には、 <u>試験点数に約20点を加点する</u> 予定。	

03年度以降	宗教学概説Ⅰ	担当者	河口 伸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>戦後教育が宗教について意識的に或いは無意識的に避け続けてきた為、現代の日本人は宗教に関して一種の「真空状態」に置かれており、そこから様々な問題が昨今生じている。</p> <p>そこで本講義は、宗教学の学的体系性よりも、むしろ諸宗教の歴史と現在についての一般的概括的知識を得られるようにすることを重点とする。</p> <p>更に教職科目であることにも鑑み、宗教教育のあり方についても論じたい。</p> <p>前期は洋の東西、今昔を問わず世界史上の諸宗教の歴史と現在について説明し、宗教の果たして来た役割・問題点について考えてもらう。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 宗教とは何か (1)</li> <li>2 神話と宗教</li> <li>3 ユダヤ今日 (1)</li> <li>4 ユダヤ今日 (2)</li> <li>5 キリスト教徒 (1)</li> <li>6 キリスト教徒 (2)</li> <li>7 キリスト教徒 (3)</li> <li>8 キリスト教徒 (4)</li> <li>9 イスラム教 (1)</li> <li>10 イスラム教 (2)</li> <li>11 イスラム教 (3)</li> <li>12 イスラム教 (4)</li> <li>13 ヒンドゥ教 (1)</li> <li>14 ヒンドゥ教 (2)</li> <li>15 ヒンドゥ教 (3)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『世界が分かる宗教社会学入門』橋爪大三郎著 筑摩文庫 文献は随時紹介する		レポート、出席点を試験の点に加算 (出席は 2/3 以上必要)	

03年度以降	宗教学概説Ⅱ	担当者	河口 伸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的は春学期に同じ。春学期の続きの後に秋学期は、日本の宗教の歴史と、日本人の宗教的心性の形成にまず触れ、その後に宗教的諸概念についての理解を深め、日本や欧米の先進国において宗教集団が現在持っている意義や問題点を論じた上で、宗教教育の是非・可能性を論じる。</p> <p>秋学期のみを受講することは、出来るだけ避けてください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 仏教 (1)</li> <li>2 仏教 (2)</li> <li>3 仏教 (3)</li> <li>4 仏教 (4)</li> <li>5 儒教 (1)</li> <li>6 儒教 (2)</li> <li>7 道教</li> <li>8 日本の宗教の歴史と現在 (1)</li> <li>9 日本の宗教の歴史と現在 (2)</li> <li>10 日本の宗教の歴史と現在 (3)</li> <li>11 宗教上の諸概念 (儀礼・戒律・修行など)</li> <li>12 宗教団体の諸問題 (1)</li> <li>13 宗教団体の諸問題 (2)</li> <li>14 学校教育と宗教</li> <li>15 宗教とは何か (2)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『世界が分かる宗教社会学入門』橋爪大三郎著 筑摩文庫 文献は随時紹介する		レポート、出席点を試験の点に加算 (出席は 2/3 以上必要)	

03年度以降	心理学概説 I	担当者	田口 雅徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、まず、現代心理学の成立過程を概観する。その後、性格の形成、ストレス、生きがいと心の健康などのテーマについて、さまざまなデータを示しながら説明していく。</p> <p>本講義を通して、心理学がいかにして人の心を科学的にとらえようとしてきたかを理解してもらいたい。また、心理学の基本的知識を習得し、同時に、社会の諸問題や人間の行動を心理学的視点で捉える力を身につけてほしい。</p>		<p>以下のような計画で講義をおこなっていく予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに：科学としての心理学</li> <li>2. 心理学のあゆみ①：哲学的心理学・心理学の誕生</li> <li>3. 心理学のあゆみ②：ゲシュタルト心理学</li> <li>4. 心理学のあゆみ③：行動主義の心理学</li> <li>5. 心理学のあゆみ④：精神分析理論</li> <li>6. 性格とは？：自己の性格理解</li> <li>7. 性格をとらえる枠組み：性格理論</li> <li>8. 性格の形成：遺伝的要因と双生児研究</li> <li>9. 性格の形成：環境的要因</li> <li>10. ストレス①：ストレスと性格</li> <li>11. ストレス②：ストレス・コーピング</li> <li>12. ストレス③：ストレスの生理心理学</li> <li>13. 現代社会とストレス</li> <li>14. 現代社会とこころの病</li> <li>15. 生きがいとこころの健康</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは使用しない。		授業における小レポートと試験により総合的に評価する。	

03年度以降	心理学概説 II	担当者	田口 雅徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>受講者にさまざまな心理検査やグループ・ワークなどを実践してもらおう。これらの学習を通して、心理学の基本的知見を習得してほしい。また、心理検査の結果を分析して自己理解を深めてもらうことも本講義の目的である。心理検査やグループワークを実践した後には、結果をレポートにまとめてもらう。関連するビデオを視聴し、レポートを書いてもらうこともありうる。</p> <p><b>※履修者には授業で使用する心理検査用紙の実費(2000円程度)を負担してもらおう。履修が決定したら自動発行機で申請書を購入すること。授業時に申請書と引き換えに検査用紙を配布する。初回の授業にて履修制限や検査用紙代納入方法について説明するので欠席しないこと。</b></p>		<p>授業計画は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心理検査とは？</li> <li>2. 心理検査の種類と理論</li> <li>3. 質問紙による性格検査①</li> <li>4. 質問紙による性格検査②</li> <li>5. ストレス・コーピング</li> <li>6. 絵からみる家族像</li> <li>7. 知能検査</li> <li>8. 感情指数</li> <li>9. 職業興味</li> <li>10. グループ・ワークによる自己理解①</li> <li>11. グループ・ワークによる自己理解②</li> <li>12. グループ・ワークによる自己理解③</li> <li>13. グループ・ワークによる自己理解④</li> <li>14. グループ・ワークによる自己理解⑤</li> <li>15. 心理検査による自己理解のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各種の心理検査用紙はこちらで用意する。ただし、履修者には、これら心理検査用紙購入にかかる費用を履修登録時に負担してもらおう。		各回の授業レポートと最終のレポートにより総合的に評価する。	

13年度以降	西洋史Ⅱ	担当者	佐藤 唯行
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期の前半ではユダヤ人たちがアメリカに渡る以前のヨーロッパでの「負け犬」時代を学ぶ。特にユダヤ人差別の発生メカニズムについて解明する。</p> <p>後半では「負け犬」だったユダヤ人たちがアメリカで辿った苦難の歴史と、多数派からの抑圧をはねのけ共生の道を模索してきた姿を学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中世英国のユダヤ人金融</li> <li>2. 西洋キリスト教世界初の一国規模のユダヤ人追放が行われた原因を探る —1290年のイングランド—</li> <li>3. 隠れユダヤ教徒の足跡、1290～1656</li> <li>4. 千年王国思想とユダヤ人再入国</li> <li>5. 17～18世紀英国の外国貿易とユダヤ人</li> <li>6. 英国人地主貴族社会への同化現象</li> <li>7. 移民排斥と反ユダヤ暴動発生のメカニズム</li> <li>8. 英国ファシスト勢力との対決とナチス政権からの亡命ユダヤ人の受け入れ</li> <li>9. 現代英国のユダヤ人社会</li> <li>10. アメリカにおける反ユダヤ主義の特色</li> <li>11. 植民地時代、建国初期における反ユダヤ主義の不在</li> <li>12. 南北戦争期における反ユダヤ主義の出現</li> <li>13. 公民権闘争期のユダヤ教会堂爆破</li> <li>14. 1970年代以後の反ユダヤ主義</li> <li>15. 閉ざされた象牙の塔、高等教育におけるユダヤ人排斥</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>『アメリカのユダヤ人迫害史』佐藤唯行（2000年 集英社新書 680円）</p> <p>『英国ユダヤ人』佐藤唯行（1995年 講談社選書 1600円）</p>		<p>評価は筆記試験によって決定する。出席はとりません。試験は自筆ノート、テキストの持ち込み可。</p> <p>5択20問のQuiz形式</p>	

13年度以降	西洋史Ⅰ	担当者	佐藤 唯行
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期では世界で最も典型的な多人種・多民族社会アメリカを舞台に、そのエスニック・ヒストリーを学ぶ。</p> <p>各人種・民族集団間相互のあつれきを生み出したメカニズムを解明し、対立を回避し、相互理解と和解の道を模索する様々な努力を紹介する。</p> <p>こうしたアメリカ社会の努力は「外国人たちとの共生」の道を模索せねばならぬ我々日本人にとっても有益な示唆を与えるはずである。</p> <p>下記二冊のテキストにそってアメリカの人種関係史について学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 先住民インディアン</li> <li>2. 越境するヒスパニック</li> <li>3. 今を生きる黒人</li> <li>4. 歴史の中の黒人</li> <li>5. 等身大のユダヤ人</li> <li>6. 反ユダヤ主義とユダヤ系ギャングスター</li> <li>7. アジア系—日系・中国系・韓国系—</li> <li>8. ホワイト・エスニック—アイルランド系・イタリア系—</li> <li>9. 異人種・異教徒間カップル</li> <li>10. 大都市移民ゲットーのエスニック・コンフリクト</li> <li>11. 自動車王ヘンリー・フォードの反ユダヤ・キャンペーン</li> <li>12. 甦る儀式殺人告発、20世紀アメリカで復活した中世ヨーロッパ起源の反ユダヤ主義</li> <li>13. アメリカにおける反ユダヤ主義の特色</li> <li>14. アメリカ南部における反ユダヤ主義、レオ・フランク事件</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>『アメリカのユダヤ人迫害史』佐藤唯行（2000年 集英社新書 680円）</p> <p>『映画で学ぶエスニックアメリカ』佐藤唯行（2008年 NTT選書 1600円）</p>		<p>春学期と同じ。</p>	

13 年度以降	西洋史 I	担当者	増谷 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【講義目標】</b> 日本におけるユダヤないしユダヤ教のイメージは及びユダヤ概念は明治の時代以降から基本多岐にはヨーロッパのユダヤ像に依拠し、その影響を受けてきた。しかし日本に置けるヨーロッパ像そのものが、戦後の日本においては極めて肯定的にりかいされてきたので、戦争中のドイツのホロコーストなどが何故起こったのかという問いに客観的に答えを出すことが出来ず、ヒトラーの個人的思想や、ナチの極端な民族主義にそのげんいんを求めてしまってきた。しかしそのホロコーストは実は何世紀にも渡る長いヨーロッパの歴史そのものにその要因ないしげんいんをおっているのであって、ヒトラーの個人的思想だけにその原因を求めることには出来ない。ヨーロッパは長い歴史の中でどのようにしてホロコーストにつながるようなユダヤ像を形成し創り出してきたのか、その根源から史料に基づいて理解していくこと、そして日本のヨーロッパ理解を根底から改めてみたいというのが本講義の目標となる。</p> <p><b>【講義概要】</b> 上に述べたように、ヨーロッパの成立からキリスト教が支配してきた中世、啓蒙主義の発生してきた近世、ナショナリズムが台頭する近代そしてヨーロッパがせかいを支配し、二度に渡る世界大戦を引き起こした現代にいたる歴史を、そのユダヤ像をじくにして読み直していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 授業の意味と内容全体の説明</li> <li>2) ローマ帝国に置けるユダヤ像の転換</li> <li>3) ヨーロッパ時代の始まりの中でのユダヤ</li> <li>4) 十字軍時代における敵対的ユダヤ像</li> <li>5) ペストの流行時のユダヤ像</li> <li>6) 第4回ラテラノ公会議におけるユダヤ規定</li> <li>7) 「皇帝隷属蔵民」規定の成立と転換</li> <li>8) 「東方ユダヤ」の成立とユダヤ像の転換</li> <li>9) イベリア半島におけるユダヤ像</li> <li>10) 宗教改革期のユダヤ像</li> <li>11) 啓蒙主義におけるユダヤの理解</li> <li>12) ユダヤ啓蒙主義の現れ</li> <li>13) ヨーゼフ2世の「寛容令」の意味</li> <li>14) 前半のまとめ</li> <li>15) レポート課題の説明</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
		レポート	

13 年度以降	西洋史 II	担当者	増谷 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【講義目標】</b> 日本におけるユダヤないしユダヤ教のイメージは及びユダヤ概念は明治の時代以降から基本多岐にはヨーロッパのユダヤ像に依拠し、その影響を受けてきた。しかし日本に置けるヨーロッパ像そのものが、戦後の日本においては極めて肯定的にりかいされてきたので、戦争中のドイツのホロコーストなどが何故起こったのかという問いに客観的に答えを出すことが出来ず、ヒトラーの個人的思想や、ナチの極端な民族主義にそのげんいんを求めてしまってきた。しかしそのホロコーストは実は何世紀にも渡る長いヨーロッパの歴史そのものにその要因ないしげんいんをおっているのであって、ヒトラーの個人的思想だけにその原因を求めることには出来ない。ヨーロッパは長い歴史の中でどのようにしてホロコーストにつながるようなユダヤ像を形成し創り出してきたのか、その根源から史料に基づいて理解していくこと、そして日本のヨーロッパ理解を根底から改めてみたいというのが本講義の目標となる。</p> <p><b>【講義概要】</b> 上に述べたように、ヨーロッパの成立からキリスト教が支配してきた中世、啓蒙主義の発生してきた近世、ナショナリズムが台頭する近代そしてヨーロッパがせかいを支配し、二度に渡る世界大戦を引き起こした現代にいたる歴史を、そのユダヤ像をじくにして読み直していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 春学期のまとめ</li> <li>2) フランス革命期前のユダヤ像</li> <li>3) 人権宣言とユダヤの位置</li> <li>4) ナポレオンのユダヤ像</li> <li>5) プロイセン改革の中でのユダヤ議論</li> <li>6) ウィーン会議のユダヤ議論</li> <li>7) 一九世紀前半の民族運動とユダヤ</li> <li>8) 1848年革命とユダヤの自己意識</li> <li>9) ユダヤのいわゆる「法的解放」の意味</li> <li>10) 「近代社会」の中でのユダヤ</li> <li>11) 人種主義の発展と反セム主義</li> <li>12) 反セム主義とシオニズム</li> <li>13) 社会主義運動とユダヤ</li> <li>14) 第一次世界大戦とナチ党の成立</li> <li>15) まとめ「ホロコーストとヨーロッパ」</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
		レポート	

13年度以降	東洋史 I	担当者	熊谷 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(講義の目的) 西アジアの歴史について講述する。イスラーム世界の歴史を知ることにより、人々が何を規範とし、何に価値を置き、何を理想として求めてきたかを考えてみたい。</p> <p>(講義概要) 7世紀における預言者ムハンマドの出現から16世紀にいたる歴史を概観し、広大なイスラーム世界が形成されるまでを理解する。宗教、社会、文化についての基本的な知識も学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 イスラームの基本を説明する。</li> <li>2 イスラーム誕生以前の西アジア世界について。</li> <li>3 預言者ムハンマド（マホメット）の出現と時代背景。</li> <li>4 最初の4人のカリフ（正統カリフ）の時代について。</li> <li>5 ウマイヤ朝の歴史。ヴェルハウゼンの古典理論における「アラブ帝国」の意味。</li> <li>6 アッバース朝の歴史。「アラブ帝国」から「イスラーム帝国」への移行の意味。</li> <li>7 聖典コーラン。預言者の言行録ハディースと解釈。</li> <li>8 アッバース朝時代から発達したアラビア科学と、中世におけるイスラーム神秘主義。</li> <li>9 アッバース朝の弱体化に伴い、各地に出現した軍事政権とその展開について。</li> <li>10 マムルーク朝について。とくにイクター制が西欧の封建制と比較される点。</li> <li>11 同その2</li> <li>12 ヨーロッパ世界とイスラーム世界との関係。レコンキスタ、十字軍、大航海時代など。</li> <li>13 同その2</li> <li>14 イスラーム教徒の生活と社会</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
とくにさだめない。授業で指示する。		毎回出席をとる。期末にレポート。レポートの表紙は授業で配布する。	

13年度以降	東洋史 II	担当者	熊谷 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(講義の目的) イスラームは今日の国際情勢を読むための主要なキーワードであるが、その鍵を解くためにも、彼らの歴史を理解することはとても大切である。皆さんの視野が広がることを目標とする。</p> <p>(講義概要) 後期はイスラーム世界の近代化の歴史を地域別・テーマ別に考察する。今日イスラームがかかわるさまざまな国際関係についても、理解が深められるようにしたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オスマン朝の成立と発展について。「完成されたイスラーム国家」の定義も検討する。</li> <li>2 欧米列強による帝国主義とイスラーム世界とのさまざまな関係について概説する。</li> <li>3 西洋の衝撃によってイスラーム世界の内部にあらわれた改革運動の起こりとその内容。</li> <li>4 さまざまなイスラーム改革運動、ネオ・スーフィズムなどの問題について考える。</li> <li>5 エジプトの近代化とその過程について。考える。</li> <li>6 トルコの近代化とその過程について。トルコナショナリズムとパン・イスラミズムの理解。</li> <li>7 近代化がイスラーム世界の人々の生活と信仰におよぼした影響とゆくえについて考察する。</li> <li>8 知識人階層であるウラマー、宗教的寄進であるワクフなど、イスラーム社会について検討。</li> <li>9 近・現代のアラブ世界の文化について考える。</li> <li>10 今世紀のイスラーム世界について考える。</li> <li>11 現在のアラブ諸国のかかえる問題、東西冷戦終結後における欧米諸国との関係を考える。</li> <li>12 同その2</li> <li>13 旧ソ連におけるイスラーム。</li> <li>14 イスラーム主義の主張と展開</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
とくにさだめない。授業で指示する。		毎回出席をとる。期末にレポート。レポートの表紙は授業で配布する。	

13年度以降	地理学Ⅰ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたるが、本講義では、人間の居住環境が人間にとってどのような意義をもっているのかという視点から、世界の地理を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。まず、地理学における主要な概念や方法を説明する。その上で、人間の活動の舞台である自然環境について学習する。自然環境にもとづいて地域区分を行い、地域ごとに自然的基盤とそこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。まとめとして、世界の環境問題について、具体的な問題をとりあげ、地球的視点から検討する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 自然と人間とのかかわり</li> <li>3 環境の諸要素（１） 地球の特質</li> <li>4 環境の諸要素（２） 地形環境</li> <li>5 環境の諸要素（３） 気候環境</li> <li>6 環境の諸要素（４） 植生と土壌 生態地域</li> <li>7 熱帯地域（１）—自然的特質と伝統的農業</li> <li>8 熱帯地域（２）—アジアの稲作</li> <li>9 熱帯地域（３）—熱帯の開発と問題（１）</li> <li>10 熱帯地域（４）—熱帯の開発と問題（２）</li> <li>11 砂漠地域（１）—自然的特質と伝統的生業</li> <li>12 砂漠地域（２）—イスラムの世界</li> <li>13 砂漠地域（３）—石油資源と近代化</li> <li>14 砂漠地域（４）—アラブとイスラエル</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
山本正三（他）著『自然環境と文化』原書房 参考文献は授業中に示す		定期試験および出席状況	

13年度以降	地理学Ⅱ	担当者	秋本 弘章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたるが、本講義では、人間の居住環境が人間にとってどのような意義をもっているのかという視点から、世界の地理を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。まず、地理学における主要な概念や方法を説明する。その上で、人間の活動の舞台である自然環境について学習する。自然環境にもとづいて地域区分を行い、地域ごとに自然的基盤とそこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。まとめとして、世界の環境問題について、具体的な問題をとりあげ、地球的視点から検討する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 温帯地域（１） 自然的特質</li> <li>2 温帯地域（２） 地中海森林地域</li> <li>3 温帯地域（３） 温帯混交林地帯（ヨーロッパ）</li> <li>4 温帯地域（４） 温帯混交林地帯（アジア）</li> <li>5 温帯地域（５） 北米の温帯地域（１）</li> <li>6 温帯地域（６） 北米の温帯地域（２）</li> <li>7 温帯地域（７） そのほかの温帯地域</li> <li>8 冷帯地域</li> <li>9 寒帯地域</li> <li>10 山地地域</li> <li>11 世界の環境問題（１） 人口</li> <li>12 世界の環境問題（２） 食料</li> <li>13 世界の環境問題（３） 酸性雨と公害問題</li> <li>14 世界の環境問題（４） 地球の温暖化</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
山本正三（他）著『自然環境と文化』原書房 参考文献は授業中に示す		定期試験および出席状況	

13年度以降	地理学Ⅰ	担当者	北崎 幸之助
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたる。本講義では、居住環境が人間にとって、どのような意義をもっているのかという視点から、世界の諸地域を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。まず、環境の諸要素を概観し、熱帯地域、沙漠地域、地中海森林地域を取り上げ、人間の活動の舞台である自然環境と、そこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。なお、履修に際しては、地球環境問題に対して高い関心のある、意欲的な学生を希望する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション—地理学とは</li> <li>2. 環境の諸要素（1）気候環境</li> <li>3. 環境の諸要素（2）緯度帯別降水量・蒸発量・気温</li> <li>4. 環境の諸要素（3）地形・植生</li> <li>5. 熱帯地域（1）熱帯林と伝統的生活様式</li> <li>6. 熱帯地域（2）熱帯林の開発と環境問題</li> <li>7. 熱帯地域（3）熱帯林の保全</li> <li>8. 沙漠地域（1）自然的・文化的特色と伝統的経済活動</li> <li>9. 沙漠地域（2）石油資源と近代化、沙漠の開発</li> <li>10. 地中海森林地域の特性</li> <li>11. 地中海地域の生活様式—西欧文化の原点</li> <li>12. 地球環境問題に対する視点（1）</li> <li>13. 地球環境問題に対する視点（2）</li> <li>14. まとめ（1）</li> <li>15. まとめ（2）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
山本正三他著（2004）『自然環境と文化—世界の地理的展望 改訂版』原書房		期末定期試験の結果（90％）に、出席状況（10％）等を加味して、総合的に評価する。	

13年度以降	地理学Ⅱ	担当者	北崎 幸之助
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地理学の扱う内容は多岐にわたる。本講義では、居住環境が人間にとって、どのような意義をもっているのかという視点から、世界の諸地域を概観し、地理的な知識と地理的見方・考え方を身につけることを目的とする。秋学期の講義は、まず地形環境を概観し、温帯草原地域、温帯混合林地域、亜寒帯森林地域、山地地域を取り上げ、人間の活動の舞台である自然環境と、そこで繰り広げられている人々の生活様式を説明する。そして最後に、深刻化する地球環境問題を取り上げ、今後の人間生活と自然環境との共生方法について理解を深める。なお、履修に際しては、地球環境問題に対して高い関心のある、意欲的な学生を希望する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 環境の諸要素—地形環境</li> <li>2. 温帯草原地域の自然特性</li> <li>3. 温帯草原地域の開発と環境問題</li> <li>4. 温帯混合林地域（1）高密度都市化地域の特性</li> <li>5. 温帯混合林地域（2）産業革命と都市域の拡大</li> <li>6. 亜寒帯森林地域（1）タイガの中の生活</li> <li>7. 亜寒帯森林地域（2）タイガの開発と保全</li> <li>8. 山地地域（1）山地の自然環境と高度帯の利用</li> <li>9. 山地地域（2）山地資源の開発と観光化</li> <li>10. 地球環境問題（1）生態系と人間活動</li> <li>11. 地球環境問題（2）自然環境の破壊</li> <li>12. 地球環境問題（3）環境問題解決にむけた取り組み</li> <li>13. 地球環境問題（4）私たちにできること</li> <li>14. まとめ（1）</li> <li>15. まとめ（2）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
山本正三他著（2004）『自然環境と文化—世界の地理的展望 改訂版』原書房		期末定期試験の結果（90％）に、出席状況（10％）等を加味して、総合的に評価する。	

13年度以降	地誌学Ⅰ	担当者	飯嶋 曜子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、統合が進展するヨーロッパにおける各地域の現状を把握することを目的とする。まず、ヨーロッパ地誌やEUの制度や歴史に関する基礎的な知識を習得する。そのうえで、特にEUの共通農業政策と、地域政策（構造政策）に焦点を当て、統合がヨーロッパの地域に与える影響や、EUと各地域との関係について考察していく。</p> <p><b>*注意</b> 本講義は、ドイツ語学科の専門講義科目と、全学共通カリキュラムの全学総合科目との合併科目です。そのため、ドイツ語による資料を利用する場合があります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ヨーロッパとは何か</li> <li>2. EU と地域</li> <li>3. EU の制度</li> <li>4. EU の機能</li> <li>5. EUの政策</li> <li>6. EUの形成・発展過程(1)</li> <li>7. EU の形成・発展過程(2)</li> <li>8. EU の形成・発展過程(3)</li> <li>9. EU の東方拡大(1)</li> <li>10. EU の東方拡大(2)</li> <li>11. EU の農業政策(1)</li> <li>12. EU の農業政策(2)</li> <li>13. EU の構造政策(1)</li> <li>14. EU の構造政策(2)</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>地図帳を毎回持参すること テキストは指定しない</p>		レポートもしくは試験により評価	

13年度以降	地誌学Ⅱ	担当者	飯嶋 曜子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、ドイツの地域や都市の構造とその変容を把握することを目的とする。特に、ドイツ再統一、ヨーロッパ統合の深化と拡大、地方分権型国家、という三つの側面に光を当てて具体的な事例をもとに明らかにしていく。</p> <p><b>*注意</b> 本講義は、ドイツ語学科の専門講義科目と、全学共通カリキュラムの全学総合科目との合併科目です。そのため、ドイツ語による資料を利用する場合があります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導入：ドイツの地域・都市</li> <li>2. ドイツ再統一（1）：ベルリンの地政学</li> <li>3. ドイツ再統一（2）：社会主義的都市の構造</li> <li>4. ドイツ再統一（3）：東ドイツの地方都市</li> <li>5. ドイツ再統一（4）：冷戦後の旧東ドイツ都市</li> <li>6. ドイツ再統一（5）：プレントラウアー・ベルク</li> <li>7. ドイツ再統一（6）：ポツダム広場</li> <li>8. ヨーロッパ統合（1）：EUとドイツ</li> <li>9. ヨーロッパ統合（2）：統合と地域間格差</li> <li>10. ヨーロッパ統合（3）：EUの構造政策、都市政策</li> <li>11. ヨーロッパ統合（4）：ユーロリージョン</li> <li>12. 地方分権（1）：多極分散型国家</li> <li>13. 地方分権（2）：空間整備政策</li> <li>14. 地方分権（3）：都市計画</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>地図帳を毎回持参すること テキストは指定しない</p>		レポートもしくは試験により評価	

13年度以降	国際法 I	担当者	一之瀬 高博
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>〔講義目的〕 国際法の基礎的知識を学ぶとともに、国際社会において法がどのように機能しているかを考察する。</p> <p>〔講義概要〕 国際社会における法の規律のしかたとその特徴を、国際法上の主たる行為主体である国家を中心とした観点から学ぶ。具体的には、国際法規範の構造、国際法主体としての国家、国家責任、外交関係法、海洋法などをとりあげる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 国際法の形成と発展</li> <li>3 国際法の存在形態</li> <li>4 条約のしくみ</li> <li>5 慣習法およびその他の規範</li> <li>6 国際法における国家</li> <li>7 国家承認と政府承認</li> <li>8 国家責任の成立要件</li> <li>9 国家責任の追及</li> <li>10 外交関係法</li> <li>11 外交特権免除</li> <li>12 国家領域としての海洋</li> <li>13 沿岸国の海洋管轄権の拡大</li> <li>14 国際公域としての海洋</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト： 横田洋三編『国際社会と法』有斐閣 2010年</p>		<p>期末試験の成績を重視し、出席・小テスト・レポートも評価の対象にする。</p>	

13年度以降	国際法 II	担当者	一之瀬 高博
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>〔講義目的〕 国際法の基礎的知識を学ぶとともに、国際社会において法がどのように機能しているかを考察する。</p> <p>〔講義概要〕 国際法が、国際社会のさまざまな分野にどのようなかたちで発展しつつあるのかを概観するとともに、そこに生じる紛争が、集団安全保障や裁判を通じてどのように解決が図られているかについて考察する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 国連の集団安全保障</li> <li>3 平和的紛争解決と仲裁裁判</li> <li>4 国際司法裁判所</li> <li>5 国際機構・国際連合</li> <li>6 国際機構の構造</li> <li>7 国籍・外国人</li> <li>8 難民・国際犯罪</li> <li>9 国連による人権保障</li> <li>10 人権条約</li> <li>11 経済活動と国際法</li> <li>12 WTO 体制</li> <li>13 国際環境保全の諸原則と条約</li> <li>14 国際法の将来</li> <li>15 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト： 横田洋三編『国際社会と法』有斐閣 2010年</p>		<p>期末試験の成績を重視し、出席・小テスト・レポートも評価の対象にする。</p>	

13年度以降	日本国憲法	担当者	加藤 一彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>&lt;講義目標&gt;</b> 憲法の入門講義を行う。「教師」にとって不可欠な人権センスを磨くため、講義の多くを人権に関する判例分析にあてる。 問題意識を持って講義に参加されたい。</p> <p><b>&lt;講義概要&gt;</b> 憲法概念からはじめ、憲法26条までを講義範囲とする。人権侵犯事件（憲法の判例）をもとに、日本の人権状況を勉強する。 最初の講義で「予定表」を配布する。</p> <p><b>&lt;受講生への要望&gt;</b> 『六法』は、必ず毎回もってくること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 六法の使い方／憲法概念</li> <li>3. 人権総論</li> <li>4. 憲法制定略史</li> <li>5. 法の下での平等</li> <li>6. 精神的自由権／信教の自由</li> <li>7. 精神的自由権／政教分離</li> <li>8. 精神的自由権／学問の自由</li> <li>9. 精神的自由権／表現の自由（1）</li> <li>10. 精神的自由権／表現の自由（2）</li> <li>11. 人身の自由</li> <li>12. 社会権／生存権（1）</li> <li>13. 社会権／生存権（2）</li> <li>14. 社会権／教育権</li> <li>15. 復習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
加藤一彦『教職教養憲法15話 [改訂版]』（北樹出版） 柏崎・加藤編著『新憲法判例特選』（敬文堂） 学生用六法（出版社は問わない）		定期試験による。	

13年度以降	日本国憲法	担当者	加藤 一彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

13年度以降	日本国憲法	担当者	古関 彰一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期で日本国憲法全般を講義することになります。従って、日本国憲法の人権と統治機構全般に及びますが、15回という制約がありますので、人権と統治機構の主要な論点を講義することになります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 開講にあたって（近代憲法とはなにか）</li> <li>2 基本的人権の歴史</li> <li>3 明治憲法の構造</li> <li>4 平和主義と憲法9条</li> <li>5 日米安保条約の構造</li> <li>6 基本的人権適用と公共の福祉</li> <li>7 選挙権の法的性格と選挙定数</li> <li>8 平等権の概念</li> <li>9 選挙定数と裁判例</li> <li>10 表現の自由の意義</li> <li>11 表現の自由と名誉・プライバシー</li> <li>12 環境権の法的性格と判例</li> <li>13 国会の地位と権能</li> <li>14 司法権の意味、範囲、限界</li> <li>15 春学期のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>芦部信喜著・高橋和之補訂『憲法・第五版』（岩波書店、2007年）、高橋・長谷部・石川編『憲法判例百選』（有斐閣、2007年）</p>		<p>春学期の最後の試験期間中に論述試験を行い、それにより評価する。</p>	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

13年度以降	英語通訳	担当者	中島 直美
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、通訳者になりたいと考えている、もしくは、通訳という行為に関心がある人に、仕事の現状と訓練方法を伝えることを目的としています。</p> <p>通訳者の実際の仕事内容を紹介するとともに、通訳に何が求められているかを考えながら、市場の現状やキャリアパスなどを探っていきます。通訳者の方などをお招きし、現場の話聞く機会もあります。また、どんな勉強をすれば通訳の力がつくのかというヒントも提供します。</p> <p>参加者の英語のレベルが様々で人数も多いため、集中的な訓練はできませんが、基本的な訓練方法を紹介し、授業内での演習を行います。なお、演習については主に日本語で行います。</p> <p>初回の授業で詳しい説明をしますので、必ず出席してください。</p> <p>*ゲストスピーカーの都合により、授業の内容は前後する可能性があります。</p>		<p>01 通訳・通訳者とは？</p> <p>02 通訳者のキャリアパス</p> <p>03 通訳者に求められるスキルとは？</p> <p>04 語彙力増強方法</p> <p>05 通訳訓練方法 (1)・シャドウイング</p> <p>06 通訳訓練方法 (2)・リプロダクション</p> <p>07 通訳訓練方法 (3)・サイトトランスレーション</p> <p>08 通訳訓練方法 (4)・クイックレスポンスなど</p> <p>09 ゲストスピーカー</p> <p>10 通訳の実践 (1) - 逐次通訳</p> <p>11 通訳の実践 (2) - ウィスパリング通訳</p> <p>12 通訳の実践 (3) - 同時通訳</p> <p>13 インターネットの活用方法</p> <p>14 まとめ</p> <p>15 確認テスト</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
随時プリントなどを配布する。		授業中に実施する確認テストによって評価する。 なお出席は前提条件であり、遅刻2回を1欠席と見なし、欠席4回以上は評価の対象外とする。	

13年度以降	英語通訳	担当者	中島 直美
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

13年度以降	コンピュータ入門 a	担当者	各担当教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、大学でのレポート作成や、ゼミでのプレゼンテーションにおいて必要となる、情報検索、ワードプロセッサ、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの実際的な利用方法を、実習を通して身につけることと、コンピュータの基本的な知識を身につけることを目的とする。</p> <p>コンピュータの単なるスキルではなく、社会に出てから必要となるコンピュータおよびネットワークの基礎的な知識および技能を身につけることが目的である。</p> <p>また、データベースとよばれる、大規模なデータ管理の際に使用されるデータの作成についても取り扱う。</p> <p>レポート提出は、ポータルサイトを利用する。</p> <p>なお、各テーマが取り扱われる順序や、時間配分については、担当教員によって異なることがある。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義概要</li> <li>2. 情報収集方法と実際</li> <li>3. コンピュータの基礎とアプリケーション</li> <li>4. インターネットの基礎と利用</li> <li>5. ワードプロセッサの有効利用</li> <li>6. ワードプロセッサでレポートを書く</li> <li>7. 表計算ソフトの有効利用</li> <li>8. 表計算ソフトの関数を活用する</li> <li>9. 表計算ソフトでデータを分析する</li> <li>10. プレゼンテーションソフトの有効利用</li> <li>11. プレゼンテーションソフトで調査内容発表</li> <li>12. データベースの作成</li> <li>13. データベース処理</li> <li>14. 外部データベースの利用</li> <li>15. ソフトの統合と課題</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキスト：立田ルミ他『大学に必要な情報基礎』日経B P社 森夏節、立田ルミ他『日経パソコン Edu で学ぶ』、日経B P社		出席-20%、レポート-40%、試験-40%。	

13年度以降	コンピュータ入門 b	担当者	各担当教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>コンピュータを用いて作業を行う際には、ワープロや表計算のような市販のアプリケーションを使用するだけではなく、コンピュータプログラムを作成し、既存のソフトを使うだけでは出来ないことを行うことができる。</p> <p>コンピュータプログラムを作成する際には、プログラム言語の文法を覚えることに加えて、どのような手順（アルゴリズム）でコンピュータにより問題を解くのかを考え、それをプログラムとして表現することが重要である。</p> <p>この講義では、JavaScript、Java、C 言語、Visual Basic といったコンピュータ言語のひとつを使用して、プログラム作成の基礎を学ぶ。使用する言語は、担当教員ごとに異なるが、各種言語を用いたプログラム法を学び、基礎的な問題解決の手順をプログラムで表現できるようになることを目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の進め方について</li> <li>2. 使用言語の特徴とプログラムの作成方法</li> <li>3. 簡単な処理</li> <li>4. 場合分け(1)</li> <li>5. 場合分け(2)</li> <li>6. 繰り返す(1)</li> <li>7. 繰り返す(2)</li> <li>8. ファイルの処理</li> <li>9. 簡単なアルゴリズム</li> <li>10. 関数を用いるアルゴリズム</li> <li>11. 複数の関数の利用</li> <li>12. インタラクティブなプログラム</li> <li>13. 画像の処理</li> <li>14. 画像の入れ替え</li> <li>15. アニメーション作成</li> </ol> <p>担当教員が指定した問題を、数回の講義に分けて作成する。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各担当教員指定の教科書または印刷物		出席-20%、レポート-40%、試験-40%。	

13年度以降	社会経済史 a	担当者	新井 孝重
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>◎中世の人々の暮らしの中に、宗教が色濃く影を落とした時代であったといわれている。この講座では、平安末期の源平争乱で焼け落ちた東大寺と、これを再建した勸進聖重源の活動を観ることによって、中世社会に果たした仏教の役割を考えたい。</p> <p>(1) 東大寺を再建した男 (2) 重源の時代 (3) 信仰と経済</p>		<p>① 炎上する東大寺 ② 誰の力に頼るか ③ 重源の業績 ④ 木材をどこから運ぶか ⑤ 出現した大群衆 ⑥ 雨を突いて伊勢へ ⑦ 重源の記憶 ⑧ 法然と重源 ⑨ 合戦の中の黒田荘（くろだのしょう） ⑩ 天変地妖（てんぺんちよう）と飢餓・疫癘（えきらい） ⑪ 源平合戦の余燼 ⑫ 聖の社会事業 ⑬ 新しい経済社会の出現 ⑭ 後生の約束 ⑮ 「荘園」外の経済</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
新井孝重『黒田悪党たちの中世史』（NHK ブックス） （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと）		試験成績による	

13年度以降	社会経済史 b	担当者	新井 孝重
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>◎ 中世は一揆の時代であるとも言われている。本講座では伊賀国の黒田荘に展開した中世後期の村の自治生活を、敵対する戦国大名の動きとの関係で観察する。地域自治とは何か、という問題を通じて民主主義の基礎を歴史的に考えたい。</p> <p>(1) 戦乱の中の伊賀 (2) 自立する村 (3) 戦国のコンミュン</p>		<p>① 伊賀国の南北朝内乱 ② 錯綜する地侍の行動 ③ 大規模な合戦は続けられない ④ 国人領主の出現 ⑤ 自立する村 ⑥ 南都への志向 ⑦ 悪党たち、起請文を提出 ⑧ タテの力とヨコの力 ⑨ 惣国のコンミュン ⑩ 内部の規律と「平和」 ⑪ 織田信長軍、伊賀へ侵攻 ⑫ 崩れ去る惣国・中世の黄昏 ⑬ 兵農分離と石高制 ⑭ 中世民衆の共同体をどうみるか ⑮ 荘園史のまとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
新井孝重『黒田悪党たちの中世史』（NHK ブックス） （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと）		試験成績による	

13年度以降	社会思想史 a	担当者	市川 達人
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現代を生きる私たちの政治や経済に関する見方・考え方を支配している近代的社會観の形成を、西欧を舞台に歴史的にたどる。講義は通年で完結する形をとる。前期では、最近リアリティを失ってきたかみえる「社会」という観念を改めて分析してみることから始め、その「社会」を学問的に対象化する動きがはじまったルネッサンスから宗教改革の時期を取り上げる。キリスト教的な世界観との対抗あるいはその変革のなかで、新しい価値観や生き方が模索され形成される時代である。</p> <p>後期の講義へとつながる問題意識として、「国家というまとまり」と「市場というまとまり」への二重の視点が生まれてくる過程に目を向けたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 授業の狙いについて</li> <li>2) 「社会」という思想問題</li> <li>3) 「市民社会」の原型と近代的再生</li> <li>4) ルネッサンス思想と古典古代文化</li> <li>5) マキャベリと『君主論』</li> <li>6) マキャベリと近代政治理論</li> <li>7) ユートピアという思想</li> <li>8) トマス・モアと『ユートピア』</li> <li>9) 中世の教会改革運動、千年王国説、後期スコラ学派</li> <li>10) ルターの改革運動と神学</li> <li>11) ルターの政治思想</li> <li>12) ルターの職業思想</li> <li>13) カルヴィニズムの宗教思想</li> <li>14) カルヴィニズムと近代的エートス</li> <li>15) まとめー主権国家と市場社会</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト 『社会思想の歴史』 渋谷一郎 八千代出版 参考書 講義で指示</p>		<p>期末の試験による。</p>	

13年度以降	社会思想史 b	担当者	市川 達人
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>西欧では 17 世紀から近代市民社会の見取り図を描く作業がはじまる。伝統的な自然法思想を手がかりに、個人が自分の自然権を守るため、契約という作為を通して国家を作るという社会契約思想が生みだされる。これと並んで、社会を担う「国民」が経済的主体として自覚され、国家と区別される市民社会という観念が生まれてくる。このあたりの展開をホッブズから初めて 19 世紀のマルクスまでたどってみる。ここでも「国家というまとまり」と「市場というまとまり」が隠れた主題となる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 授業の狙いについて</li> <li>2) 西欧自然法思想の源泉</li> <li>3) 自然法思想の近代的転回</li> <li>4) 社会をめぐる自然と作為(1)……ホッブズの利己心</li> <li>5) 社会をめぐる自然と作為(2)……ホッブズの国家観</li> <li>6) 個人を守ること(1)……ロックの所有的個人主義</li> <li>7) 個人を守ること(2)……ロックの政治的自由主義</li> <li>8) 文明化という課題……フランス啓蒙思想（ヴォルテール、ディドロ）</li> <li>9) 風土と社会……モンテスキューの権力論</li> <li>10) 個人と社会の一体化(1)……ルソーの歴史認識</li> <li>11) 個人と社会の一体化(2)……ルソーのデモクラシー</li> <li>12) 社会は自然に発生する(1)……ヒュームの道徳感情論と自然法批判</li> <li>13) 社会は自然に発生する(2)……スミスの市場的社會思想</li> <li>14) 社会的に生きる(1)……社会主義の思想</li> <li>15) 社会的に生きる(2)……マルクスの思想</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト 『社会思想の歴史』 渋谷一郎 八千代出版 参考書 講義で指示</p>		<p>期末の試験による。</p>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

11年度以前 12年度以降	生涯学習概論 生涯学習概論	担当者	阪本 陽子
講義目的、講義概要		講義目的、講義概要	
<p>私たちはその成長・発達に応じて、人間として学ぶべき課題を持っています。また、少子高齢化、都市化、国際化など、社会の様々な変化に対応した学習が絶えず求められています。生涯学習は、私たちの教育や学習に対する考え方を大きく転換させ、現代社会のなかで重要な意味を持っています。</p> <p>本講義では、生涯学習に関する基本的な考え方を学ぶとともに、生涯学習社会における学校教育、社会教育、家庭教育の在り方や、現代社会と生涯学習の関わりについて考えます。</p> <p>受講者数にもよりますが、講義形式だけでなく、受講生からの発言やさまざまな学習方法を体験する演習を取り込みながら進めていきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 人間の発達と学習</li> <li>3. 社会の変化と学習</li> <li>4. 生涯学習の理念とその背景</li> <li>5. 生涯学習の学習論</li> <li>6. 生涯学習と学校教育</li> <li>7. 生涯学習と社会教育</li> <li>8. 生涯学習と家庭教育</li> <li>9. 学習形態・技法と学習支援者の役割</li> <li>10. さまざまな学習方法を体験する①（演習）</li> <li>11. さまざまな学習方法を体験する②（演習）</li> <li>12. さまざまな学習方法を体験する③（演習）</li> <li>13. 生涯学習施設の機能と役割</li> <li>14. 生涯学習を支援する行政の現状と課題</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>テキストはありません。レジュメ等、資料を配布して授業を進めます。ガイダンスで参考文献を紹介する他、授業中に参考文献を紹介します。</p>		<p>出席（7割以上）、講義中の課題、学期末のレポートなどを総合的に評価します。</p>	

11年度以前 12年度以降	図書館概論 図書館概論	担当者	井上 靖代
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(目標) 図書館全体にわたっての基本的知識を理解していること。 また、図書館の現状を把握し、課題について自分の意見や考えを述べるができること。</p> <p>(講義概要) 図書館の機能と役割の基本について学習する。図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1). はじめに。図書館の現状と動向について。</li> <li>(2). 図書館の構成要素と機能。図書館の社会的意義。</li> <li>(3). 図書館の法的基盤と図書館政策。</li> <li>(4). 知的自由と図書館。</li> <li>(5). 「図書館の自由に関する宣言」と「図書館員の倫理綱領」。</li> <li>(6). 図書館の歴史。</li> <li>(7). 公共図書館の成立と展開、現状と課題。公共公立図書館と公共私立図書館。</li> <li>(8). 地域社会と公共図書館の役割。利用者のニーズ。</li> <li>(9). 学校図書館の現状と公共図書館との連携。</li> <li>(10). 大学図書館の現状と課題。</li> <li>(11). 専門図書館や国会図書館の現状と課題。</li> <li>(12). 図書館員の役割と資質、資格。現状と課題。</li> <li>(13). 図書館の類縁機関と現状と課題。</li> <li>(14). 国際社会での図書館活動。</li> <li>(15). 図書館の課題と展望。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
塩見昇編『図書館概論』(JLA 図書館情報学テキストシリーズ III-1) 日本図書館協会発行、2012年12月		出席(授業参加)(15%)、課題(30%)、期末試験(55%)で評価する。	

11年度以前 12年度以降	図書館経営論 図書館制度・経営論	担当者	井上 靖代
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(目標・ねらい) 図書館制度や法政策について学習し、そのうえで、資料管理、人事管理、施設管理を実施するための現状と課題を考え、さらに図書館活動サービス計画の企画・運営、予算決算、調査と評価などを学ぶ。実際の事例を研究することで、実務的な課題解決管理判断力を養成する。</p> <p>(講義概要) 資料管理運営から財政管理や人事管理、スタッフ教育、さらに自己継続教育といった内容について把握し、実施のための戦略的計画や積極的な図書館活動のためのプロモーション、資金獲得のための政治的手腕などを、企業の経営管理運営理論を参考にして、実際の公共図書館の例をケース・スタディ(事例研究)として議論しながら、現状の把握と問題点、さらにどのような戦略的活動が求められているのかを学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 情報社会と図書館の情報戦略。</li> <li>(2) 企業や公的セクターの経営理論。</li> <li>(3) 図書館法を始めとする図書館関連法群と政策、それにとりまなう図書館経営の実態</li> <li>(4) 地方自治体の図書館関連条例と図書館政策。</li> <li>(5) 事業計画策定と評価。</li> <li>(6) 事例研究①図書館サービス活動にとりまなう事例。</li> <li>(7) 事例研究による議論と発表。</li> <li>(8) 財政と図書館経営・PFI や委託の問題、予算の獲得など</li> <li>(9) 人事管理－専門職の役割と委託などの問題 － 図書館組織と運営。</li> <li>(10) 事例研究②人事管理にとりまなう事例。</li> <li>(11) 事例研究による議論と発表。</li> <li>(12) 図書館の施設と設備。場所としての図書館運営。</li> <li>(13) 事例研究③図書館サービス業務の数的・質的調査と評価。</li> <li>(14) 事例研究④危機管理に関する事例。</li> <li>(15) 事例研究による議論と発表。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しないが、授業で資料を配布する。		出席(授業参加及びチームワーク)(60%)、課題(20%)、テスト(20%)で評価する。事例研究のためチームワークに最重点をおく。	

11年度以前 12年度以降	図書館サービス論 図書館サービス概論	担当者	井上 靖代
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(目的・目標・ねらい) 図書館サービス活動の現状と課題を認識し、その活動の意義と目的、社会との関連を理解し、発展的サービス活動について考察、企画、評価できること。</p> <p>(講義概要) 公共公立図書館を中心として、その図書館活動の実務を理解し、情報資料・人的資源の効率よい図書館活動とは何か、図書館活動に関わる組織・管理・運営、各種計画などについて理解する。また、その活動評価についても考えていく。特に、利用者と直接関わる図書館サービスの意義、特質、方法について解説するとともに課題解決支援、障害者支援、高齢者・未成年者向け支援、多文化サービスなど各種サービスの特質を明らかにする。利用者への直接支援活動として、担当者の接遇や利用者やボランティアとのコミュニケーション等の基本について学習する。</p>		<p>(1) 図書館サービスの意義と考え方、変遷など (2) 来館者へのサービスー貸出、利用援助などー (3) 資料提供の基礎ー場所としての図書館ー (4) 資料提供の展開ー貸出、予約などー (5) 資料提供の展開ープロモーション活動ー (6) 情報提供ー利用者のニーズへの対応、レファレンス等ー (7) 集会・文化活動、行事など (8) 利用対象者別サービス①障害者、障害児への支援活動 (9) 利用対象者別サービス②高齢者、未成年者、外国人への支援活動 (10) 地域社会への支援活動ー課題解決支援、ビジネス支援等 (11) 図書館マーケティング活動ー利用者の交流の場としての図書館ー (12) 図書館経営ー図書館サービスとマネージメントー (13) 図書館サービスと著作権 (14) 人的資源と図書館サービスー接遇、コミュニケーションなどー (15) 図書館サービスの連携とネットワーク</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『図書館サービス論』(JLA 図書館情報学テキストシリーズⅡ-3)日本図書館協会発行、2010年 ¥1890		出席(授業参加)(15%)、小テスト2回(30%)、期末試験(55%)	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

11年度以前	情報サービス論 a	担当者	福田 求
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【目的】</b> 本講義での情報サービスとは、図書館の情報提供機能を具体化するサービス全般のことをいうが、これにはレファレンスサービスやカレントアウェアネスサービス、さらには CD-ROM やオンラインの検索サービス等、さまざまなサービスが含まれる。本講義ではこの情報サービスの総合的な理解を目指す。</p> <p><b>【概要】</b> 図書館の情報サービスについての基本的な事項を解説する。より具体的には授業計画を参照のこと。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション：受講者の確認。授業方法等について説明。</li> <li>2 情報サービスの概要と実際（ビデオ鑑賞等）</li> <li>3 レファレンスサービス</li> <li>4 利用案内</li> <li>5 レフェラルサービス、カレントアウェアネスサービス</li> <li>6 検索サービス</li> <li>7 前半部分のまとめ。質問受付。</li> <li>8 獨協大学図書館の情報サービス</li> <li>9 発展的情報サービス</li> <li>10 情報サービスで用いる情報源の類別</li> <li>11 レファレンスコレクションの構築・評価</li> <li>12 情報サービスにおけるコミュニケーション</li> <li>13 レファレンスサービスの記録と事例</li> <li>14 最新の情報サービス</li> <li>15 授業全体のまとめ。質問受付。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
適宜指示する。		期末試験（筆記試験またはレポート）。これに平常点を加味する。	

11年度以前	情報サービス論 b	担当者	気谷 陽子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 情報の専門家として必要なスキルを養成するために、各種のレファレンスツールを用いたレファレンス調査や発信型情報サービスの演習をとおし、レファレンスサービスの実践的な能力を育成する。</p> <p><b>講義概要</b> 多様な分野のレファレンス調査や発信型情報サービスに関する演習を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. レファレンスサービスの実際</li> <li>2. 図書情報を探す</li> <li>3. 雑誌記事の情報を記録する</li> <li>4. 雑誌記事を探す</li> <li>5. 新聞記事を探す</li> <li>6. 言葉を探す</li> <li>7. 事柄を探す</li> <li>8. 統計を探す</li> <li>9. 歴史を探す</li> <li>10. 地理・地名・地図を探す</li> <li>11. 人物・企業・団体を探す</li> <li>12. 法律・判例を探す</li> <li>13. 特許を探す</li> <li>14. レファレンスブックを評価する</li> <li>15. 発信型情報サービス</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
原田智子ほか著 『情報サービス演習』現代図書館情報学シリーズ7 樹村房 2012		出席、提出物、期末試験を総合的に評価する	

11年度以前	情報検索演習	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】必要な情報を効果的に選択・入手する行為としての情報検索について理解を深める。特に、コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を、解説および実習を通して体得する。</p> <p>【概要】本講義ではまず、情報検索に関する基礎的な概念について解説する。そしてその知識を踏まえた上で、実際の情報検索技術に慣れ、習熟するために、ウェブ上の検索エンジンや CD-ROM データベース、商用オンラインデータベースを用いた情報検索の実習を行う。実習では可能なかぎり、受講者が今後の調査／研究活動で利用できるような情報源を紹介する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション；情報検索の概要</li> <li>2 情報検索の種類と歴史</li> <li>3 データベース</li> <li>4 情報検索できないときの対処法</li> <li>5 索引語</li> <li>6 シソーラス</li> <li>7 前半部分のまとめ；質問受付</li> <li>8 獨協大学図書館で利用できるデータベース (1)</li> <li>9 情報検索関連作業のプロセス：索引作成</li> <li>10 情報検索関連作業のプロセス：業務としての検索</li> <li>11 検索式 (1)</li> <li>12 検索式 (2)</li> <li>13 検索結果の評価</li> <li>14 獨協大学図書館で利用できるデータベース (2)</li> <li>15 授業のまとめ；質問受付</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
適宜指示する。		期末試験（筆記試験またはレポート）。これに平常点を加味する。	

11年度以前	情報検索演習	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
(半期完結科目のため、講義目的等は春学期と同じ)			
テキスト、参考文献		評価方法	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

11年度以前	情報検索演習	担当者	堀江 郁美
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>情報検索の基本的な理論を学び、実習する。</p> <p>まず、情報検索の歴史、情報の入手方法、主題分析、検索キーの作成、データベースといった諸項目と、情報要求、検索式、検索結果の評価といった諸項目を順に解説する。</p> <p>検索式の解説では、ブール演算子とトランケーションを用いた情報検索の表現方法を、実際の検索および結果の評価では、再現率と適合率等について学ぶ。</p> <p>実践的な情報検索能力を養うために、オンライン検索ではインターネット上の各種情報検索システムをできるだけ活用する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス：情報検索とは</li> <li>2 情報検索(1)：情報検索システム</li> <li>3 情報検索(2)：情報検索の理論：ブール演算子</li> <li>4 情報検索(3)：情報検索の理論：トランケーション</li> <li>5 情報検索(4)：情報検索結果の評価</li> <li>6 データベース(1)：データベースと情報検索</li> <li>7 データベース(2)：データベースシステムと諸項目</li> <li>8 インターネットの情報検索(1)：検索エンジン</li> <li>9 インターネットの情報検索(2)：Web情報の探し方</li> <li>10 インターネットの情報検索(3)：リンク集の作り方</li> <li>11 検索実習(1)：図書の検索</li> <li>12 検索実習(2)：雑誌・新聞記事の検索</li> <li>13 検索実習(3)：人物・企業・団体情報の検索</li> <li>14 検索実習(4)：法律・統計・特許情報</li> <li>15 情報検索まとめ</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
原田、江草、小山、沢井共著『情報検索演習』新・図書館学シリーズ6、樹村房、2007(3訂)		2～3回程度のレポートおよび出席、期末試験を総合的に評価する。	

11年度以前 12年度以降	図書館資料論 図書館情報資源概論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(講義目的・ねらい)</p> <p>図書館で所蔵される資料の種別と選択、保存と更新、さらに電子資料やネットワーク情報源などの幅広い資料について理解し、図書館および資料に関する基本的な専門用語について理解して説明でき、また、図書館資料の現状と課題について知識があり、それらについて自分の考えを述べるができるようになる。</p> <p>(講義概要)</p> <p>印刷資料・非印刷資料・電子資料とネットワーク情報資源からなる図書館情報資源について、類型と特質、歴史、生産、流通、選択、収集、保存、図書館業務に必要な情報法資源に関する知識等の基本を解説する。</p>		<p>(1). 図書館資料の定義 UNIT 1～4</p> <p>(2). 図書館における知的自由、検閲と焚書 UNIT27～30</p> <p>(3). 印刷資料メディアと非印刷資料メディアの類型と特質 UNIT5～12</p> <p>(4). 電子資料メディアの類型と特質 UNIT13～17</p> <p>(5). 特殊資料や専門資料メディアの類型と特質 UNIT18～20</p> <p>(6). 地域資料、行政資料、灰色文献など UNIT18～20</p> <p>(7). 出版・流通・販売に関する基本的知識 UNIT23～26</p> <p>(8). 人文科学・社会科学分野の基本的資料 UNIT21</p> <p>(9). 自然科学・技術分野の基本的資料 UNIT22</p> <p>(10). 著者と著作権</p> <p>(11). 図書館資料コレクション選択と理論 UNIT31～38</p> <p>(12). 図書館資料コレクション形成方針策定 UNIT31～38</p> <p>(13). コレクション形成の実務 UNIT39～43</p> <p>(14). コレクション形成の実務 UNIT44～47</p> <p>(15). メディア転換と資料の保存・廃棄・更新 UNIT48～50</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
『図書館情報資源概論』(JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ8)日本図書館協会発行、2012年12月¥1900		授業参加(出席含む)(10%)、数度の課題と小テスト(30%)、定期試験(60%)	

11年度以前 12年度以降	専門資料論 図書館情報資源特論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>&lt;ヤングアダルト向け図書館資料概論&gt;</p> <p>(目標・目的・ねらい)</p> <p>未成年の図書館利用者向けの「児童サービス論」で概観した資料について、さらに詳しく学ぶ。特にヤングアダルト向けの多様な資料の出版状況について把握する。学校図書館や公共図書館での所蔵資料の選択や提供を考え、現状と課題を学ぶ。</p> <p>(講義概要)</p> <p>小学校高学年から高校向けの古典作品や現代作品を読み、10代読者と読書の傾向を社会の動きや心理学などの分野から考察する。また、学校での調べ学習や「総合的な学習」など課題解決型学習の方法としての資料についても把握する。さらに、まんがやアニメ、電子書籍など多様な資料についても考える。「読む」「書く」ことのできる図書館という場所が支援できる資料について実際の例をふまえていく。</p>		<p>(1) 10代の読書と読者。社会学・発達心理学・読書心理などから考える。</p> <p>(2) 10代の読書傾向。ローティーンとハイティーン読書傾向。</p> <p>(3) いままで読まれてきた古典作品を読む。</p> <p>(4) 古典と現代作品の比較分析。</p> <p>(5) 現代の10代に人気がある作品を読む。読者と出版。</p> <p>(6) 10代に人気がある作品を読む。「問題小説」を読む。</p> <p>(7) 10代に人気がある作品を読む。「ライトノベル」を読む</p> <p>(8) 図書館で読まれる作品・読まれない作品の傾向。</p> <p>(9) 多様な資料を読む。雑誌、まんが、アニメなど。</p> <p>(10) 多様な資料を読む。調べるための資料や10代が求める生活情報資料など。</p> <p>(11) 読書プロモーション。展示やブログ、ブックトークやアニメーションなど。ブックバトルは効果的か？</p> <p>(12) 読書プロモーション。読書会 創作など。</p> <p>(13) 10代向けブックリストあるいはパスファインダーの作成。</p> <p>(14) 10代向けブックトークの実演。</p> <p>(15) 読書の場所としての図書館の役割。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
資料を配布する。また、10代向け資料を数多く読んでもらうことになる。		出席+授業参加(45%)、課題(55%)で評価する。授業内での演習課題が中心となる。	

11年度以前	資料組織概説	担当者	小黒 浩司
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>○ 講義の目的 図書・逐次刊行物など多様な図書館情報資源の組織化の理論と技術について概説し、資料組織演習での学習に備える。</p> <p>○ 講義の概要 書誌コントロール、書誌記述法、分類法、主題分析などについての基礎知識を修得する。ネットワーク情報資源など多様な情報資源の組織化、書誌データの活用法を解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の進め方</li> <li>2. 情報資源組織化の意義</li> <li>3. 書誌コントロール</li> <li>4. 標準化</li> <li>5. 記述目録法</li> <li>6. 書誌データの活用・提供</li> <li>7. 書誌ユーティリティ</li> <li>8. 目録法の種類</li> <li>9. 主な目録法</li> <li>10. 分類法の種類</li> <li>11. 主な分類法</li> <li>12. 図書記号</li> <li>13. 主題分析</li> <li>14. 主題索引</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>○ 教科書 志保田務、高鷲忠美編著・平井尊士共著『情報資源組織法』(第一法規、2012年)</p> <p>○ 参考書 日本図書館協会編『日本十進分類法. 新訂9版』(日本図書館協会、1995年) 日本図書館協会編『基本件名標目表. 第4版』(日本図書館協会、1999年) 日本図書館協会編『日本目録規則. 1987年版改訂3版』(日本図書館協会、2006年)</p>		<p>期末試験の結果によって評価するが、平常授業における実績も評価対象とする。</p>	

11年度以前	資料組織演習	担当者	小黒 浩司
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>○ 講義の目的 情報資源の組織化に関する技術について、演習形式で学習する。多様な情報資源に関する書誌データの作成、主題分析、分類作業、統制語彙の適用、メタデータの作成などの演習を通じて、情報資源組織業務についての実践的な能力を養成する。</p> <p>○ 講義の概要 書誌データの作成、主題分析、分類作業、統制語彙の適用などの演習を通して、情報資源組織業務について実践的な能力を養成する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業のガイダンス</li> <li>2. 日本十進分類法新訂9版(NDC9)の概要</li> <li>3. NDC9分類規程</li> <li>4. 主題分析</li> <li>5. NDC9分類記号の付与(人文科学)</li> <li>6. NDC9分類記号の付与(社会科学)</li> <li>7. NDC9分類記号の付与(自然科学)</li> <li>8. 基本件名標目表第4版(BSH4)の概要</li> <li>9. BSH4件名規程</li> <li>10. BSH4件名標目の付与</li> <li>11. 日本目録規則1987年版改訂3版(NCR3R)の概要</li> <li>12. NCR3R総則・通則</li> <li>13. NCR3R書誌的事項(タイトル～版に関する事項)</li> <li>14. NCR3R書誌的事項(出版頒布等～注記に関する事項)</li> <li>15. 標目</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>○ 教科書 志保田務、高鷲忠美編著・平井尊士共著『情報資源組織法』(第一法規、2012年)</p> <p>○ 参考書 日本図書館協会編『日本十進分類法. 新訂9版』(日本図書館協会、1995年) 日本図書館協会編『基本件名標目表. 第4版』(日本図書館協会、1999年) 日本図書館協会編『日本目録規則. 1987年版改訂3版』(日本図書館協会、2006年)</p>		<p>演習(小テスト)の結果によって評価するが、平常授業における実績も評価対象とする。</p>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

11年度以前 12年度以降	児童サービス論 児童サービス論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(講義目的・ねらい) 子どもやヤングアダルトと称せられる10代の図書館利用者(潜在的利用者)に対する戦略的で効果をあげるべき図書館プログラムを企画・実施し、評価に耐えうる内容を考えられる専門職としての児童・YA担当司書を養成することを目的とする。さらに幅広く、多くの児童書やYA向け資料を読み、評価し、子どもたちに伝えられるようになることを目標とする。</p> <p>(講義概要) (1) 図書館サービス対象者である子どもやヤングアダルトについて知る、(2) 図書館資料としての子どもやYA向け資料について知る、(3) 図書館サービスとして子どもやYAと資料とを結びつける活動の企画や実施、評価方法について知る、(4) 地域や学校などの協働活動について知る、ことを学習する。</p>		<p>(1) 図書館の意義と使命 (2) 民主主義社会と図書館の役割 (3) 図書館における児童・ヤングアダルトサービスとは何か UNIT1, 10-11, 18-20 (4) 地域社会における「子ども」のイメージは何か (5) 乳幼児サービスと乳幼児向け資料 UNIT12 (6) 小学校など児童対象の図書館サービスと学齢期児童向け資料 UNIT2-9, 13-15 (7) 中学校や高校など10代のヤングアダルト対象の図書館サービスと資料 UNIT21-22, 16-17 (8) 児童・YA図書館活動の歴史 (9) 子どもをとりまく大人への図書館活動 UNIT23-25 (10) アウトリーチ・サービスと子どもたちの知的自由 UNIT20, 23-25 (11) 図書館活動をめぐる諸問題—法律と政策、インターネットなど— UNIT23-25 (12) 図書館活動推進のための企画・立案、年間計画策定など UNIT18-20 (13) 児童やYA向けの図書館建築における設備など UNIT19 (14) 児童・YA図書館活動における現状と将来 (15) 実践とまとめ</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
『児童サービス論』(JLA 図書館情報学テキストシリーズII(1))日本図書館協会発行、2009年¥1200 ※ほかに多くの子ども向け絵本や物語等を読んでもらうことになる。 (参考)『図書館概論』(JLA 図書館情報学テキストシリーズIII(1))日本図書館協会発行、2012年12月発行、¥1995		授業参加(出席を含む)(10%)、授業内実施の小テスト(30%)、数度の課題(60%) ※授業開始までにはできるだけ多くの児童書やYA文学等を読んでおくといよい。	

11年度以前 12年度以降	図書及び図書館史 図書・図書館史	担当者	小黒 浩司
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>○ 講義の目的 図書館の情報資源と図書館の歴史について発展的に学習し、理解を深める。</p> <p>○ 講義の概要 図書をはじめとする各種図書館情報資源の形態、生産、印刷、普及、流通などの歴史を概説する。また、図書館の歴史的発展について解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業のガイダンス</li> <li>2. 紙以前の記録媒体</li> <li>3. 紙の発明と西伝</li> <li>4. 図書の形態史</li> <li>5. 印刷の歴史</li> <li>6. 雑誌・新聞の歴史</li> <li>7. 印刷技術の進歩</li> <li>8. 記録媒体の多様化</li> <li>9. 大量印刷の時代</li> <li>10. マスメディアの誕生</li> <li>11. 図書館の源流</li> <li>12. 図書館の発達</li> <li>13. 近代公共図書館の誕生</li> <li>14. 近代公共図書館の発展</li> <li>15. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
小黒浩司編著『図書・図書館史』（日本図書館協会、2013年、JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ）		期末試験の結果によって評価するが、平常授業における実績も評価対象とする。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

12年度以降	図書館基礎特論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(目標・目的・ねらい)</p> <p>「図書館概論」などで学習した内容をふまえ、さらに公立公共図書館などでの利用者サービスの実例を確認し、受講者が各自で設定したテーマにしたがって調査研究をすすめる。その時々において図書館界や出版界などで話題になったことを主にとりあげて議論していく。</p> <p>(講義概要)</p> <p>「図書館概論」などで学習した内容をふまえ、公立公共図書館などでの利用者サービスの実例をふまえつつ、受講者が各自で設定したテーマにしたがって調査研究をすすめる。その時々において図書館界や出版界などで話題になったことを主にとりあげて議論していく。ケース・スタディとして多様な実例をあげつつ、演習を中心として学習する。</p> <p>※受講者自身が調査し、分析し、積極的な発言議論によって構成される科目である。統計データの収集や現地図書館へ赴いてのフィールドワークによる資料にもとづく課題を作成してもらうことになる。</p>		<p>(1) 図書館種別からみた図書館サービスや資料構築の概観。</p> <p>(2) 資料の変化にともなう課題－電子書籍等の出版と活用</p> <p>(3) ケース・スタディとしての議論－日本と海外での現状</p> <p>(4) 資料の変化にともなう課題－視聴覚資料等－</p> <p>(5) ケース・スタディとしての議論①</p> <p>(6) 利用者の変化にともなう課題－超高齢者増加社会での図書館活動等(シニア・サービス)－</p> <p>(7) ケース・スタディとしての議論②</p> <p>(8) 利用者の変化にともなう課題－外国人労働者向け活動等(多文化サービス)－</p> <p>(9) ケース・スタディとしての議論③</p> <p>(10) 利用者のニーズ変化にともなう課題－ビジネス支援と失業者支援等(ビジネス支援サービス)－</p> <p>(11) ケース・スタディとしての議論④</p> <p>(12) 利用者のニーズ変化にともなう課題－健康情報支援と保健所等との共同(消費者健康情報提供サービス)－</p> <p>(13) ケース・スタディとしての議論⑤</p> <p>(14) 受講者から提示した実例と課題</p> <p>(15) 受講者から提示した実例と課題についての議論。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>テキストは指定しない。必要に応じて授業で配布する。参考文献として「図書館概論」「図書館サービス概論」で活用したテキストなどを利用する。</p>		<p>出席+授業参加(60%)、課題(40%)で評価する。</p>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

12年度以降	図書館サービス特論	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(目的・目標・ねらい) 「図書館サービス概論」「児童サービス論」で学習した内容をふまえ、小学校から高校の学校図書館を対象としての図書館サービス活動について学習する。図書館専門員(学校司書)としての業務内容を把握する。</p> <p>(講義概要) 幼稚園から高校を対象としての学校図書館での資料選択や調べ学習や総合学習などのレファレンス業務、さらにパスファインダーなどの作成を通じて、積極的な資料情報探索方法を司書教諭との連携によって行うことを、演習を通じて学ぶ。学校ボランティアや教師集団とのコーディネートについても考えていく。</p> <p>※学校図書館司書をめざす人のための科目です。教職課程に登録している必要はまったくありません。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 学校図書館と公共図書館</li> <li>(2) 学校教育と学校図書館</li> <li>(3) 司書と司書教諭、教師集団について。学校司書の役割</li> <li>(4) 学校内での学校図書館建築・設備。情報処理教室などとの連携</li> <li>(5) 学校図書館のコレクション構築。ブックリスト等の作成</li> <li>(6) 学校図書館での資料選択・提供</li> <li>(7) 学校図書館における資料の分類と目録化作業</li> <li>(8) 貸出業務。学校図書館システム化から地域ネットワークへの参加</li> <li>(9) 読書指導と学校図書館の役割。ブックトークなど</li> <li>(10) 情報活用教育と学校図書館の役割</li> <li>(11) 情報リテラシー教育と学校図書館の役割 学校図書館におけるレファレンス業務。</li> <li>(12) パスファインダーの作成など</li> <li>(13) 地域学校図書館センターと学校図書館</li> <li>(14) 学校図書館における知的自由を考える</li> <li>(15) 地域と学校図書館</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>(テキスト)『学校図書館、まずはこれから(シリーズはじめよう学校図書館1)』全国学校図書館協議会発行、2012年 ¥840 (参考文献)『学校図書館・司書教諭講習資料 第7版』全国学校図書館協議会編・発行、2012年 ¥2310</p>		出席+授業参加(30%)、小テスト(30%)、期末試験(40%)で評価する。	

03年度以降	学校経営と学校図書館	担当者	井上 靖代
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(授業の到達目標及びテーマ) 学校図書館司書教諭は学校図書館長として、資料管理・情報管理や人事管理など経営者としての役割と仕事が求められる。学校図書館を活用し、総合的な学習など創造的な授業を構築する教員集団の援助活動も求められている。この科目では、これらの役割について、内容を把握し、その使命を認識し教育現場で実施できるようになることを学習目的とする。</p> <p>(授業の概要) 学校図書館は資料センターとしての機能だけでなく、学校教育を基礎として生涯にわたっての自律的な学びの場として学習センターとしての機能がある。さらに視聴覚資料センター、情報センター、教材開発センター、マルチメディア・センターなど多様な面をもっている。学校教育に不可欠と法的に位置づけられている学校図書館の役割と意義について講義する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 学校図書館の理念と教育的意義</li> <li>(2) 学校図書館の発展と課題</li> <li>(3) 教育行政と学校図書館</li> <li>(4) 学校図書館の経営①施設管理</li> <li>(5) 学校図書館の経営②資料管理</li> <li>(6) 学校図書館の経営③人事管理</li> <li>(7) 学校図書館の経営④財政管理、評価等</li> <li>(8) 司書教諭の役割と校内の協力体制、研修</li> <li>(9) 学校図書館メディアの選択と管理</li> <li>(10) 学校図書館メディアの提供と活用</li> <li>(11) 学校図書館活動と教育活動</li> <li>(12) 調べ学習や「総合的な学習」と学校図書館</li> <li>(13) 図書館の相互協力とネットワーク</li> <li>(14) 学校図書館運営計画の策定</li> <li>(15) まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
最初の授業時に参考文献リストを配布する。		出席＋授業参加(15%)、レポート2回(40%)、試験(45%)	

03年度以降	学校図書館メディアの構成	担当者	井上 靖代
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(授業の到達目標)学校図書館メディア・センターでの資料管理についての以下の分野で講義・実習。</p> <p>(1) 資料選択。どのような資料が授業で活用できるのか、どのような資料がどの年齢層あるいはどのような興味関心を持っている子どもに薦められるのか、などについて選択理論をおさえ、専門職としての資料選択力を身につけることを目的とする。</p> <p>(2) 資料組織化の実習および運用。学校図書館メディア・センターにはどのような資料を所蔵するのか、それをどのように分類・目録化し、データベース化するのかの基本を学び、実習する。</p> <p>(授業の概要)資料選択力を身につける講義及び演習を実施するほか、資料組織化に関する分野で、実習中心で、学校図書館メディア・センターにはどのような資料を所蔵するのか、それをどのように分類・目録化し、データベース化するのかの基本を学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>第1回: 図書館での資料整理の目的と意義</li> <li>第2回: 学校図書館メディア資料の種類と特性</li> <li>第3回: 資料選択の理論、子どもたちの知的自由</li> <li>第4回: 資料選択の実際</li> <li>第5回: 日本十進分類法 (NDC) の構造</li> <li>第6回: 分類の実際—主題同定作業⇒情報検索語の特定</li> <li>第7回: 分類の実際—一般補助表の活用—</li> <li>第8回: 分類の実際—学習に応じた分類</li> <li>第9回: 日本目録規則 (NCR) の構造</li> <li>第10回: 目録化の実際 図書</li> <li>第11回: 目録化の実際 図書以外の資料</li> <li>第12回: 目録化の電子化 テキスト・ファイルからデータベース化へ</li> <li>第13回: 目録と情報検索との相関関係</li> <li>第14回: 目録検索の実際</li> <li>第15回: まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
日本図書館研究会編『図書館資料の目録と分類 増訂第4版』2008年		出席、ほぼ毎回の演習課題、テスト演習で評価する。	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	学習指導と学校図書館	担当者	井上 靖代
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>(授業の到達目標及びテーマ) 学習指導における学校図書館のメディア活用についての理解を図る。また、学習指導要領の改訂による「総合的な学習」で、学校図書館の活用が明記されており、その内容にそって、児童・生徒たちの主体的なメディア活用能力の育成を目的とした授業を援助する学校図書館司書教諭の役割を理解し、実践する講義内容とする。</p> <p>(授業の概要) 教科指導のなかで、あるいは「総合的な学習」で、学校図書館と図書館資料、情報メディアを活用して、どのような指導が行えるか、指導教案作成をおこなう。さらに、児童・生徒たちにしらべてもらうために、教師自身が情報探索能力をみにつけておくことが求められるので、情報探索活動能力(情報リテラシー)養成を目標とする。グループでの討論を基本に、指導計画作成・発表をおこなう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 導入:情報探索・情報探求とは?課題解決型学習と学校図書館</li> <li>(2) 学校図書館情報メディア活用能力の育成</li> <li>(3) 学習過程における学校図書館メディア活用の実際</li> <li>(4) 情報探索能力育成 レファレンスと調べ学習</li> <li>(5) 情報探索能力育成/レファレンスツール利用</li> <li>(6) 情報探索能力育成/インターネット利用</li> <li>(7) 情報探索演習</li> <li>(8) 情報探索能力育成のための教育課程</li> <li>(9) 各教科(社会や英語など)で学校図書館メディアセンターを利用する教育指導案作成</li> <li>(10) 「総合的な学習」で学校図書館メディアセンターを利用する教育指導案作成</li> <li>(11) 特別活動などでの学校図書館メディアセンター利用の活動企画</li> <li>(12) 学校図書館メディア・センター管理運営年間計画策定</li> <li>(13) 教師集団との協働</li> <li>(14) PTA/PTOや地域社会との協働</li> <li>(15) 教育指導の実際-各受講者の発表・報告-</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
授業で資料を配布するほか、参考資料として、宅間紘一著『学校図書館を活用する学び方の指導：課題設定から発表まで』全国学校図書館協議会、2005 ほか。		出席と授業参加(15%)、個人で提出するレポート(20%)、グループでの報告と発表(40%)、小テスト(25%)などで総合的に評価	

03年度以降	読書と豊かな人間性	担当者	井上 靖代
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(授業の到達目標及びテーマ) 読む・書くという意味での読書をいかに子どもたちを楽しみながら、自分の言葉で自分を表現できるようにするかを実際に子どもの本を読みながら、授業として構築していく。講義と実習を組み合わせる。この科目の目標は、各受講者が「読む」(リーディング)と「書く」(リテラシー)という読書力養成を目的とする授業を構築し、学習者に教授できるようになることにある。「読む」「書く」ことを伝える授業案が作成できるようになることを第一段階とする。その基本として司書教諭となる受講者が「読書」していることが出発点となる。</p> <p>(授業の概要)大量に読むことではなく、どのように読み解くかを授業で学ぶ。また、どのように伝えていくかを学ぶ。言語教育・リテラシー学習の基本の一つである子どもの読書を推進するため、学校教育のなかで言語教育担当教員のみならず、すべての教員の調整役＝コーディネーターとしての学校図書館司書教諭は重要な役割を担っている。この科目ではその役割をはたすため、どのような読書資料があるのか、そしてその読書資料をどのように言語教育やリテラシー教育に活用するのかを学び、かつ学校内外での調整役としての役割と責任を学習する。</p>		<p>第1回： 子どもの読書状況 第2回： 読む・書くという識字力・読書力について考える 第3回： 子どもの発達心理・読書心理、読書傾向と知的好奇心 第4回： 読書資料としての絵本 第5回： 読書資料としての児童文学 第6回： 読書資料としてのノンフィクション 第7回： 読書資料としてのヤングアダルト文学 第8回： 読書指導のためのプログラム検討 第9回： 読者育成のための教案作成 第10回： 「読みて」から「書いて」育成のための教案作成 第11回： 家庭での読書 第12回： 地域社会や公共図書館との連携による読書振興 第13回： 子どもの読書と知的自由 第14回： 子どもの読書をめぐる法政策 第15回： まとめ</p> <p>※絵本や児童書・YA向けの読物などを多量に読んでもらうことになる。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しないが、授業で資料を配布する。		出席、課題、テストで評価する。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降	情報メディアの活用	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】学校教育においてその重要性が再認識され新たな役割を担うことが期待され始めた学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る。</p> <p>【概要】まず、現在までの情報メディアの発達と変化を検討し、現代社会が高度情報社会であることを確認する。 また、各種情報メディアの特性について概観した後、学校教育の目的や状況に応じてどのようなメディアを選択すべきかを考察する。 次に、情報教育を情報の発信・収集・交換という3つの視点から整理し、それぞれの具体的なあり方を実際の情報メディアを用いつつ理解する。 そして、情報メディアの取り扱いについて学校において注意すべき点を、有害性/安全性や著作権との関わりから議論し、最後に講義全体のまとめを行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション：授業方法等の注意事項、情報概念について</li> <li>2. 高度情報社会と学校教育、情報メディアの特性と選択</li> <li>3. 学校教育における視聴覚メディアとコンピュータの活用</li> <li>4. メディアによる情報の発信 (1) ウェブの標準技術</li> <li>5. メディアによる情報の発信 (2) HTMLによる文書作成</li> <li>6. メディアによる情報の交換</li> <li>7. 前半のまとめ：メディアを利用した情報の発信と交換、質問受付</li> <li>8. オフラインデータベース(1) メニュー検索、件名、NDC</li> <li>9. オフラインデータベース(2) コマンド検索、検索式の作成</li> <li>10. インターネットによる情報の検索</li> <li>11. 獨協大学図書館を通じて利用できる多様なデータベース</li> <li>12. 情報検索以外の情報収集：RSSを利用した情報入手</li> <li>13. 学校での取り扱いに注意すべき情報</li> <li>14. 学校図書館メディアと著作権</li> <li>15. まとめ：これからの情報メディアの活用；質問受付</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。		期末試験（筆記試験またはレポート）。これに平常点を加味する。	

シラバス 免許課程

---

2013年4月1日発行

獨協大学教務課

〒340-0042 埼玉県草加市学園町1-1

電 話 048-946-1663



DOKKYO UNIVERSITY

学 科	学年	氏 名
学科	年	